
フラグをたてたいっ！

香多詩路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フラグをたてたいっ！

【Nコード】

N6881K

【作者名】

香多詩路

【あらすじ】

ある青年がフラグが欲しいと願い、空の軌跡というPCゲームの世界に迷い込みフラグを乱立させていくお話です。性転換やTS要素を含むのでそんなことが嫌いな人にはつまらなくなるかもです。空の軌跡2次創作で原作崩壊するとは思いません。

序幕 舞台と挨拶（前書き）

この小説にはオリジナル設定の他、性転換、ガールズラブ、ボーイズラブ、残酷な要素、TS要素が含まれる可能性があります。また、独自解釈、原作とは全く異なる展開になる場合がございます。それを踏まえた上でお読みになり、お楽しみ下さい。

序幕 舞台と挨拶

かたしろつかさ
堅城司：「まるでその時の僕は、シュレーディングアの猫だったかもしれない。」

ピエロ化粧をつけた少年が暗幕の舞台のわきから歩いてくる。舞台の中央に立つと正面を向きペコリと一礼する。

「今宵はお越しいただきありがとうございます。これから演じられる物語は一人の若者がこの大陸に存在した証を述べたものです。ごゆっくりお楽しみくださいませ。」

とふかぶかとして一礼して舞台のわきへと消えていく。ブザーが鳴り響き、暗幕が上がっていく。

序幕 舞台と挨拶（後書き）

初投稿なので誤字、脱字、要望、駄目だし、アドバイス等なんでも
いいので、意見を頂きたいです。

幕前 幕前と乖離（前書き）

導入です。

正直かたしろうここはあまり要らなかつたかもしれなひです。

堅城つかさ 司の性格はお人よしでかつ状況に流されるような人です。

幕前 幕前と乖離

20XX年、日本にて

少しやせ形の青年『名は堅城かたしろ 司つかさ』がマンションの一室でク スデイズをやりつつつぶやいた。

「バールのようなもの！ コト ハサマキタ

（。 。）

！！！！！！

僕もこの主人公じゃないけど……フラグとか立てられないかなあ。まあ、こんな死にフラグは嫌だけどね。」

その時、扉がガチャッと開いて、少し小太りの男『丹生藤 健（ニウフジ タケル）』が入ってきた。

「よお、つかさ。」

「わわっ、タケル。いきなり入ってこないでよ…親が来ていきなり死亡フラグ立ったのかと思ったよ。」

とウィンドウを切り替えようとする手を止めた。

「おっ、もう新作ゲームやっているのか……どうなの？ B L ルートとかあって俺は今のところ保留だが。なにせあそこのゲームはバグの修正も毎回……。」

「いいじゃないか……好きなんだから。」

「あんまりやりすぎてまたパソコン壊すなよ……俺がまた直す羽目になったらたまらんからな。」

といつつつ、司が画面に目を戻したのを見て健は冷蔵庫の中の司手製のガトソーシヨコラを一口で丸？みした。

「うっ、わかったよ。あの時はほんとにありがとう。そういえば、このパソコンの脇に張ってあるお札って君の実家って確か神社だっけ？」

「うっ、（トントンと胸を叩きつつ）ああ、ただ俺の作ったやつだからあまり効果ないかも知れんがな……気休めだ。用事も済んだことだし、俺はこれで帰るわ。ごちそうさま、じゃあな。」

と扉から出ていく。

「ごちそうさまって、あつ、またちよろまかして、まったくもう。さて、続き続きっと。」

その瞬間、何か閃光のようなものが走り、僕は気を失ってしまった。

「おいっ、つかさ、大丈夫か？すぐ近くに雷が落ちた見ただけど……っておい、大丈夫か？」

その時、まさか願いが叶うとか思わなかったのだ。

幕前 幕前と乖離（後書き）

こんなに制限しちゃったら読んでくれる人が減っちゃうよね。
なんでこんなに制限しちゃったんだろう

序章 1話 開幕と自己紹介（前書き）

皆さんの小説をみて私も投稿がしたくなつてつい投稿しちゃいました。

でも、楽しんで書くのが一番なので、もし読んでくれる方がいられたら

「ありがとうございます」っていいたいです。

序章 1話 開幕と自己紹介

異世界にて

ヴォンとスイッチが入り数人の影が映し出される。04（ファイア）の素体に対するアクセスが開始されました。最優先事項につきトレスを開始します。少し離れたところにいるピエロ化粧のした少年の影にフォーカスがあたり、

「さあ、パンドラの箱は開かれた。今度こそは面白い舞台になるといいな。」

そして、フォーカスは落ち闇の中に影は消えていく。

僕が目覚めると視界に入ったのは見知らぬ天井だった。

「知らない天井だ……って違う。ここはどこ？」

目をうつすらとあけると、椅子に座つてのぞきこんでいるまるでタンプオポが咲いているようなイメージの可愛い4、5歳ぐらいの銀髪の少女と目が合った。その銀髪の少女はパアツと笑った後、トテトテと扉の向こうの方に駆け出して行った。

「おに〜ちゃん、おね〜ちゃんが目を覚ましたよ。」

「あつ、待って。」

すぐにボタンツと扉が開き、優しい目をした体つきはしっかりしている銀髪で群青色の瞳の15、6歳ぐらいの少年が駆けつけて来た。

「やっと目を覚ましたんだ、カナン。」

と目を潤ませながら手を握ってきた。

「ちよつ、ちよつと待つて、とにかく僕はカナンという名前じゃないよ。状況が分からないからあなたたちが誰か、ここはどこか教えてもらえないかな？」

「覚えていないのかい？」

すごく残念そうな顔をその銀髪の少年はした後、

「では、改めて俺の名前は、『ロベルト＝アイヒマン』、この子が妹の『ララ＝アイヒマン』だ。」

「よろしくね。おねちゃん。」

「そして、ここはエレボニア帝国のデミアという村であの山を越えれば向こう側は別の国だ。」

「えっと、僕の名前はこの国風というとツカサ＝カタシロだよ。」

「この国風って……君って名前からして東方の生まれなのかい？……それにしてもカナンによく似てる。」

とマジマジと見つめてくる。まったくこっちが恥ずかしいや。とにかく誤解は解かないとね。首をフルフルと振りながら答えようとした。だが、奇妙なことにブロンドの髪が視界に入ってくる。

「違うよ。って、ええっ！ …………… 顔を写せるものってないかな？」

「はい、手鏡だよ。おねーちゃん。」

と背伸びして手渡してくれた。

「ありがとう、えっとララちゃん。」

と、頭をなでなであげると、目を細めて喜んでいた。

「どづいたしまして。えへへっ、ほめられちゃった。」

改めて、じっくりと自分の姿を写してみると、どうやら彼らのいうことは本当らしい。ブロンドで碧眼の愛嬌のあるボーイッシュな14、5歳の女の子という感じだった。擦り傷が何箇所もあったが、きちんと包帯で手当てされていた。そして、夢かと思ってほっぺたをつねってみてもやっぱり痛いらしく。

「夢かと思ったけど。違うなら、ゲームや小説なら召喚の儀式で呼び出されたかカナンさんという人との精神交換か憑依現象といった

ところかな。」

と、彼らには聞こえないようにため息をついた。

「ただ、とにかく君はカナンではないということにはわかった。けど、しばらくはカナンの振りをした方がいいと思うんだ。最近狩りをやっていると、魔獣たちの動きも活発になってきているし、それに、なにやら国境付近もきな臭くなっているらしい……。国境あたりの兵士がピリピリしていたってこの前、行商人のケルンさんが言っていたんだ。なぜなら、他国から来たと言ったら兵士に捕まえられる可能性もあるんだ。」

「ララもおねちゃんと一緒にいい。」

「ロベルトさん、ララちゃんありがとう。できれば、色々教えて欲しいな。」

そういつて、ロベルトさんの方を見上げてニコリとほほ笑んだ。そうすると、ロベルトさんはなぜか耳を真っ赤にしてそのあと、

「俺に出来ることなら。」

と言ってくれた。

「まず、夕飯でも食べながら、話そうか。」

いきなりベッドから起き上がったせいか、足がふらつき倒れそうになる所をロベルトがとっさに抱きとめてくれた。

「あっ、ありがとう。」

ぱつと離れると、ロベルトさんは残念な顔をしているように見えた……。まさかフラグでも立ってしまったとか……まさかね。

「大丈夫かい？もし、きついようなら後にするが」

「大丈夫、大丈夫っ。やっぱりご飯を食べないと元気がでないしね。」

序章 1話 開幕と自己紹介（後書き）

フラグって本当にたてられるのかなあ……。

文章書くのって本当に難しい、何度か読み返してみても
自分自身の死亡フラグにしかなりそうもないです><

序章2話 食事と状況把握（前書き）

今回は説明だけなので、読むのが面倒な人は次の話にまとめていますので

飛ばしても一応わかるようにはなるかもです。

ちなみに『ハーメルンの悲劇』とは簡単に言うと戦争の戦端を開く口実のために村の人を全滅させ、相手の国（リベール王国）側のせいにするために起こった悲劇です。そして、『ブレイサー（正遊撃士）』とはいわゆる何でもやさんや分かる人には冒険者に近いものだと考えてもらえればいいかと思えます。ただ、正遊撃士になる前に準遊撃士と呼ばれる見習いのようなものの期間を経てなることとなります。

序章 2話 食事と状況把握

夕飯は豆を塩で茹でたスープと堅いパン数切れだった。

しかもこれを彼らはごちそうだという。

涙がちよちよぎれそうだ。

「今日はおにぎりちゃん大盤振る舞いだね。おねちゃんも帰って来てくれたからなのかな？」

「（喉をつまらしつつ）そっ、そんなことはないぞ。」

ただ、温かいスープは冷えていた身体を温めてくれた。

ひと心地着くと、二人の方を眺めつつ疑問を色々聞いてみた。

「さっき自己紹介は終わったけど、今度はこの身体つまり、カナンさんについて教えて欲しいんだけど。」

「二人は恋人だよ。」

「ちょっと違うな。もし、カナンがブレイサー（正遊撃士）になればたら戻って言いたいことがあるって言われただけなんだよ。」

「同じことじゃない、ねえ。お手紙のやり取りだってしているだよ。ただ、最近は届かなくなってたから心配してたんだよ。」

「じゃあ、一応確認だけどロベルトさんはカナンさんのことどう思っているの?」

「離れてみて初めて俺はカナンが好きだってわかったんだ!あと、ロベルトで構わないぞ、なんか鼻がむずがゆくてたまらないんだ。」

「もちろん、ララモララで〜。」

「僕もツカサで構わないよ。」

「もしかしたら間違えておね〜ちゃんをおに〜ちゃんが好きになっちゃうかも〜。だって、そっくりなんだもんね。もしかして双子の姉妹だったりするのかな〜?」

「コホンッ。カナンには姉妹や兄弟はいないって言ってたから違うはずだ。」

「まずい、このままでは本当にロベルトとのフラグが立ちそうだし……なんとかせねば……。そうだ、ツンデレ風にいえばどうだろう。」

「コホンッ。とにかくカナンさんの手掛かりをつかむのを手伝っよ。けっ、決してあんたのためを思って言っているんじゃないだからねっ。」

うつうつ、かなり恥ずかしすぎるぞ。ロベルトは僕を見て黙ってしまっただけ……まあ、なんとかあったと思っところ。なんかララちゃんはすごく満面の笑みをしているし……。

「話はそれちゃったけど、今っていつなのかな。向こうの国ってなんていう国かな？」

「えっと、『ティコクレキ』じゃないほうがいいよね。

『シチセイレキ1191ねん』で、むこうのくには『リベルおつこく』だよ。」

リベル王国だって……確か昔やったゲームにあったような………
…そうだ、『英雄伝説6 空の軌跡』だ！昔に一度しかクリアしていないからあまりよくは覚えていないけど王道のRPGだったはず。

「このむらは『デミア』といって30にんぐらいすんでいてね、『ふうしゃ』がおおきいのがとくちょうなんだよ。おもにかりでせいけいをたてているっておとなのひとたちはいつていたよ。ララはこのむらからでたことないからわからないけど、おおきいまちからはかなりはなれているってケルンさんがいつていたよ。」

「ララちゃん、ありがとう。ちょっと重要なことだけど最近大きな戦いって起こったことはあるかな？」

「よくはわからないけど、さいきんはおおきなたたかいはおこっていないはずだよ。たたかいはなんていやだよ。」

「ララちゃん……（頭をなでながら）大丈夫だよ、おねちゃんを守ってあげるからね。」

ふむふむ、どうやら百日戦役だったか、その戦いの少なくとも前らしい。

あと、ハーメルン……いや『ハーメル』だったかそれについて聞いてみないとね。

「もし知っていたらでいいのだけど、『ハーメル』って村は知っているのかな？」

「うん、しらない。ケルンさんだったら知っているかも。」

では、行商人だっけ……ケルンさんに聞いてみるしかないか。あと、聞けることと言ったらカナンさんについてぐらいかな？それから色々ララちゃんに聞いてみた所、カナンさんについては以下のようにだった。

1、カナンさんとロベルトとララちゃんはよく一緒に遊んでいた。

2、カナンさんは1年前に準ブレイサー（準遊撃士）になった。

（ララは小声で）私に秘密だったのだけどその時ロベルトも誘っていたけどララがいたから断ってしまったらしい。そのことを今でもロベルトは悔んでいるらしい。

3、カナンさんとロベルトは文通を続けていたが半年前から途絶えてしまった。

4、カナンさんは南部（この地方）の許可証ができれば晴れてブレイ

サー（正遊撃士）になる程の活躍だった。

5、投擲が得意で動かないものならば百発百中で、集中すれば急所がわかるらしい。

6、村長の娘のリンダさんがロベルトのことが好きでカナンといいライバルだったらしい。

7、ロベルトは村一番の狩人で村長もすぐく買っており、天性の狩人だそうだ。

一応、聞きたいことは聞いたかな。なかなかロベルトが戻って来ないから心配だね。額に手を当てて大丈夫？って聞いたらいきなりはつとなつて椅子から転げ落ちたよ。そして、そのまま皿を洗いに、向こうに行ってしまった。そんなに触られるのが嫌だったのか……今度から気をつけよう。

序章 2話 食事と状況把握（後書き）

次の話で選択肢があります。

もし、ここまで読んでいる方がおられましたら
選択肢を選んで頂けると非常にありがたいです。

序章3話 選択と状況整理（前書き）

この話で選択肢が存在します。

もし、一応、4月10日までに次を投稿しようと考えており

そこまでに皆様のご意見を頂けなければ、自動的に（1）を優先して書いていこうと考えております。

初投稿なのにこんなこととして大丈夫かなあ。

でも、なるべく頑張ります。

序章3話 選択と状況整理

おねちゃんと一緒に寝るってララちゃんがずっと離れてくれなかった。これって犯罪にならないのかなあ。一人の不幸な少女をあえてあえて、見て見ぬ振りをすれば超法規的処置とかってバトルブグラマーの秋山さんだっけってたし、きつと大丈夫っ。そういうするうちに疲れて安心したのか、ララちゃんは眠ってしまった。さて、色々と整理してみよう。

1、空の軌跡の世界

2、百日戦役のおそらくちょっと前の時代

3、デミアという村でリベール王国のすぐ近くのエレボニア帝国内

4、姿はカナンという投擲が得意な少女に類似（本人かも？）

5、ロベルトとララちゃんとは幼馴染で村長の娘のリンダさんとは恋のライバル

6、カナンさんは1年前に村を出てブレイサー（正遊撃士）を目指し、半年前から音信不通

7、カナンさんの手掛かり探すことをロベルトたちに約束

8、ララちゃんを守ってあげてを約束

9、僕は原作『英雄伝説6 空の軌跡』のゲーム知識を1回通して

クリアした程度把握

ぐらいか……もっとゲームを深くやっていればよかった。後悔先に立たず、後に立たず、役に立たずってやつだ。ゲームの進行では、ハーメルンの悲劇と呼ばれることが原因で開戦の原因になるのだったよね。防げるといいなあ。これから行動するに当たって、3つぐらい考えてみたのだけど……どれにしようかな。

(1) 行商人のケルンさんに手紙を渡してレオンハルトさん宛で送る。

(2) 直接、ハーメルンの村に向かう。

(3) 突然何かひらめく(作者注：読者さまからなにか面白い提案あれば採用したいなあ)

カナンさんのことも調べないといけないし、迷っちゃうなあ。

序章3話 選択と状況整理（後書き）

つたない文章ですが、皆さんのご意見お待ちしております。

（3）については全然考えていないので、面白いご意見がありましたら倫理面に反しない限りはやってみたいと考えております。

序章 4 話 記憶と過去の夢（前書き）

選択肢に関係ない部分を先に投稿しておきます。

序章 4話 記憶と過去の夢

セピア色の光景が目の前に浮かぶ。今より若い姿の三人が花一面の原っぱでおいかけてっこをしている。そしてそこでした大切な約束。

『三人でいつかまたこの原っぱで会えますように』

デミア村での様々な記憶が流れ込んでくる。はやり病にかかった時に薬草を取る為に険しい高山にロベルトが出掛けてくれたこと。夏遊びに行った渓谷で溺れそうになったロベルトを助けたこと。一緒になって狩りの仕方を学んだこと。クッキーをララと三等分にして食べたこと。

ロベルトとララの笑顔があれば幸せだった。ずっとこの幸せが続くと思っていた。

しかし現実はず違った。重い税をはらわなければならない、離れ離れにならないといけない。例外はブレイサー（正遊撃士）になること。だからやっと今回の仕事が終わったら伝えることができる。

デモワタシデハモウカナエレナイカラ

セメテフタリガシアワセニナリマスヨウニ

と願った。

序章4話 記憶と過去の夢（後書き）

もうすぐ、2000ユニークに達しそうです。

みなさん、見て頂いてありがとうございます。

さすがにこの次の話は選択肢が関係してきますので、
4月10日までに投稿する予定です。

序章5話 商人と調査開始（前書き）

下の空の軌跡のwikiを見てもらえば、専門用語については分かりやすいと思います。

`http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8B%B1%E9%9B%84%E4%BC%9D%E8%AA%AC%VI%E3%80%8C%E7%A9%BA%E3%81%AE%E8%BB%8C%E8%B7%A1%E3%80%8D`

もしよろしければ、お得なパックもありますので、空の軌跡のFCかSCか3rdのどれか一つでもプレイしていただけるとよく背景情報がわかると思います。

序章5話 商人と調査開始

選択肢：（1）行商人のケルンさんに手紙を渡してレオンハルトさん宛で送る。

朝、目が醒めると涙がしばらく止まらなかった。心配そうにララちゃんが見上げてきたので、思わず抱きしめていたら落ち着いてきたはうゝ、癒される。今ならアネラスさんの言っていた『可愛いものは正義』ってことも納得だね。

朝御飯（具なし塩のスープと昨日の堅いパンの残り）を食べた後、いきなりボタンっと扉が開き、気の強そうな15、6歳ぐらい縦口ールの『リンダ』さんが入ってきた。

「おはようございますですね。ロベルトさん、ララさん、そして…
…珍しいわね、カナン。」

そう言つとつと寄ってきて、

「（小声で）あの約束忘れたわけではないですわよね。」

「何だっけ？」

「（小声で）忘れたとは言わさないわよ。五年前にロベルトさんとワタクシを付き合つのを手助けすることを。」

「そうだっけ？それにそんな前のことはもう時効だよ。」

「あんですって、この泥棒猫。そっちがその気ならばワタクシにも考えがありますわ。」

リンダさんは僕の方から離れて扉の方に向かった。

「そうですね、ワタクシとしたことが用事があることをすっかり忘れてましたわ。ロベルトさん、ではごきげんよう。」

「忘れるなんてもう年なんじゃないの？」

「キーン、覚えてらっしゃい、この泥棒猫。」

といて、扉の方から出て行ってしまった、まったく何をしに来たんだか。

「おねちゃんも大変だね。これってたしかサンカクカンケイっていうんだよね。」

「ちっ、ちがうよっ。」

「でも、まさにカナンそのものだった。その雰囲気なら他の人にもばれにくいな。さて、つかさ、これからどうするつもりなんだ。」

「そうだね、まずは行商人の…ケルンさんだっけ、その人に会ってからちよつと話をしようかとそして、手紙の届けることを頼もうかと考えているんだ。」

「そうか。それと、リンダの親の村長さんにも挨拶しておいた方が

いいぞ。帰ってきたことを伝えたらきつと喜んでくれるぞ。ケルンさんの所と一緒に案内でもしようか？」

「それは、ぜひともお願いしたいな。」

「私もついていく。」

「あつ、そういえば手紙を書くにしても紙もペンもなかったんだ。」

「それなら、これを使うといい。」

と言って、羽ペンとインクと紙を渡してくれた。受け取ったときに手が触れあってしまった。なぜか知らないけど、ドキドキしてしまった、まったく僕は男だって言うのに……。だって、ロベルトが見てるのは僕じゃなくて僕を通してカナンさんを見ているだけなんだから……。

気持ちを切り替えて、手紙にはハーメル村が獵兵団に襲われる可能性が高いのと、その際には絶対にカリンさんと離れてはいけない旨を書いた。そのことでレオンハルトさんやヨシユア君をすごく悲しませてしまうから……。

「よし、ロベルト、ララちゃん、お待たせつ。じゃあ案内をお願いするね。」

「（サムズアップしつつ）ああ、まかせとけ。」

ロベルトの家を出ると日光がまぶしく、きらきらと輝く太陽が寒いなかにもわずかに暖かい陽気を運んでいた。村を見渡してみると、山間の村で大きな風車があるのが見える。その近くに大きな家が見えておそらくそこが村長さんの家だと考えられた。また、村から外れたちよつと遠い所に、村長の家よりも豪華な屋敷が見えた。

「えっと、村長の家はあそこだと思うけど、あの屋敷って何？まさか、どこかの貴族の別荘とか？」

「当たらずとも遠からずだ。あそこは徴税官の家だ。俺たちがこんなに苦労しているのも徴税官であるクダムの野郎がああ館に来てからだ。やつのとまりまきというよりごろつきといったやつらもいて、村にとってはいい迷惑なんだ。」

ロベルトを見るとくやしそうに拳を握りしめている。それと、見て気付いたことだが、ロベルトは弓矢を持っており、案内した後に狩りにでも行くつもりだろうか。僕も、あまりロベルトのご厚意に甘えすぎないようにしないといけないな。

「行きましょう。」

とロベルトのそんな顔は見たくないので気分を切替させるように手を取って歩きだした。

「やめて下さい。困ります。」

と、その時ちよつと遠くから中年の男の声が聞こえてきた。

「ケルンさんの声だ。急ぐつ。」

と言って、手を繋いだまま一緒に走り出した。

行商人のケルンさんの所に着くと、柄の悪そうな男が3人のうちの1人が恰幅のよい商人風の男の胸倉を掴んでいた。

「おうおうおう、いい度胸してるじゃねえか。俺たちがこの村を守ってるから魔獣どもが入ってこないんだぜ。ちつとは感謝の気持ちも示してくれてもいいだろう。ん〜。」

「んつ。」

「さあ、兄貴がおとなしくしている内にさつさと渡した方がよろしいぞんすよ。兄貴が切れると怖いっざんすよ。なにせ血を見るまではとまらないでぞんすから。」

「そつ、そんな殺生な、そんな石ころが5万ミラなんてそんなことしたら商売上がったりますよ。せいぜい1ミラの価値しかないですよ。」

「兄貴の芸術的な作品が分からないなんて、あなたも馬鹿でぞんすね。」

絡まれている人をほつくわけにはいかないや。

「そこまでだ(よ)。」

「なんだ〜、せつかくいいところなのによ、それともなんだ、お

前たちがこのおやじのかわりに5万ミラ払ってくれるということか
っ、あつ。……それとも俺たちとやるつもりなんか……このクソガ
キども。」

「やるっていつなら受けてたつぞ（よ）。」

「いい度胸してやがる、バルン、ザルン適当に可愛がってやれ。」

「んっ。」

「やるでござんす。」

そういうと三人ともナイフを抜いて襲い掛かってきた。男三人は一
箇所に固まっており、3mぐらい離れて僕たち、そしてケルンさん
はお店の影に隠れているみたいだ。

行動：司（チエイン1（二人連携） ゴルン中心） 仮称5万ミラの
石を掴み彼らに投げつけた。

「それじゃ、行くよっ」

行動：ロベルト：「おう」と弓を援護射撃してくれた。

「ぐっ。」

「んっ。」

「んっ。」

なんかファンファーレとかなりそつな感じだ。

「よし、いっちょあがりっ。」

「てめーら、おぼえてやがれー。んっ。おぼえてやがれざんすー。」

「ああつ、本当に助かりました。えっ…えっとカナンさん、戻られていたんですね。」

本当にびっくりした顔で言ってきた。

「はい、昨日戻ってきたよ。」

「そうそう、これを受け取ってください。」

と言って、金貨をチャリンチャリンと3枚（三万ミラ）くれた。

「えっと、これは。」

「今助けてもらったお礼、いつも手伝ってくれるお礼、そして、ブレイサー（正遊撃士）にもうすぐなるっていう前祝いですよ。これから行商人ケルンをどうかごひいきに。それと、ついでに何かお入用のものがありましたらいかがですか？」

「ありがとうございます、ケルンさん。そういうことならありがたく使わせてもらうよ。」

「おねーちゃんたち、はいいよー、もう、先に勝手に行っちゃうん

だから。」

「ごめんね、ララちゃん、その代わりと言ってはなんだけど、一つ何か買ってあげるね。」

「わーい、おねーちゃんだーいすきっ。」

ならば買い物させてもらおうかな。あつ、玉子とお米と岩塩がある。これなら雑炊は作れそうだね。えーと、あれっこれは？手に取ったのは女性用のなめし革の防具で中古の為、いい品質にもかかわらず、定価の四分の一の値段の五千ミラだった。

「ちょっとこれ試着していいかな？」

「はい、奥に試着室があるのでどうぞ。カナンさん、イイモンに目をつけましたな。ちよいと腕の所が破けてはいますが値打ちものですよ。」

そのまま奥に行き、試着してみる。そうすると、まるであつらえたように僕にぴったりだった。防具の右腕のところに少し焦げて何か貫通した痕があり、そこにもうすでに乾いてはいるが血の跡が残っていた。まるで、僕の為に用意された防具……ん、待てよ、ひよっとしてカナンさんの着てたやつなんじゃないか?!そのことを思いつくつと、すぐに試着室を出てケルンさんの所に向かった。

「ケルンさん、この防具ってどこで手に入れたの？」

「ああ、それは徴税官のクダムはんの屋敷に勤めている槍を武器に

している人、確かコラッドさんと言う人から買ったものです。結構、イイモンだったのに二束三文で売ってくれたんです。ただ、昔から言ってることですけど、もう少しご自分を大切に扱ったほうがいいんじゃないのですか。私等にとっては眼福ですけどね。」

「えっ！」

自分の姿を見てみると下着姿に近い感じで、見ようによっては裸よりもエロく見える格好だった。ロベルトを見ると下の方を向いて真っ赤になっているのが視界の端に見えた。

「きゃ〜っ。」

と言って、奥の方に急いで戻って着替えてしまっただった。その後、武器になる投げナイフ一式もあの防具と同じ付近になったのでその二つと強そうな弓と靴とアクセサリと各種薬をあわせて2万5千ミラで買った。食材とララちゃんに似合うタンポポの髪飾りについては眼福サービスだと言ってくれた。

うっ、めちゃくちゃ恥ずかしいよう。

序章5話 商人と調査開始（後書き）

4月10日までだったので、ちょっとじゃなくすぐ早く投稿してしまいました。今度こそ待てるようにがんばります。

序章6話 村長と目撃情報(前書き)

私的にはストーリーはFC||SC>3rdが好きです。
ただ、音楽については3rdは本当にいいですね。

序章6話 村長と目撃情報

さらに、ケルンさんに手紙を頼んだけど、それもサービスって、ド
ンだけ眼福だったんやねん。そして、ケルンさんのお店を離れて、
村長さんの家に向かっていている途中。

「うう、見たでしょ。」

「ふっ、不可抗力だって……パンツの柄なんて見てないぞ。」

「ね〜ね〜、なにだったの?」

「イチゴ柄。」

ってしっかり見てるじゃないか。

「(ロベルトのすそを掴みつつ)うう。」

「ほら、ここが村長の家だ。」

トントントと扉を叩いてから、ロベルトが「ロベルトです。」と言
うと、「入りなさい。」と声が出た。

「おお、いらっしやい、ロベルト君、ついにリンダとの結婚する意

志が決まったかね？」

「何のことですか、ビンツ村長さん。」

「ほお、カナン君か、お帰りなさい、本当に久しぶりだね。君の活躍は色々と聞いているよ。本当に無事でよかった。」

「（ロベルトのすそをパツと離して）はいっ、ビンツ村長さんもお変わりなく、何よりです。」

「（ボソツ）これでは、娘も勝ち目がないか…後で、旅のことを色々聞かせてもらうとして、今夜はどうだい、君たちもうちで食べていけないかい。こんなに嬉しい事は久しぶりだ。」

僕はとつさにロベルトとララちゃんの方を見ると、二人とも頷いてくれた。

「はいっ、よろこんでっ。」

「リンダもすぐに戻ってくるだろう。ああ、帰ってきたようだ。」

「はあはあ、さっきはよくもやってくれましたわね、カナンっ！」

「はあ、朝のこと？」

「いえ、忘れたとは言わさないわよ、さっき原っぱで声をかけても全然反応しないで、しかも近くの魔獣をけしかけてくるなんて冗談にも程があるわよ。」

「魔獣をけしかけたって、ずっとロベルトと一緒にいたよ。」

「どっちも非常に不愉快ですわっ!」

「これは、無理か……すまないな、今日のお食事は延期にしよう、あそこまでへそを曲げられたらしばらくはなおりそうにないからね。また、必ず誘うよ。」

司「はい、分かりました。では、失礼します。」

一礼して、村長の家から失礼した。

時間がかなりたっており、もうすぐ、夕暮れ時になってしまっている。

「今日の狩りはもう無理か。家に戻るぞ。」

家に帰り着くと、いつも食べさせてもらっているから今回は僕が料理をと言った。ロベルトからは「気にしないぞ。」と言われたが、やはり感謝を行動で示したい。

「さてと、後は半分玉子を入れてつと特製玉子雑炊のできあがりつと。」

「わあ、すごいおいおい。」

「さあ、テーブルまで持って行って食べましょう。」

「はいっ。」

ロベルトに渡すと、みんなで七耀のお祈りをした後、いただきますと言った。

「おおっ、これはっ、うまいぞ〜！」

二人とも、なんか必死にがつついてくれている。料理したかいがあるっもんだ。

「（はふっはふっ）おかわりっ。」

「はいはい、くれぐれも二人とも喉に詰まらせないでね。」

本当においしそうに食べてくれている。作ってよかったなって、ジーンってしてくる。あっという間に玉子雑炊はなくなってしまった。

「ふう。これは何という料理だ（なの〜）。」

「僕の国の料理で、玉子雑炊っていうんだ。」

「ぜひまた作って欲しいぞ（の〜）。」

「うっ、うん、もちろんっ。」

「話は変わるけど、今日はいろんな話を聞いたね。僕なりの推理を述べるけどいいかな。」

「おう、いいぞ。」

「まず、カナンさんをどうにかした犯人についてだけど、何人か候補がいるから挙げていくね。」

(1) コラッド：クダムの護衛の槍の使い手……カナンの防具を売ったから

(2) クダム徴税官：村の徴税権を持っている貴族……怪しい、一方的な観方かな？

(3) ビンツ村長：娘の為になんとかした？

(4) 司：僕が無意識のうちにチートでも使った？

(5) リンダ：村長の娘、ロベルトを手に入れる為の狂言……これはリンダの罠だっ、カナンを陥れる為？

(6) ケルン：お金目当てかな？

(7) ロベルト：愛情の裏返し？

(8) 魔獣：魔獣に偶然襲われて操られている？

(9) 事故：たまたま毒キノコでも食べた？

(10) ゴロン三兄弟：何かの間違い？

以上だね。」

「(4)は違うはずだ。それでも俺は人の見る目はあるぞ。」

「まあまあ、でも、可能性はあるよ。いきなりテレポートとかつてアーツ(作者注：魔術のようなもの)があるかもしれない。とにかく、明日にでもコラッドという人を訪ねてみればある程度はわかるね。危険だから、ロベルトとララはここにいた方がいいよ。」

「駄目だっ、そんな危険なところにツカサだけを行かせるわけにはいかない。俺もいく。」

「でも、ララちゃんをどうするの?」

「村長さんの所に預けておくことでいいはずだ。」

「うーん、犯人候補の中に入っているんだけど、何か見落としがないかな。誰が犯人かで動き方が全然違ってくるからね。この防具の焦げた穴…結構鋭い穴を開けた後にアーツ(作者注：魔術のようなもの)か導力銃とかかな。」

「でも、俺とお前がいれば、大丈夫だ。」

「うん、ロベルト、すごく頼りにしてるよ。それと今回のことが終わったら伝えたいことがあるんだけど、いいかな。」

さすがに何も説明しないつてのもやはり悪いし、僕がどんな人だったか、どんな国にいたかをきちんと説明しないとイケないね。

「……ああ、わかった。」

序章 6話 村長と目撃情報（後書き）

誰が犯人か感想を書いていただけるとありがたいです。

今度4月10日までと言ったんだからね……までということとは早まる可能性もあったわけで、と言いつつ試してみよう。

次も4月10日までに書くように頑張ります。

序章 7 話 狂槍と事実判明（前書き）

非常に人権的、倫理的に不快な発言が含まれているので、嫌いな方は読まないで引き返した方がいいです。

序章7話 狂槍と事実判明

翌朝、ララちゃんを村長さんの家に預けて、僕たちは徴税官の屋敷の方に向かった。途中で何度か魔獣との戦闘になったが、なんとか二人で切り抜けた。ちなみに僕が覚えているクラフト技は下記の4つだね。

1、チェイン1（2人連携）

2、クリティカルシュート CP20 急所に向かって投擲しダメージをクリティカルさせる

3、ワイドシュート CP30 扇状に投擲し、範囲内にダメージを与える。

4、シャドウシュート CP20 影を縫い付けるように投擲する
（付随効果 SPD - 30% Move - 50%）

Sクラフト 奥義 投舞円陣 対象一人 一人に高速で周りを走りナイフを同時に投げることで大ダメージを与える。

ロベルトのクラフト技も4つだね。

1、チェイン1（2人連携）

2、ディレイショット CP25 相手の足を打ち抜き、行動を遅らせる（Delay効果）

3、応急処置 CP20 対象を応急処置することで体力を1000回復させる。

4、対応射撃 CP10 自分以外の対象を指定することで、対象に与えられる物理攻撃を阻止するように弓矢を打つ（物理攻撃のみ限定 発動80%）

Sクラフト 奥義 暴乱射撃 範囲大 大きくジャンプをして範囲内を射撃することで範囲内の敵に大ダメージを与える。

近づくにつれ、悪趣味なほどに煌びやかな屋敷が見えてくる。

「よくもまあ、ここまでひどい屋敷とは思わなかった。ある意味脱帽だよ。」

「ああ、いつ見ても悪趣味な屋敷だ。」

見上げると、何かクダムの銅像？らしきオブジェが庭に飾られており、黒薔薇や奇怪な植物が庭園に多く飾られている。視線を元に戻すと向こう側に見えてきたのは門番をしている昨日会ったゴルン三兄弟だ。あっ、一応、彼らも仕事してたんだ。

「兄貴、バルンがフランスパンが一杯食べたいって言っているぞんすよ。」

「んっ。」

「そうかそうか、ならこれが終わったら早速食べにいこうじゃあないか。」

「兄貴、バルンのやつ喜んでるぞんす、早く終わらせるぞんすよ。」

「んっ。」

僕が声を掛けるために三兄弟に話しかけた。

「あ〜、ちょっといいですか？」

「（他の兄弟の方を見ながら）なんだあ、こっちらフランスパンどう食べようと思えるのに忙しいんだっ。用がないなら、あっちいけ、しっしっ。」

前言撤回、門番の仕事なんてしてないじゃない。

「いやっ、用があるから話しかけているんだけどね。」

「くだらない用事だったら、叩き出すからなって…（こちらを振り向いて）てめーら、何でここに居やがる。なんだ、また可愛がられないのかあ。」

いや、昨日のことは逆だったような…まあいいか。

「コラッドさんと言う人と話があるんだけど。」

「ああ、人をお願いするときにはそれなりの誠意つてもんが必要だとおれはおもうぜ。親にそう習わなかったかい、餓鬼どもよつ。」

「はあ、仕方ないか……。」「

仕方なく、ゴルンに500リラを渡した。

「兄貴、これで食べれるフランスパンの量が増えたでござんすね。」

「ああ、お前たち喜べ。(司たちの方を向いて)ここで待つてな、すぐに呼んできてやるからな。」

「兄貴、あつしらも一緒にいくでござんす。んつ。」

結局、門番いなくなっているじゃないか、門番の役目って…いったい…。しばらくすると、ゴルン三兄弟が戻ってきた。

「ちょっとしたら来るんだそうだ。じゃあ、俺たちは用事があるから行くからな。」

「丸かじりでござんすか、それともバター焼きでござんすか、それとも…。」

「んつ。」

「全部でござんすか、バルンはいやしんぼさんざんすね。」

いや、用事って…もう何も言つまい。ロベルトが気を使って声を掛けてきてくれたよ。

「大丈夫か、顔色がよくないようだが。」

「つつこみつかれて、疲れただけだよ。よしっ、大丈夫。」

「そうか、きつくなったらいつでも言っただぞ。っと、コラッドが来たようだ。」

無意識にロベルトと手を握っていたようだ。前は嫌だったけど、今はなんか安心するような気がする…。

「俺に用って…、なんでお前勝手に帰ってきてるんだ。」

なぜか僕のほうを見て話している。

あれっ、なにこれえ〜、もしかしてビンゴなのか。

「それとも、ははっ、てめえ、もう村を全滅させちゃったのか？だが、そうでもないみたいだな。」

「カナンになにをした。」

「慈善事業ってやつさっ。”ば”だか”ま”だかいう実験に失敗し

た廃人改修っていう、今流行のリサイクルでエコってやつだっ。あゝっ、はっはっはっ、今俺いいことをいったんじゃねえか。高原で魔獣どもを集めてデミアって村を全滅させるってクダムって野郎がいるじゃねえか。開戦の口実が欲しいいうだけで何個も村を全滅させるって狂ってるじゃねえか、俺もクダムの野郎もな。その任務遂行中ってやつさっ。たださすが、他のガラクタどもとブレイサー（遊撃士）は性能が違うねえ。サービスでポイントでもつくんじゃねえのかっ。」

「パテル＝マテルの実験というやつかっ。」

「おやつ、嬢ちゃん、意識あるじゃねえか、こりやおかしいわ。はっはっはっはっ。って何で、てめえ、知ってるんだ。まあ、どちらにしる、かわんねえことか。どっちみち、ここまで知っちまったと言っことで、逃がすわけにはいかないんでね。あー、はっはっはっ。」

と”狂槍”コラッドが槍を構えて襲いかかってきた。それと同時に僕たちも相對する。

コラッドはいきなり槍をめちゃくちゃに僕たちに突いてきた。

行動：コラッド：（クラフト：乱槍撃）「そらそらそらっ。」
僕とロベルトは共にダメージを約4割程度受けた。

行動：司：（シャドウシユート）「まずは、足を止めないとお返しだよ。」

コラッドはダメージが1割弱ほど通ったみたいだ。

行動：ロベルト：（ディレイショット）「こいつもおまげだ。」
足を打ち抜き、コラッドはこれで残り体力8割（SPD - 30%
Move - 50%）（ディレイの為、コラッドの行動が遅れます）

行動：司：（クリティカルシュート）「まだまだいくよつ。」
これで、コラッド残り体力6割5分（SPD - 30% Move -
50%）

行動：ロベルト：攻撃「ついでにこれでもどつだ。」
これでコラッド残り体力5割5分（SPD - 30% Move - 5
0%）、逆転だ。

行動：コラッド：（奥義 狂乱槍撃）

「はははっ、ためーら楽しいじゃねえか、今日の俺が最高について
いる事を証明してやるぜ。」

先ほどの槍撃がMAXスピードではなかったのか…めちゃくちゃな
スピードで槍を繰り出してくる。

「……………くっ。」

「……………ぐっ。大丈夫か、つかさつ。」

二人とももう体力が1割を切っている。あと一撃でも食らったらど
ちらかが倒れてしまう。安全策と言ったら、ロベルトを薬で回復さ
せて、対応射撃お願いすることだけど、

「ロベルト、君を回復をするから、僕を対応射撃で守って。」

「そんなことをしたらだめだ、完全には防げない以上、つかさが危険だ。それよりもやつを倒すことが先決だ。」

行動：司：（クリティカルシュート）「わかった、なら、速攻で行くよ。」

これでコラッドは体力残り4割（SPD - 30% Move - 50%）。

行動：ロベルト：（デイレイショット）「あたれっ。」

「何度も早々食らうかよ。」

なにっ、避けられた。しかもステータス異常が回復している、ならば……

割り込み行動：司：「奥義 投舞円陣っ……これで、どっつ。」
これでコラッドの体力残り1割5分……あとはロベルトお願いっ。

「あとはロベルト、頼んだよ。」

割り込み行動：ロベルト：「奥義 暴乱射撃 まかせろっ、これで、おわりだ。」

「……がふう。」 やつの体力ゲージはなくなったはず……

弓矢の嵐を食らったあと、煙幕が晴れると僕に向けて槍を振りかぶって立ったままのやつがニヤリツと笑う。

「つかさつ。」

「きちちゃだめつ。」

制止の声にもロベルトは聞かず、僕をかばって前に立った。僕はもう一步も動けないまま、様子を見守った。

「ひひひっ……。てめーら……。やるじゃ……。ねえか……。だが……。楽しかったぜつ。……………ゴフッ。」

と、口端から血だまりを吐き、笑いながら後ろ向きに倒れていった。

序章7話 狂槍と事実判明（後書き）

戦闘シーンはもっと別の形式にした方がいいのかな。

まずい、次に4月10日に投稿するって言ってどンドン投稿してる……。

もう、序章が終わるまではなるべく早めに投稿していきます。

序章 8話 奇跡とゴスペル（前書き）

今回は……なんとというかまあ許してください。

序章 8話 奇跡とゴスペル

動けるようになると、ロベルトのもとに涙をポロポロと流しながら寄って行った。ロベルトもしばらくは動けないらしく、へたり込んでいた。

「ばかあ、なんであんなことをしたんだよっ！ロベルトに何かあったら、ララちゃんやカナンさんに申し訳が立たないじゃないっ。」

「……気が付いたら身体が動いていたんだ、すまん。」

「もう、こんなことしたら駄目だよ、僕との約束だ。もし、破ったら……もう口をきいてあげないんだから……。」

「ああ、分かった。こんな馬鹿な真似はしないと誓おう。」

「こんなに怪我をしちゃって、手当てをしないとイケないね。」

と、膝枕をさせながら、ティアアやティアラの薬（体力の回復薬）をロベルトに使ってあげた。あんなにあっただ回復薬が今回の治療であつさりと全部なくなってしまった。

「さてっ、高原だっけ……そこに出発しようか。」

「おう、一緒にがんばろう。」

ロベルトが手を出してくれたので、捕まって立ちあがった。高原には屋敷のそばから小道が伸びており、向こうに原っぱの目印になる大きなクスノキがあるらしい。

「そういえば、ツカサと初めて会ったというか倒れていたのもあの原っぱだった。」

「えっ、それは初めて聞いたよ。」

「てつきり、ちょっとだけ眠っているものだと思っていたが、なかなか目を覚まさなかったので、夜には冷えるし、魔獣が襲ってくる可能性が高いから家までおぶって行っただ。」

「そうだったんだ、おかげで僕は生きていられるんだね。ロベルトって命の恩人だったんだね。ところでひよっとして、ロベルト、昔3人で原っぱで何か大事な約束したことってあるのかな？」

「なんで知っているんだ、5年前に『三人でいつかまたこの原っぱで会えますように』という約束なんだ。」

「えっと、なぜか知らないけど僕にも分かるんだ。どうしてかわからないけど……。」

なぜか、また涙が止まらなくなってしまい、それをロベルトがハンカチですくってくれた。前はこんなに涙もろくなかったのに、なんでこんなに涙もろくなってしまうんだろう。涙が止まるまで、ロベルトがずっとそばで付き添ってくれた。

「ごめんなさい、急に涙が止まらなくなってしまっ…。」

「大丈夫だ、君は俺が守る。」

うれしい半面、悲しい感情がなぜか出てきた。僕は本物ではなく、偽物だということがこんなにももどかしく感じたのだった。

「さあ、もうすぐあのクスノキが見えるよ。」

と、ロベルトの手を振り払うようにしてちょっと駆け出した。

今まで林の中の道だったのがパーッと開けると、花がたおやかに香り、一面に花の咲いた原っぱが広がっていた。そして、目的の大きなクスノキが向こう側に見えた。

確か、クスノキの少し先って崖があり、ずっと下には溪谷の川が流れているんだっけ、昔、崖に近寄らないようにと注意された過去も思い出して来た。よく注意してクスノキの方を見ると、一人の人影とその周りにいる魔獣の群れがいるのがここからでもなんとか確認出来た。その人影は薄汚れてはいるが、手鏡でみた姿にそっくりであり、目的の人物であることが分かった。

「カナン……。」

「ほらっ、ロベルトがしっかりしなきゃ、カナンさんを助けることができないんだからね。」

そう言って、ロベルトの背中をバシッと叩いた。でも、僕にはなぜ

か分かってしまった。彼女の瞳の光が失われており、魔獣を何らかの方法で従わせているのだらうということが……。そしてその笑顔はもう戻ってくることは……いやっ、何か方法はあらずだ。

僕があきらめたら、そこで終わりなんだっ。初めて、僕は自分の意思を持って彼女を連れ戻したい、そして、笑顔の『三人でいつかまたこの原っぱで会えますように』と願った。

「さあ、まずは周りの魔獣から片付けないとね。」

「おう、任せておけ。」

クスノキの近くまで魔獣を倒すつつ近づくとカナンがこちらに気づき、彼女が咆哮し、一斉に魔獣たちが襲いかかってきた。

では、始めようか、みんなの笑顔を取り戻すための戦いをつ。敵は、カナンと6体のばらばらに散らばった狼型の魔獣だっ。

行動：カナン：（クラフト 咆哮）「Grururu。」 6
体の魔獣の Atk + 20% Def + 20%

行動：司：（クラフト ワイドシユート）魔獣の方に近づきつつ、
「まずは数を減らさないといけないみたいだね。」

魔獣 A、B、C に 35% ダメージ

行動：ロベルト：（クラフト 対応射撃）「守ってみせる。」

行動：魔獣 A：（かみつき 司）ロベルト：「させるかっ。」 対応

射撃発動！魔獣A計70%ダメージ

行動：魔獣B：（かみつき 司）ロベルト：「やらせん。」対応射撃発動！魔獣B計70%ダメージ

行動：魔獣C：（かみつき 司）ロベルト：「とおさん。」対応射撃発動！魔獣C計70%ダメージ

行動：魔獣D：（かみつき 司）ロベルト：「させるものか。」対応射撃発動！魔獣D計35%ダメージ

行動：魔獣E：（かみつき ロベルト）ロベルトに12%ダメージ

行動：魔獣F：（かみつき ロベルト）ロベルトに計24%ダメージ

行動：カナン：（クラフト 腕一閃 司）：「Shaaaaa。」
対応射撃発動失敗っ 「はやいつ。」 司に30%ダメージ

行動：司：（クラフト ワイドシュート）「いい感じに集まっているよ。」 6体の魔獣+カナンに攻撃

魔獣A、B、C死亡確認！ 魔獣Dに計70%ダメージ、魔獣E、Fに35%ダメージ カナンに20%ダメージ

行動：ロベルト：（攻撃 魔獣D） 魔獣D死亡確認！

行動：魔獣E：（かみつき ロベルト）ロベルトに計36%ダメージ

行動：魔獣F：（かみつき ロベルト）ロベルトに計48%ダメージ

行動：カナン：（呼び出し）「Gaaaaaa。」 魔獣G、Hが

ファンファールが鳴りそうな感じだよね。

「ふう、なんとかなったぞ。」

それと周りにいた残りの魔獣たちはカナンさんが倒れたせいか、林の奥の方に消えていった。

なんでカナンさんはこんなことになったんだ、もう少しで手に入れられるはずだった笑顔。

幸せが手の届くところまで来てたはずなのにララちゃんの想い、そしてロベルトさんの想い、僕が二人の笑顔を味わったようにカナンさんも笑顔ができるはずなんだ。

だから、僕も想いを乗せよう……ここに僕が居るのはきつとこの為だから……。

カナン（本物）の気持ちが僕（偽物）に分かったのならば、逆もまたできるはず……。

だから、僕（偽物）がカナン（本物）にこの想いを乗せて返そう。この役目は僕にしか出来ないことだから。

その瞬間、大きなクスノキの中が輝きだし、中からゴスペル（黒いオーブメント）が輝きながら僕の目の前に浮かびながら現れた。それを胸に抱き、カナンさんに強く強く抱きしめながら呼びかけた、みんなの想いを乗せて……。

しばらくすると、ゴスペル（黒いオーブメント）の輝きは収まり、僕の意識は途切れてしまった。次に目が覚めた時には、僕はカナン

さんに膝枕をされて髪の毛をなでられていた。

「ロベルトから色々話を聞いたわ。ありがとう、ツカサ、みんなが呼びかけてくれたから私は戻って来れた。奇跡が起きたのよ。」

「（首を振りつつ）、奇跡は起きるものなんかじゃない。みんなが起こしたんだ。」

「ええ、確かにそうね。」

「ところで、カナンさん、身体の方は大丈夫なの？」

「カナンさんだなんて、他人行儀だわ、カナンで結構、その代り私も当然ツカサって呼ぶけどね。」

「うん。わかったっ。」

「でも、ロベルトについては競争よ。」

「えっ、僕がカナンにかなうわけないよ、だってロベルトはカナンのことが好きだって言ったんだから。」

「はあ、ばかねえ、ツカサ、あなたはなにも分かっている。でも、分かっているのも含めてツカサなのかしら。」

「どついう意味なのかな。」

「ふふふ、秘密よ。」

ようやく、カナンの笑顔を見ることができた、こんなにも笑顔が素敵な娘だったなんて、僕もつられて笑顔になった。

「そんなに元気なら、これは必要なかったか。」

ロベルトが薬草を持って来ていた。

「ありがとう、ロベルト、使わせてもらっよう。」

「二人ともちょっといいかしら、話さないといけないことがあるのよ。」

と、ちょうどその時、一発の銃声が響いたのだった。

序章8話 奇跡とゴスペル（後書き）

さて、ついに犯人が次登場します。

皆さんの予想はいかがだったでしょうか？

感想を頂けると嬉しいです。

『ゴスペル』とは、光を出して発動しているときに導力停止現象と呼ばれる、この世界でいうところのブレーカーが落ちる状態にして、アーツ（魔術のようなもの）等を発動させないようにさせることができますが、原作でもまだ不明な点が多い品です。

序章最終話 願いと別々の道（前書き）

あまり、視点変更は入れないようにするつもりですが、今回ばかりはそうした方が面白そうなので入れてみました。

『身喰らう蛇』^{ウロボロス}とは、最先端技術をもつ集団……でも、人間を試すなど何か目的がありそう

『盟主』^{レギオン}とは、身喰らう蛇を統べる最高権力者

『執行者』^{レギオン}とは、身喰らう蛇の計画遂行部隊の責任者

『蛇の使徒』^{アンキス}とは、身喰らう蛇の大幹部のようなものです。

序章最終話 願いと別々の道

銃声が起こる少し前にさかのぼる。

銀髪の5、6歳の少女、ララが必死に林の道を原っぱの通じる道を駆けている。

「はっ、はっ、はっ、どこにいこうというのですか。」

必死に逃げているせいかな男の声は森の色んなところから聞こえており、どこから聞こえてくるかララには分からなかった。

「鬼ごっこは終わりですよ。」

と一発の導力銃の銃弾がララの左足首をかすり、ララはつまづいて倒れてしまった。

「おねーちゃん、おにーちゃん、助けて……。」

と涙ながらにつぶやくのだった。

原っぱの入口側から現れたのはララちゃんを抱えてニコニコしながら導力銃をこめかみにつきつけているケルンさんだった。

「先行投資させて頂きましたが、いやはや、ここまでのことが起こ

るとは思っていませんでしたよ。いえ、予想以上、素晴らしいですよ。この執行者候補”死の商人”ケルンの顔を出さないといけなくなっただからです。」

と拍手まがいなことをしながらも警戒しながらこちらから5mぐらい離れた所まで寄ってきた。

「もう少し、投資してくれてもいいんじゃないか、ララちゃんを離すぐらいね。」

「いえ、あまり投資をしすぎると回収が大変になりますので、謹んで遠慮しておきますよ。無事、競争相手のコラッドの止めを刺させていただけましたしね。ただ、元手も含めて回収しなくては利益が出ないものでね。さあ、その黒い石を渡して^{ゴスベル}もらおうか。」

「元手というのも私からタダで手に入れたものじゃない。」

「いえいえ、弾代もかかりましたし、元手の一部とだけ思っていただければ、今回のことについてもね。それとも、この子に万一のことがあったてもいいというわけですかな。」

ゴリツッとケルンは導力銃をぐったりしているララに突き付ける。

「あまりに迷うようでしたら私の指も疲れてしまいそうですよ。」

「ララを殺してみなさい、地獄の果てまでも追っていくわ。」

「おお、女性は怖いすなあ、分かりました話し合う時間も必要で

しょう。3分間だけ待つてあげます。木の向こう側で話し合おうといいでしょう。但し、それ以上は私の指の保証はできませんけどね。」

「わかったよ。ロベルト、カナン、向こうに行って話し合おう。」

二人はケルンを睨みつけた後、僕について来てくれた。そこで、僕は二人に小声で話しかけた。

「僕に作戦があるのだけど……。」

Side ケルン

ナイフを持つ少女、弓矢をもつ少年、丸腰の少女の三人のなかで気をつけるのは、ナイフを持つ少女ですね。しかし、色々予想外でしたが、あとはあのナイフを持っている娘さえ気をつければ、イレギュラーの要素はないでしょう。幸い、こちらにはこの子という人質が居る。向こうが弓矢やナイフが届くよりも早く撃つことができるところからうかつに向こうも行動ができないだろう。それに無事、競争相手のいけすかない”狂槍”コラッドは止めをさせました。

すべては盟主の心のままに身喰らう蛇ウロボロスの為、色々と苦労してきたのが報われたということですね。

あの黒い石が想像通りなら、執行者レキオンを通り越して蛇の使徒ファンギスすらも狙えそうですね。リスクは大きかったですけど、すべて計画通り、いえ、計画以上になりそうですね。

そろそろ時間ですか……もうすぐ、もうすぐ手に入れれるんですね、楽しみです。

「さあ、時間です。答えを聞こうか。」

丸腰の少女が石を持って私に話してきた。

「そちらにこの石を持って行くわ。だから持って行けば、その子を離して。」

「一応、両手を頭の上にあげて、手に石を持ってきてください。」

「ええ、分かったわ。」

よし、これで、石も手に入り、この寂れた村からようやくおさらば出来ますね。あとは後ろの二人を警戒していれば、いいはずです。ああ、丸腰の少女がメートルぐらいまで近づいてきましたね。

「そろそろ止まりなさい。」

「石を渡すから、その子を離して。」

「石が先ですよ。」

「ええ、分かったわ。」

ゆっくりと丸腰の少女が石を下していく。そして、こちらにゆっくりと目を瞑りながら両手を出して石をこちらに向かって出してくる。その瞬間、石が輝き、後ろの二人が弓矢とナイフを私に向かって投げるのが分かった。

「くそっ、残念ですね。」

私も導力銃をこの子につきつけて、撃つたが、反応がない……もしかして、あの光は……。

「まさかつ……………導力停止現象だっつ。」

Side 司

「まさかつ……………導力停止現象だっつ。」

その言葉を聞いた瞬間、作戦が成功したことが分かった。作戦は、ナイフを持つ少女だった司と丸腰の少女だったカナンの服を入れ替えて、油断したところを僕がゴスペルを起動して導力停止現象をおこし、その間に、ロベルトとカナンがケルンを攻撃することだった。ロベルトがケルンの右目を射て、ナイフを持つ少女カナンはケルンの銃を持っている右腕を見事に貫いていた。

「目が、目が……」

「ララを離せっ。」

その瞬間、司がケルンに飛び掛かり、ララとケルンを引き離すことができた。ゴロゴロと二人はもつれ合って転がっていた。

「きさまがつ、貴様がいなければ、すべて計画通りになり、この村は全滅し、私は執行者レキオンになれたのだ。」

「そのためにみんなを不幸にするなんて許せないっ。」

「きさまだけでも、殺してやるっ。」

と、ゴロゴロと崖の方に向かって二人して転がって行くのであった。ロベルトとカナンが二人して警告をしてくれた。

「ツカサっ、そっちは崖だ、やつから離れる(て)。」

しかし、万力のようにケルンの手は腕に食い込み、司には先ほど戦闘した怪我も残っておりうまくほどけることができなかった。

ついに、崖の向こう側にまで転がってしまい、一瞬浮遊感を感じた瞬間、僕の手をつかむ手があった。

「つかまれ、ツカサっ。」

いそいでロベルトに捕まってみると、ロベルトが腰にロープを巻きつけて僕を崖に身体を投げ出してまでつかんだくれた。しかし、ケルンも司のズボンに捕まっており、ミチツとロープのきしむ音が響く。そして、上から順にロベルト、司、ケルンの順にぶら下がっており、落下をロープが受け止めたショックで全員の息が一瞬止まった。ケルンは徐々にすり落ちてはいるが、振りほどくために僕はいつものナイフを取り出そうと片手を腰に伸ばしたが、カナンと装備

を入れ替えていたため、ないことに気づき一瞬愕然とする。
そうこうするうちに、プチっプチっプチとかすかにロープの向こう側で音が聞こえてくる。

一番先に力尽きたのは、ケルンであった。

「貴様のその顔を見ただけでも、少しは溜飲が下がりました。では、一足先に煉獄でお待ちしてますよ。」

と言つて、下に落ちて行つた。その間にもプチプチと音が響いてくる。

「ロベルト、頼みたいことがあるんだ。」

「なんだ、こんなときに。」

「あの黒い石をリベール王国のカシウス＝ブライトさん宛に送つて欲しいんだ。」

「ああ、分かつた。俺も言いたいことがあるのだが、いいか？」

「うん、なにかな？」

「俺は、ツカサが好きだ！」

一瞬、何をロベルトが何を言ったのか僕には分らなかつた。

その間にもプチプチとちよつとずつ音が大きくなっている。

このままでは、このロープは持たない、重さを減らさないと上まで引き上げるまで持たない。

二人ではもう、この傷ついたロープには持ちこたえられないのは僕の目からは明らかだった。

「前に僕に誓ったよね、『こんな馬鹿な真似はしない』、ってね。だから僕は『こんな馬鹿なことをする』ロベルトのことなんて嫌いだよっ！」

だからロベルトにかすかにキスをして、そしてロベルトとの触れる部分をゼロにした。

「なぜだっ、ツカサーーーっ！」

しかし、僕は、その声を答えることなく、落ちていき……意識が途切れた。

04（フィア）の素体に対するトレースが中断されました。

スタンバイモードに移行します。

序章最終話 願いと別々の道（後書き）

本当にこんな感じでいいのか、それとも変更した方がいい点とか何でもいいので、反応が頂けると嬉しいです。

ユニーク500を超えました。

いっぱいの人に読んでいただき本当にありがとうございます。

幕間 幕間と選択（前書き）

今回も、選択肢を設けました。

もし、メッセーჯや感想等において選んでいただけるのであればとてもありがたいです。

幕間 幕間と選択

ブザーが鳴り、一番最初の時と同じように幕が下がり、暗闇が訪れる。すぐに、ピエロの化粧をした少年が暗幕の舞台のわきから歩いてきて、舞台の中央まで歩いてくると正面を向いてペコリと一礼する。

「みなさま、序章の劇はいかがだったか？のちに判明した『ハーメルンの悲劇』に負けずとも劣らぬ『デミアの悲劇』が『デミアの奇跡』へと変化をした様を。えっ、デミアの悲劇がどうだったかですって……それは皆様のご想像におまかせ致します。

さて、次回の劇は、時代は百日戦役直後で場所は聖王庁のとある聖痕にまつわるお話か、それともリベール王国における孤児院設立に関するお話か、はたまたみなさまのご要望されるお話になります。さあ、みなさま、お手元のカラクリにてこの幕間の間にお選びくださいますよう、お願い申し上げます。（ペコリ）

（１）アルテリア法国のとある聖痕にまつわるお話（作者注：男主人公予定）

（２）リベール王国における孤児院設立に関するお話（作者注：女主人公予定）

（３）みなさまのご要望されるお話（作者注：私に書けるもので面白そうなものがあれば）

そうそういい忘れていましたがデミアの村の近くの原っぱの大きなクスノキの前に誓いの石碑というものがいつの間にかできておりましてね、

『笑顔で”四人”でいつかまたこの原っぱで会えますように』

と文字が刻まれているらしいですよ。

さて、みなさま、今のうちにお手洗いや食事等は済ませておいた方がよろしいですよ。では、また次の幕間にてお会いすることを楽しみにお待ちしております。」

ペコリつと一礼して、舞台の脇の方に少年は消えていく。

幕間 幕間と選択（後書き）

早く、英雄伝説7発売されないかなあ……ぜひPCゲームで出ることを私は望んでおります。次の話まではちょっとだけ間をあげようと思います。

1週間程度しばらく構想を練ろうかと思っているので、では、またね。

4月8日追記 おかげさまでもうすぐ950ユニークと6000PVに行きそうです。みなさま、本当に読んでいただき、ありがとうございます。今回、文章や行間について、一部修正を行いました。

二章 1話 父親と涙の理由（前書き）

Twitter風というと『面接なう』。

来週から忙しくなりそうなので、早めに投稿します。

なぜか知らないのだけれど、投稿って癖になりそうです。

ちなみに『聖痕』とは、私的には自分と自分に触った範囲で発動させる異能力と考えております。そして、体のどこかに模様しるしのようなものがある。原作設定は知らないのでもそんな範囲の設定はオリジナルです。

二章 1話 父親と涙の理由

グレゴリー＝マウワイヤー：「神さまつてのは、その人に応じて試練つてのを与えるんだ。それを俺は今回初めて感じちまった。なら、神さまの試練つて、もしあるつていうんならどんなんだろうか？」

選択肢：（１）アルテリア法国のとある聖痕にまつわるお話

異世界にて

04（ファイア）の素体に対するアクセスが再開されました。

最優先事項につきリトレースを開始します。

なお、トレース対象に01（アイン）が接触する可能性が80%を超えています。

僕が再び目が覚めたとき、太陽が二つの大きな泰山木とその間にある荘厳な七耀教会らしき建物の影にほとんど沈んでしまった夕暮れの中だった。

そして、僕はロベルト、いや、ララちゃんやカナンを傷つけてしまったことを思い涙を流した。すると、先客がいたようで、向こうから中年の渋い男の声がかけられた。

「よう、坊主、どうしたんだい。」

「親友、いや、家族と言った方がいいかもしれない人を傷つけてしまったんです。」

「……その親友というか家族の人は死んじまったのか？」

「いえ、おそらくは死んでいないとは思いますが。」

「なら、くよくよするんじゃないやねえ。また、会って謝ればすむことじやねえか。死ぬこと以外はかすり傷つてな。それに、男だったらな、すべて終わってから泣くもんだ。」

「……………っ。」

そういったことをいう人は今まで会ったことがなかった。

周りの人はいつでも僕を見ず、僕もみんなを見たことはほとんどなかった。

だから、この人の言葉がなぜか心に染みだ。

でも、なんで……なんでこの人も泣いているように見えるんだろう。

「坊主、これもなんかの縁だ。うちにといつか、俺の部屋なんだがな、寄ってきな。そこで、落ち着くまでいるといい。」

「いいのですか……僕なんかが行っても。」

「これでも、独り身になっちまった身なんだ、おめえの食いぶちぐらいは全然心配することなんてねえんだよ。それに子供はな………大人の世話になるのが義務つてもんだよ。」

と、しゃがみながら僕の頭をクシャクシャとやってくれる。

「ありがとうございます。僕の名前は、ツカサ＝カタシロといいます。」

「おう、俺の名前は、グレゴリー＝マウワイヤーだ。グレゴリーでも、呼び方はなんでもいいぞ。」

「ならば、父さんって読んでもいいかな。なぜか、そんなイメージだから。」

「……おう、別にかまわねえぜ。」

父さんは僕をやさしく抱擁して、手を引いてくれた。

そして、僕はその手を掴んだのだった。

そして、父さんの腕の服の隙間からちらっとなにか傷か刺青の様なものがかすかに光って見えた気がした。

二章 1話 父親と涙の理由（後書き）

ほんとうにみなさまが読んでいただけるのはすごく書いていくのが力になります。

ですので、忙しくなりますが、可能な限り投稿を頑張っていきます。

二章 二話 星空と事件発生（前書き）

1000ユニーク 6000PV達成しました。やったー！。

二章 2話 星空と事件発生

もう、すっかり日は暮れてしまって、上を見上げると星空がキラキラと輝いている。ロベルト、そして、カナンやララちゃんも同じ空を見ているのかな……。よし、絶対に会いに行くんだ、そして、みんなと一緒に笑顔になるんだっ。

「どうしたんだ、空を見ているのか……。そういえば近頃は全然空なんぞ見なくなっただな。」

「やっぱり、空ってそんなに見ないものかな。」

「そうだな。大人になるとな、周りだけ見るようになって、あまり空は見なくなるな、こんなにも身近に素晴らしいものがあるってのにな。」

僕は一緒に空を見上げて歩いて神殿の方に向かった。その時、神殿の方から、2人組の神官服を着た人がこちらの方に向かって出てきた。

「グレゴリー教官、そして、フレイス助手。大変なことが起きました。ガベル教授が死亡しているのが発見されました。」

「至急、現場までお越し頂いてもよろしいでしょうか?」

「僕は、フレ……。」

「すまないが、フレイスが賊に襲われてな。まだ、記憶が混濁しているみたいでな。部屋に戻って介抱しないといけない。」

と、僕の言葉を遮って、父さんは言った。そうすると、神官の男は納得したみたいで、

「そうですね、分かりました。お二方は、フレイス助手の体調が戻り次第、現場にお越しくください。そうそう、明日にでも本堂の方から審問官がやってくるみたいです。ルフィナ「アルジェント」と言う人が派遣されてくるようですよ。確か、教官の教え子でしたね。」

「ああ、その通りだ。すまないが、急ぐのでな、部屋に戻っておくぞ。」

「はい、お疲れ様でした。」

とにかく、僕の言葉を何で遮ったのかは部屋に戻ってから聞いてみよう。部屋までは、何人か慌しく動いている神官服を着た人と会って何度か会釈されながら父さんに黙ってついていった。ギイー、バタンつと重々しい扉を開いて入った部屋は、こざっぱりしており、父さんは実直らしい性格なのか、あまり物は置いていなかった。ただ、写真たてには数年前の写真であろうか、古ぼけた写真の色をしているが、3人で笑っているグレゴリーさんとその奥さんと息子さんの姿が一緒に映っていた。

「なんで父さんは嘘をついたのですか？」

「殺人事件なんぞが起こったときに、フレイスの姿をした別のやつがいたら真つ先に疑われちまうだろうが。何せフレイスは……俺の息子のフレイスは殺されたガベル教授の助手をしていたんだからなよくて、長期監禁、下手をすれば、異端審問会にかけられて死刑だつてありえるんだぞ。」

「ごめんなさい、じゃあ、僕はどうすればいいかな。」

「……そうだな。まず、お前は賊に襲われて記憶喪失だつてことにしてはどうだ。名前も覚えていないっていう風にな。しばらくは、そのように過ごしてみればどうだ、もちろん俺もなるべくお前の面倒は見てやるしな。」

「うん、そこまで考えてくれるなんてありがたいとつございます。」

「ああ、別にいいってことよ。とにかく疲れているんだろ、そのベツトで一旦休め、そうすりゃ、元気になる。」

「いいんですか？」

「ああ、まずは、寝て元気な顔を見せるんだ。あとは、それから考えればいい。」

「はい、では、お先にそうさせてもらいます。」

ベツトに横になるとよほど疲れていたのかすぐに僕は眠りについた。そして、完全に眠る前にかすかに父さんの声が聞こえたのだった。

「……まったく、厄介なことになっちまったぜ。」

二章 3話 過去と夢の欠片（前書き）

1100ユニークと嬉しかったので投稿スピードが上がりました。

『テニオン守護騎士』とは、七耀教会の中で聖痕のある星杯騎士団の騎士が
なることができる特別な地位のことです。

二章 3話 過去と夢の欠片

セピア色の光景が目の前に浮かぶ。

昔から僕は泣き虫だった。そんな僕に父さんは『いつも意思を強く持って何事にも当たって行け』と励ましてくれた。そんな父さんが僕の憧れだった。そんな強い父さんが泣いていた日、それが僕の母さん、つまり父さんの妻が亡くなった日だ。

その時から父さんが自分の体を鞭打って仕事だけに没頭したの
は……。だから僕はもつと父さんには僕にくれた愛情や誇りや色
なものをもらった。だから今度は僕が父さんを助ける番だ。

だから、僕は父さんがなりたかった者の近道である聖痕について研
究することにしたんだ。母さんも父さんが12人の守護騎士サニタクンになぜ
選ばれないということは何度も子供のころから嘆いていた。

だからこそ、父さんにもらった誇りを僕は父さんに取り戻してやる
んだ。父さんの夢を僕の手で叶えるために……。

二章 4 話 探偵と事件調査（前書き）

感想かメッセージで犯人を予想していただけるとうれしいです。

一応、強引かもしれませんが、予想ができるようにはしているつもりです。

もし、足りない説明がありましたら言っただけだとありがたいです。

二章 4話 探偵と事件調査

また、夢を見てしまった……いや、むしろ過去にフレイス君が考えたことなのかな。じゃあ、フレイス君はどうなったんだろう。フレイス君と二人でばったり会ったら、この前のカナンと同じようになつてるとは限らないはずだね。

まあ、深く考えすぎてもよくないか……。とにかく、父さんに聞くか。カナンの時もただけでなんか思考が引きずられて行く様な気がした。もし、このままだらひよっとするとフレイス君になつてしまつちゃうんだろうか。

「父さん、もう起きているんだ。」

「ああ、起きたみてえだな、起きれるなら、久しぶりに朝飯でも一緒に食いに行くか。」

「それももちろん一緒に行きたいね。でもその前に姿を見てみたいのだけど、鏡ってこの部屋にあるのかな？」

「鏡だったら、入口の横の壁にあらあな。鏡でもみて何かおめかしでもする気か、もしその気があるってなら、別の所から道具を借りて来なきゃならん。」

「いや、そついうんじゃないんだけど……。とにかく、起きるね。」

ぐっすりと眠ったせいか、身体の調子は問題ないみたいだ。よつと

起きて、鏡の前に自分の姿を見に行くと黒髪で黒瞳の優しそうで、目じりが父さんに似ている15、6歳ぐらいの背の低めなやせぎすの神官服を着た少年だった。

ちなみに父さんは、黒髪にちょっと白髪が入った渋そうで厳しそうな40代後半のミドルダンディーに見えるね。

「えっと、迷惑でなかったら聞くけど、息子のフレイス君ってどんな人だったのかな？」

「……そうだな、子供の頃はよく泣いていたな。誰にでも優しい性格でな。俺の後をいつもついて来ている感じだったな。そうそう、昨日神官のフランクの話に出た『審問官』のルフィナ「アルジェントと同じ時期に従騎士見習いとしてここで訓練したのを覚えている。ルフィナは色んな面で優秀だったな。息子もあまり負けていなくはなかったが、引っ込み思案だったのだろうか、主席はルフィナの方に譲ってしまったように見えたよ。そして、……俺の妻サーラが亡くなった時から何か一所懸命に『聖痕研究』を始めだしたのを憶えているな。その頃からだろうな、星空と一緒に見なくなったのは……。」

「……自慢の息子さんなんですな。」

「ああ、胸を張って言えるな。」

「じゃあ、僕も責任重大だね、そんな息子さんに似ているなんてね。うまく真似できるか大変だよ。」

「別に、そこまで気にするんじゃない。俺が何とかしてやるからな、さて、そろそろ飯を食いに行かねえと、現場の検証にも間に合わねえようになるぞ。」

「あう、そうなんだ。じゃあ、急ごう、父さん。」

部屋から出て鍵を閉め、廊下を通って何度かおり曲がって色んな模様の入って色とりどりのステンドグラスが綺麗な大きな空間である部屋、食堂についた。

何人も先に食事を取っており、そこにはピンク色の髪をしたきりつとした才女に見えるおそらく名うての探偵さんとも言えるかもしれないルフィナさんがもう朝早くから来て、色んな人に事情聴取しているようだった。その後ろにルフィナと少し上の年齢のおそらく探偵助手のような眼鏡をかけた白髪の男の人が一緒にいるのが見えた。

僕たちは名うての探偵さん達から少し離れたところにA定食だろうか、脂の良く乗っているサバの塩焼きでいい香りが食欲をそそる一品とご飯とみそ汁とおしんこを父さんと一緒に選んだ。

ルフィナたちは色んな人に話を聞いているみたいだったが、僕たちの方を見かけると、寄ってきた。

「私たちもご飯をまだでして、もしよろしければ食べながらでもお話を聞かせて頂けるとありがたいのですけど。」

「かまわん。久しいな、ルフィナ、いや審問官と言った方がいいだろうか。元気でやっているようだな。」

「グレゴリー教官の方は少しやつれられているようですが、無理をなさらないようにしてくださいね。それに、審問官だなんて、ルフィナで結構ですわ。」

「ルフィナさん、お久しぶりです。」

「フレイスも久しぶりね。じゃあ、食事を取ってくるわね、席取りよろしくね、フレイス。」

「うん、僕たちの前の2つ席を取っておくよ。」

探偵さんコンビは僕たちと同じA定食を取って来て向かい合う形で席についた。

「えっと、そちらの方は？」

「ルフィナさんの助手として手伝うようになってるイワンといいます。最近金欠で、バイト代稼ぐために助手になってる。」

いきなり、僕の手をイワンさんは握って来たよ。

「実はあなたとずっと会いたかったんですよ。色々とお話を聞かせて頂きたいんですよ。どうです、今度二人でお茶でも。」

「えっと、男の人とデートするなんて趣味は僕にはないけど……。」

「冗談はよしなさい、イワン。フレイスの方は引いてるわよ。引くことも憶えた方がいいわよ、せつかく顔はいいんだから。はあ、ケビンと同じぐらい問題児だわ。」

「えっと、ネギ……とケビンさんと妹のリースさんでしたっけ、お元気ですか？」

「フレイスはルフィナのことをよく知っているんじゃないか。」

「ぶつ、くくくつ。確かにあの頭はネギそっくりよね。まさかあなたにそんな人のあだ名をつける力があるなんて今日初めて分かったわ。あー、笑った笑った。リースの方は相変わらずいつもおなか減らしているみたいだわ。この事件が終わったら帰らないといけないわね。」

「おめえの方だって、いそがしそうじゃねえか。早く終わらせて家に顔をみせるこつたな。」

場が和んだあと、ちよつと真剣な顔になってルフィナさんが聞いてきた。

「さて、みなさんのアリバイを聞いているのだけど、あなた方で終わりになるわ。事件が起こった夕方日没前頃二人はどこにいたのかしら?」

「神殿を出た川辺のあたりにいたはずだな。フレイスが川辺で倒れているのが見かけてな。そうだな、証人だったら、見習いのフランクとオルフィーナに尋ねればもう少し遅くはなるが、川辺の方から一緒に帰ってくる時に出会ったからな。」

「では、フレイスの方だけど、なんで川辺で倒れていたの?」

「いきなり昏倒させられて、憶えていないんだとよ。傷の方は俺が先に手当てをしておいたからもう傷は残っていないがな。それで、まだ記憶の方が混濁している部分があるみてえなんだ。」

「それで間違いない？」

と僕の目をしっかりと見つめてきて確認を取りに来た。確かに記憶はないんだし、今のところはうなずいていた方がいいよね、と考えるはずだった。その時、ルフィナの目が鋭くなったが、しばらくして僕の方から目を離れた。ただ、イワン君の方は僕の方をじっと見ている、そんなに僕をお茶に誘いたいのかなあ。

「ふう、おかげさまでアライバイは揃ったわ。」

「状況はどんななんだい？ もし、捜査に差し支えない限りで構わないけど。」

「イワン、差し支えない感じで話してみたらいいよ。」

「俺がですか……。わかりました。まず、事件が起こったのが、ガベル教授の研究室で部屋の中央で倒れており、死亡予想時刻が昨日の日没前後1時間程度。」

まず、殺害されたガベル教授ですが、はっきり言って評判の悪い人ですね。」

ガベル教授：破門されたワイスマンの上司であり、お金も高利貸しで貸したり、聖痕について研究してたことについては一緒に研究されているフレイスさんの方が詳しいとは思いますが、裏でアーティファクトの無断使用などの違法行為を行っていることも言われておりました。噂ですが、降格についてもささやかれていたようですね。凶器は見つかっていない。死因はショック死か？ 外傷はなし。部屋には窓なし、扉は一個だけ。事件発生後、鍵がかかっていた為、

密室殺人。隠し扉の類も見つかっていない。鍵も部屋の中で見つかっている。マスターキーは別部屋で常に監視付き。

次に被疑者についてですが、以下の通りになっております。

1、フレイス助手：ガベル教授の助手。事件当時は神殿外の川辺にいて倒れていた（アリバイあり）。

2、バウワー教官：体技指導教官。前日にお金のこととガベル教授と口論していた。事件当時は部屋に一人でいた（アリバイなし）。

3、アリーナ教官：アーツ（作者注：魔術の様なもの）指導教官。ガベル教授には色々としつこく言い寄られていたらしい。事件当時は図書館で他の女性職員と話していた（アリバイあり）。

4、グレゴリー教官：クラフト（作者注：武器の特技）指導教官、フレイス助手の父親。事件当時は神殿外のフレイスと一緒にいた（アリバイあり）。

5、ゴルン三兄弟：事件当時、食パンは焼いてそのままか、塩か、バターか、カレーか等どう食べればいいのか、口論になっていた為、騒動罪につき現在牢屋にて軟禁中。

6、事故により死亡：事故当時、聖痕の研究によるなにか魔法陣の様なものか床に書かれており、暴走などによりショック死の可能性あり。

7、見喰らう蛇ウロボロス：事件当時は聖王都周辺では主な動きなしの為、可能性は極めて低い。

以上ですね。

そういえば、教授が亡くなった夜は夜通し、部屋は兵士が部屋の前で門番をして閉鎖されていたはずなのですが、兵士の話では部屋の中から少し音がしたそうです。教授の亡霊かって怖がっていたそうです。あと、何点かありますが、これは秘密ですね。」

「やっぱり、順番って容疑が強い順なのかな。秘密って教えないんだ、やっぱり。」

「そうです、ただ、俺とお茶をしていただけ……いたつ。」

「いい加減になさいって言うてるでしょ。はあ、このままじゃ毒牙にかかりそうだからね。仕方ないか……。」

僕の耳の方に口を寄せてルフィナは教えてくれた。

「死亡発見された直後には、何も教授は持っていなかったのだけど、なぜか一晩たった私が来た時には『アーティファクト（作者注：オパーツのようなもの）』のおそらく増幅させるような効果のあるものを死亡した教授が握っていたのよ、『アーティファクト』の無断使用にて死ななかったとしても厳罰が下るわね。あと、もう一つ、今回と同じ死に方をした人が居るのよ……そう、あなたの母親サラよ。」

「え、せつかく俺が色々二人つきりで教えてやったのに。」

「はあ、これで情報が全部教えてしまったわ。もしかしたら捜査にも協力してもらうことになるからそのつもりでいてよね。」

「おいおい、あまり無茶はさせんでくれよ。何せまだ後遺症とかあ

るかもしれねえしな。」

「空の女神エイトスの名に誓って無茶はさせないわ。」

「……仕方ないか、くれぐれもな。」

「お父さん、俺たちに任せてください、子供さんは怪しい奴には指一本触れさせませんからね。」

「お前が言っな！」

僕とルフィナが二人揃って思わずつつこんでしまった。

食事も終わったことだし、部屋に戻るのかな。その時後ろからちよつと声がかかった。

「ああ、そうそう、一応両腕をまくって肩口まで見せてもらえないかしら。一応念のためということぞ。」

僕と父さんは腕をまくってみたが、どこにも文様のようなものや傷すらも見当たらなかった。

「ありがとう、ではまた後でね。」

「離れ離れになるのはすごく残念だけど、またすぐに出会えるからな。では。」

と、僕たち、いや僕に向かってすごく手を振っている……なんだか

なあ。

二章 4 話 探偵と事件調査（後書き）

こんな書き方でいいのかな、みなさんのアドバイスよろしくお願
い
します。

二章5話 捜査と犯人疑惑（前書き）

みなさんは小説の構想を考えるときどんなことをしていますか？
ちなみに私はこの小説の原作である空の軌跡のゲーム音楽の

『銀の意思 金の翼』

『Cry for me, cry for you』

『Overdosing Heavenly Bliss』

などの曲をリピートして聞いております。

私的に好きな曲なのですごいテンションが上がって構想が出てきやすくなりますね。

二章5話 捜査と犯人疑惑

ルフィナさんか……確か後で『千の腕』と評されるほどの切れ者だったはずだよな。うっ、かなりぼろを出してしまったようだ。父さんにも迷惑をかけたみたいだ。かなり険しい顔をしてる。

「ちよつと疲れたね。」

「……そうか、ならば、部屋に戻ってもう少し休むといい。俺も一緒に戻るう。」

「うん、ありがとう、父さん。」

個人的に色々と聞いてみたい所ではあるけど、まずは疲れたから横になろうかな……って父さんの方も顔色が悪いじゃないか。

「今度は父さんがベットを使ってよ、僕の方はおそらく僕の部屋があるから、そちらの方で寝るよ。」

「変な害虫が近づく恐れもあるからな、今日はここに泊っていけ。」

「うっ、確かにそうかも、でも、今日は父さんがベットに寝るんだからね。」

「ああ、分かった。何かあったら起こしてくれねえか。もし、外に出るんだっいたらここにスペアの鍵がある、持っとけ。じゃあ、まかせたぞ。」

「うん、任せてよっ。」

そういうと、すぐにやつれていているぐらいに疲れていたんだろう、父さんはちよつとするととうなされ出し、うわ言の様に「フレイス……サーラ……。」「と繰り返し呟いている。僕はそつと父さんの手を取り、「僕はここにいるよ。」と呟くと。ちよつと安心したかのようにすうすうと穏やかな顔で眠ってしまった。

父さんがしつかりと眠ってしまったのを確認してもしばらくの間握つてあげよう。

その間に僕もガベル教授を殺した犯人について考えてみよう。

まず、5と7のゴルン三兄弟と見喰らう蛇ウロボロスについてはあんまりにも荒唐無稽だと思う。

次に、僕だけが知っている事実……フレイス君が行方不明？ということ。これが一番の問題だと考えるね。だって、僕がいなければそのことが問題になるはずだからね。ならば、フレイス君が教授を殺したかっていうとどうなんだろう。可能性はあるけど、その後、いなくなるなら犯人の可能性は高いよね。あつ、そういえば、魔法陣と『アーティファクト』がなぜ一晩経つてなかったものが現れたかもすぐく興味はあるね。

最初に入った人の見間違いもあるけど、えてしてこういう情報から犯人が出てくるはずだからね。おそらく、夜中に音がしたときに部屋に入ってきたと考えるね。

或る意味というより、本当に密室殺人だね……研究室には窓がない部屋、鍵も複製されない限りは駄目だし……。なにか見落としはないかな。

やっぱり、実験に失敗して死亡したつてというのが妥当かな。パウワ―教官が殺したとしても、密室殺人にすることも簡単にはできないしね。

ふう、頭を使ったらちよつと飲み物と甘いものが食べたくなくなってきちゃった。父さんは大丈夫かな、鍵をかけていくけど、なるべく早くに帰ってこよう。

部屋を出て行く前に、父さんの手を冷やすといけないので、毛布の中に入れてあげた。

部屋を出て、食堂に行つて、お茶とお茶菓子を取ると横に同じ商品を取ったルフィナさんがいた。

「うわっ、でたっ。」

「人を幽霊みたいにいわないでよ、どうしたのってお茶ね、私も一緒にしてもいいかしら、ちようどうるさいのもいないしね。」

「うん、早く部屋に戻らないといけないから少しの間だつたらいいよ。」

「ええ、それで結構よ、ありがとう。」

二人でラウンジ丸席についた。ちようどおやつ時で、周りにも何人かは他の丸席にいた。

「懐かしいわね、ここで一緒に訓練した時もお茶を何度もしたのよ。一緒に競い合つてでも、なぜかあなたはいつも遠慮してた。昔言つたこと憶えている？」

「ごめんなさい、憶えていないんだ。」

「そう、一時的な記憶喪失ですって、大丈夫なの？」

「しばらく安静にしていれば大丈夫だと思うけど……。」

「なら、事件の前のガベル教授の様子も憶えてないの？」

「うん。」

「熱とか出てないかしら。」

いきなり、額にひんやりした手を当てられて、僕の体温が少し上がったような気がした。

「少し熱もあるかもしれないわね。水分を多く取ることね。」

「うん、そうすることにしようよ。ちょっと聞きたいのだけど。」

「ええ、なあに、あなたから積極的に聞いてくるなんて珍しいわね。」

「えっと、もし、ルフィナさんの大切な人例えば、ネギ、もといケビン君やリースさんが危機に陥って助ける為に自分の命を使わないと助けられないことが分かっていたならどうする？」

「ええ、もちろん助けるわ。もちろん、グレゴリー教官やフレイスあなたもね。」

「ええっ、僕もなのっ。」

ニコリとこんなことを言ってくるなんてドキドキする。でもルフィナさんなら本当のことなんだろうなあ。

「ありがとうって言った方がいいのかな。でも、怖くないの、僕なら足がすくんでしまうよ。」

「私だって怖くないわけじゃないの。でも、必要なら必要なことをするまでよ。例え、自分の命でもね。」

「ルフィナさんって強いんだね。」

「いいえ、違うわ。私は弱いからこそ、そんなふうにしてでも守りたいものを守るのよ。」

「いや、強いよ、僕には逃げ出してしまいそうだ。」

「ふふふつ、さてどうかしらね。私はあなたのことを買っているからね、その評価は変えるつもりはないからね。」

「話は変わるけど、事件の進展の方はどうなの？」

「それが、さっぱりなの、夜、部屋の見張りの兵士にグレゴリー教官が差し入れを持って行ったぐらいだわ。決定的な手掛かりが抜けしているわ。」

「そういえば、ルフィナから見て父さんってどんな人なのかな？」

「一言でいえば『頑固おやじ』だね。厳しい中に優しさのあるみんなのお父さん。私も色々と手助けしてもらったしね。そろそろ恩返ししてあげなきゃ、今度はいつなるか分からないから。」

「そっか、それもその通りだね。ははははっ。……………ルフィナさん、今夜時間があるかな？」

「もしかして、デートの誘いかしら？」

「いつ、いやそんなんじゃないけど……………無理ならいいけど。」

「冗談よ、もちろん願ってもないわ。ふふふっ、やっぱり君は昔と変わっていないね。」

「じゃあ、夜9時にこの食堂に集合ってどうかな？」

「ええ、了解よ。どんなエスコートをしてくれるか楽しみにしてるわ。」

「じゃあ、また夜に。」

僕が帰った後に彼女は僕に聞こえないくらい小さな声で呟いていたのだった。

「まさかね、彼に『特別製』の矢を使うことになるなんて思わなかったわ。」

二章 6話 真相と犯人判明（前書き）

犯人が今回わかります。皆さんの予想はいかがでしたか？
次の話でまた選択肢がでます。

お気に入り登録本当にありがとうございます。

二章 6話 真相と犯人判明

それから僕はすぐに父さんの部屋に戻った。

まだ、父さんは眠っているみたいで、まだ、悪夢でもみているかのように時々うなされていようだった。すぐにベットの横の椅子に座り、父さんの宙を掴もうとする手をそっと握ってあげると、またすうすうと表情が和らいで寝ている様になった。

そういえば、父さんと最初に会った時に腕の隙間から見たら模様か傷のようなものが見えた気がしたけど、気のせいかな。せつかく服をちよつと直すついでにちよつと悪いけど確認してみよう。……えっ、文様がある……もしかしてこれは『聖痕』。さつき食堂で見たときは何もなかったからおそらく正しいだろう。

とそのとき、父さんが寝返りをちよつとうつた。ふう、危ない危ない、もう少しで気づかれるところだった。『聖痕』ならばなぜ隠すのだろう、それに確か名誉なことなはずだよね。

何か理由でもあるのかな。しばらく考えていると、もうすぐ夜の9時になる所で、父さんは目が覚めた。

「まさかずっと、そばにいてくれたのか？」

「うん一回、少しはなれたけどね。」

「そのおかげだろうか、久しぶりによく眠れた。ありがとう、息子
」

「うっ、うん。それとなんだけど、ちよつと今から出かけないといけないから、ルフィナさんと会う約束があつてね。」

「今から、ひよっとして逢引でもするっての。それなら俺がついていくのも野暮ってもんだな。まあ、気合入れていつて来い、悪い相手ではないぞ。」

「いつ、いや、そういうんじゃないんだから、あつと、父さんにも戻ってからちよつと聞きたい事があるけどいいかな。」

「なに遠慮なんてしてんだ、かまわねえぞ。」

「では、行ってきますかな。」

「おう、行ってこい。」

僕が部屋を出ると、すぐに食堂に向かった。食堂の扉を開けて中に入ると中は少し薄暗く、天窓にあるステンドグラスから入る星明りだけが光源となっていた。しばらく中に入ると入り口の方に気配を感じ振り返った。そうすると、ルフィナさんが入り口の近くの所から僕に向けてボウガンを構えながら立っていた。

「いきなり、ボウガンを構えるなんてぶっそうじゃないか。」

「……あなた、本当にフレイスなのかしら？」

「えっ、えつと……。」

「やっぱりね、会ったときから何か違和感があったわ、それに話してみても記憶喪失だと言うのに知っている情報とフレイスにすら話していないかった、ケビンの姿形の情報までも知っていたわ。」

「でも、それなら調べるか、会いに行けば分かるんじゃないか。」

「ええ、確かにそうね。でも、おかしいじゃない、記憶喪失だって言うのに、現場の状況については覚えていないのにケビンの情報だけ憶えているって言うのはね。あなたが何者かは分からないけど、フレイスの姿を騙っただけでもこういうことになることは想像できるんじゃないかしら。」

「……………うん。」

「なにか言い残すことがあるなら、一応聞いておくけど。」

えっ、ルフィナさんって平和的になんでも解決するんじゃないかってつけ。そんな風に確か聞いていたんだけど、本気でピンチだ。どうしよう、このままだと、僕が死んでさらに父さんにまで迷惑がかかっちゃうよ。でも、ルフィナさんは父さんが犯人とは思っていないから僕がなくなること事件が解決するならそれでもいいかな。

「父さんに一緒にいられなくなってごめんなさいと言っておいてよ。ロベルト、ララ、カナン、会えなっごめんっ。」

僕は、目を瞑り最後の瞬間を待った。ボウガンが発射する音が食堂の中を鳴り響いた。

いつまでたっても、僕にボウガンが当たった様子がない、目を開けていくと僕の目の前に人がいきなり立ちふさがっている。

「やはり、あなたが犯人だったのでね、グレゴリー教官。『聖痕』

を持っておられますね、おそらく移動する能力でしょうね。」

「やはり、食えない女になったな、ルフィナ。まさか、『特別製のゴム製の矢だとはな。その通りだ、俺がやつちまった。すべてな。ツカサはこの件にはまったく関係ねえ、それは空の女神エイトスの名に誓って言おう。」

近くに潜んでいた助手のイワン君も僕と父さんのすぐ近くに出て来た。

「ルフィナさん、すばらしいお手前です、真相ってどんなことなのか分かりますか？」

ルフィナさんとイワン君は警戒しつつ、ルフィナさんは少しずつ真相について語りだしたのだった。

「おそらくなんだけど、『聖痕』は最初は本物のフレイスの方に現れたのだと考えるわ。そして、その発現の際に母親サーラさんが犠牲になった。『聖痕』の文様を隠すことができたのも、模様の位置を移動する能力によって場所を変えたからよ。次に、今回の事件なんだけど、おそらくワイスマンが結社に裏切った為に立場が危うくなり、すぐに結果が欲しいガベル教授があせったわけよ。それで、『アーティファクト』を用いて聖痕を発現させる魔方陣で実験をやるつもりだったけど、実際は違った。『聖痕』を別の人に移す実験だったのよ。その実験の立会いにガベル教授、フレイス、そして、教官あなたがいた。そこでハプニングが発生して、フレイスの『聖痕』を教官の『聖痕』に移す際に、フレイス自身の体全部をも巻き込んで教官の『聖痕』に宿ってしまったのよ、残念なことだね。そ

して、喜んでいるガベル教授を衝動的に『聖痕』を使って魂をどつか別の場所に移動させた。そのあと、川辺に部屋の中から瞬間移動したのよ。そこで、ツカサ君だっけ、あなたに会ったのよ。」

「なら、なんで父さんは、危険を犯してまで『アーティファクト』を置きにいたりしたのかな？」

「それは、ツカサ、あなたが原因ではなかしら。おそらく何も知らないままだと、ツカサあなたが一番怪しいことになるから、それを防ぐためにあえて危険を冒したとしか考えられないわ。」

「父さん……。」

「そこまで分かっているのなら、話がはええな。ならば、俺がこれからすることもわかってるんだらうな。」

「ええ。ツカサ、イワン、教官からナイフを取り上げなさい。」

ルフィナは父さんの利き腕をボウガンで撃ち、わずかに動きが遅くなったところを僕がナイフを手で、イワン君が父さんの身体を取り押さえた。

「息子を俺の手でころしたようなもんだ、ツカサについても犯人ではないということが分かっているってなら俺が居なくなっても問題ないだらう。」

僕は、ナイフを掴んで血まみれになった手で父さんを思わず、ビンタしてしまった。痛みそう、心の痛みで目から涙がポロポロと流れ

出した。

「ばかつ、父さんは全然分かってないよっ。フレイスさんは、いつも父さんが幸せであることを願っているし、それにサーラ母さんだつてきつとそう。自分で勝手にケジメが何か知らないけど、父さんにとっては違うかもしれないけど、ルフィナさんや父さんが教えて来た教え子たち、それに僕だってみんな父さんのことを父親、いや父親以上に思っているんだから、そんな風に逃げちゃだめだよ。それに、まだ教えてもらっていないことがたくさんあるんだからね。」

「……………ツカサ。」

それと、その時になにかイワン君が父さんの方に何か言ったようだった。すると、僕とイワン君の方を目を見開いて見た後、父さんのナイフを持っていた手が緩みナイフを放してくれた。

「ふう、もう大丈夫みたいね。まさか、ツカサあなたが説得してくれるとは思わなかった。」

「だって、父さんはいつまでたつても父さんなんだもん。」

「一応規則だからね、ガベル教授殺害容疑でグレゴリー＝マウワイヤークラフト指導教官を審問会まで連行します。よろしいですね。」

「ああ、わかった。」

「行くまでにちょっとここの引き揚げ準備があるから、少し時間ならとれるわよ。」

そうしたら、父さんは僕の血まみれの手を包帯で手当てをしてくれた後、しっかりと抱擁をしてくれた。

「……これからお前にどんな困難試練があるかも知れんが、お前に言えることはただ一つ

『いつも意思を強く持って何事にも当たって行け』。いつでもどんな姿でも俺はお前の父親だ。」

「うん、僕も父さんが出てくるのをずっと待ってるね。」

そういうと、父さんはさらにギュッと抱擁をしたあと、『名探偵』ルフィナさんと一緒に食堂を出て行った。

二章最終話 選択と神代行者（前書き）

『女神の代行者』：一応、七耀教会の教主にすら命令権限を持たないような神の使徒の様なもの……能力は各自違い、『聖痕』と違い、自分と触れたもの以外の自分の視界にも効果は及ぼすことができる。ちなみにフィアはある理由で他人の想いによって自分自身が変わる能力にほとんど限定されております。

（21）とは、リトルバスタズで出た『ロリ』のことです。決して、エクスタシーなんてやったことはありませんぞ。いや、ほんとにマジで。

そして、見て頂ければお分かりの通りアイン君はヤンデレの男バージヨンだなんて思いますね。

『メルカバ』：星杯騎士団が極秘裏に使用する飛行艇です、まだこの時代には試作機ぐらいしかないと出て出してみました。

二章最終話 選択と神代行者

二人が出て行った後、イワン君と二人残った為に疑問に思ったことを後ろの方で作業しているイワン君に聞いてみた。

「イワン君が父さんに呟いたことって何だったのかな？」

「ああ、簡単なことだ。『人の罪は人には許せないなら、抹消された神の代行者フィア（04）が許したお前を俺が空の女神エイトスの代行者たるアイン（01）の名を持ってお前を許そう。』とね。さあ、元の姿に戻ってはやくここから女神のゆりかご（サンクチュアリ）と一緒に戻ろう。」

とって、眼鏡を外したイワン君：もとい『アイン』が僕に後ろから抱きついてきた。すると、僕の身体が輝き、髪は金色をベースに虹色にかすかに輝き、笑ったら誰にでも愛されるような可愛い10歳前後の女の子に変身させられた。そして、材質はシルクに近いちよっとだけフリフリのついた純白のワンピースを着せられていた。

「ええっ、なんで僕はこんな姿に。」

「それが元々のお前の姿である、俺たちの妹である『人の想いを取り込み反映させる能力を持つ』フィアの姿だ。」

とって、すりすりしてくる。言っていることとやっていることのギャップが激しく……正直キモイ。

「この(21)とか変態だつて言われたことないかな？」

「ああ、仮に変態だとしても変態という名の紳士だからね。幾星霜のすえやつと再会できたのだからこれぐらいの特権は空の女神エイトスが許さなくてもこの俺が許す。それに他の兄弟も心配しているんだぞ。」

と行って、ずっとすりすりを続けてくる。

「もう、離れてよ、そろそろルフィナさんも戻ってくると思っしね。それにこの姿じゃまずいんじゃないかな、もとに戻してよ。」

「なぜ、戻さないといけない？ファイアは俺と一緒に試作機『メルカバ』の機体で女神のゆりかご(サンクチュアリ)と一緒に行くんだろつ。」

「えっと、ルフィナさんはいいの？」

「なんで、お前以外の優先事項なんてあるんだ。」

と、キョトンとしている……うわあ、これは末期のシスコンっていうのかな。正直、これは誰でも嫌だろつ。

「僕には約束があるんだ。だから行かないといけないんだよ。」

「俺と一緒に行く以上の重要なことなどあるとは思えないがな。」

「でも、あるんだよ。………アインお兄ちゃん………お願いっ。」

と、最終手段の上目づかいに目をつるつるさせながら頼むと、鼻血を流しながら後ろに倒れつつ、本当にしぶしぶながら放してくれた。

こちらの精神ダメージも激しいから多用はできないけど、効果はバツグンだ！

さて、僕はどうしようかな。

(1)、ロベルト達に会いに行く。

(2)、アインと一緒に女神のゆりかご(サンクチュアリ)に行く。

(3)、なにか突然ピコーンって閃いて別の場所に行く。(作者注：みなさまのご意見で書けそうなものであるならば時代については百戦役の後であればオツケーです。)

一章最終話 選択と神代行者（後書き）

おかげさまで1300ユニーク、8000PVありがとうございます。
す。

本当にみなさま、ご覧いただきありがとうございます。

幕間 幕間と結末（前書き）

ここを読んで頂いている方々、いつも読んでいただき本当にありがとうございます。
とっごくざいます。

次の話については、フィア（04）の過去についてがメインの話ですが、サブの話としてエピソードを入れていこうと考えております。

幕間 幕間と結末

七耀教会の周辺が雲の上の晴れて光輝いた空の女神と^{エイトス}その周りに三人の男女と離れた場所に暗雲が立ち込めた雲の下で先程の男女より幼い薄汚れた少女が二人と両方から離れた場所で少年が見ている図が描かれた幕がまた降りてきた。舞台の脇からピエロの化粧をした少年が中央に歩いてきて、正面を向いてペコリと一礼する。

「みなさま、二章の劇、『^{トニオン}守護騎士の残響』から『^{トニオン}守護騎士の誕生』に変わった様はいかがでしたでしょうか？今回は先に言っておきませんが、変わる前の劇についてはご想像にお任せします。」

さて、三章はフィアの過去について劇が行われる予定です。あ、そうそう、グレゴリーは長い間空位だった^{トニオン}第四位守護騎士に着き、彼の二つ名については本人が望んだものは却下され、『神速の皇帝』と呼ばれる様に教会上層部の命令されました。しかし、死んだ後の彼の墓にはただ『フィアの父』と書かれていた様です。では、次の幕間にてまたお会いできることを楽しみにしております。」

深々と一礼して少年は舞台の脇の暗闇に消えていった。

三章 1話 餓別と空の旅路（前書き）

好きな空の軌跡のキャラクターは、男性キャラはフィリップ、カシウス、リシヤール、オリビエ、アガット、ヨシユアですね。女性キャラは、レン、ティータ、エステル、アネラス、シエラザード、メイベル市長ですね。……一部プレイヤーキャラじゃないのも含まれています。気にしないでください。

三章 1話 餓別と空の旅路

選択肢：(1)、ロベルト達に会いに行く。

僕はそう、ロベルト達にもう一度会って謝らなければいけないんだ。だから、アイン”多分”兄さんとその他の待つている兄妹には申し訳ないと思うけど、行かないといけないんだ。それから僕はどうするかを考えないといけない。僕は、アイン兄さんの正面を向いて僕の方からちゃんと抱擁をしてあげてから言った。

「必ず、兄さん達にも会いに行くからね。それまで待つてもらえないかな。駄目かな？」

と上にある顔を見ながらちよつと首をかしげながら言った。そうすると、アイン”彼の鼻血量はもう限界よ”兄さんは仕方ないなあという顔になった。

「弟妹の言う通りになったな……。いや、分かった。その代り、必ず無事に帰ってくるんだぞ。にい、いやお兄ちゃんたちはいつもフエアのことを思っているからな。そうそう、弟妹からフィアへのプレゼントを預かっているんだった。」

透き通った宝石が中央に配置され、周りは複雑な銀細工がわずかに施してあるペンダントを僕の方に渡してくれた。あと、なんか脇に絵本のようなものが見えたけど、あれも渡してもらえるのかな。

「……ファイアに渡すのはこれだけだ。」

「……それにしてもアインおにーちゃんが迷ったようだけど、ひよつとして渡したくないから渡さないつもりなんだ、その絵本は。」

「うっ、これはお前のことをおもってだなっ。」

「そんなこと言っているとおにーちゃんのこと嫌いになっちゃうかもよ。」

「わっ、分かったよ。まったくファイアにはかなわないよ。」

と言って、ペンダントと絵本を渡してくれた。受け取ったその時、ルフィナさんが戻ってきた。

「おかえりなさい、ルフィナさん。」

「ついにやつちゃったか、この犯罪者めっ。どこの少女をかどわしてきやがったの。」

とアインに向けてボウガンに向けて来た。うれしんだけど、いつもニコニコしていた分ギャップがすごく怖い。

「ごっつ、誤解だよ、この娘はツカサなんだ、いや、元の姿に戻ったということなんだ。」

「嘘おっしやい、人がそんなにポンポン変わったら、審問会なんて

「いらないわ。」

「いつ、いや、ア…イワンさんの言っていることは本当だよ。」

「その変態に脅されて言っているわけじゃないでしょうね。」

「うん。」

ようやく、誤解が解けて、ボウガンを下してくれた。ふう、間一髪だった。

「あなたがツカサなのね、ずいぶんと可愛らしいわね。そんな趣味がなくてもお持ち帰りしたいくらいだわ。」

「ようやく、意見の一致が図られたみたいだね。そうだよ、当然だ、僕の妹なんだからね。」

「妹だからといって無理やりやるのは犯罪よ。あつと、ツカサ……ちゃんの方がいいかしら、どこか行きたいところあるかしら？」

「うん、エレボニア帝国の方にいかないといけない約束があるんだよ。それと、ちゃんずけはいらさないからね。」

「そう、なら、手続きが必要ね。グレゴリー教官からお願いされたの、できるだけツカサの便宜を図ってくれてね。お金も預かっているわ。」

「父さん……。ねえ、父さんってどうなるの。もしかして死刑になつたりしないよね。」

「絶対にそんなことにはならないし、そんなことにはみんながさせないわ。だって、貴重な守護騎士ドミネーションを死刑にするなんてバカなことを考えるなんて異端審問会でもできやしないし、私も十分に釈明してあげるからね。」

「……よかった。」

自然と涙がポロポロと出てくる。でも、前の涙と違って気持ちのいい涙だ。そうすると、アインとルフィナさんが僕の涙をハンカチで拭きとってくれた。

「ありがとう、アイン兄さん、ルフィナさん、そして、父さんもだね。」

後で聞いた話だけど、グレゴリー教官の減罪を申し出る嘆願書が異端審問会に過去最高をはるかに上回るぐらい届いたんだって……みんなに慕われていたんだなあ、父さんって。

二日空港近くの宿でチケットを取るために僕が居る間、アインはずっと僕を満喫しているようだった……仕方がないっちゃ仕方がないかもしれないけど、もうそろそろ妹離れしてもいいんじゃないかな、もし兄さん達の所に戻ったら何か案を考えてあげようかな。

二日後、空は綺麗に晴れ上がって澄み切っており、まさに空の旅の出発にふさわしい日だね。色々兄さんと一緒に買い物したり食事をする際に聞いた話なんだけど、エレボニア帝国は百日戦役が終わって間もないので治安の方があんまりよくないらしいって噂は聞いた。さて、そろそろ時間だし、出発ロビーに並ぼうかな。あつ、なんか兄さんはもう泣きそうだ。並ぼうとした所に小さな箱を

持った大柄の男が割り込んで僕がぶつかってしまい、ちょっとよろけてしまった。兄さんはすごい形相でその人を睨みつけて、僕が抑えないと本当に視線だけで人を殺してしまいそうだった。えっと、乗客について並んでいる人だけど、周りを見る限りこんな感じだね。

1、貴族か王族と言ってもいいぐらいの金髪の僕と同じ年ぐらいの可愛い女の子とその護衛らしい女の剣を持った人……なんかどつかで見たせ　バーのサーバントみたい

2、先ほどのぶつかった大柄な男たち3人組……ガラが悪そう、三人でなにか話し合っているみたい。

3、商人風のやせぎすの男と軍人風の男……なにか商売の行き帰りのどちらかかな。軍人さんは、その護衛かな。

4、若夫婦……おそらく新婚旅行の帰りなのかなすごく幸せそうに手をつないで二人で見つめあっている。

5、ゴルン三兄弟……なんで、彼らもここにいるの。もしかして恩赦でもされてお金でも手に入ったのかな。なにか「バターロール」とかなんだの聞こえて来たけど気のせいだよな。

6、僕を含めて合計13人だね。

あと、乗組員が10人前後いるみたいだよ。

先ほど、周りを見回した時、同じ年ぐらいの女の子と視線が合い、

向こうから微笑まれたので、僕の方もちよこつと手を動かし、微笑みかえしたら、ちよつと嬉しそうにしていた。出発近くになると、ルフィナさんもお見送りに来てくれて、アインを必死に止めているみたいだ……やはり俺も行くだの聞こえてくる。まったく、最後までらい締めてくれればいいのに。

「またね、アインおにーちゃん、ルフィナさん……えっ、うそっ……
…父さんっ。」

なんか、周りに兵士の人何人かいたみたいだけど父さんも来てくれた。おそらく、ルフィナさんが色々と頑張ってくれたんだろう。僕は彼らに向かって大きく手を振り大声で言った。

「行ってきます。必ず、戻ってくるからね。絶対に元気にしててね。」

「

三章 1話 餞別と空の旅路（後書き）

選択肢っているのかな、すごく迷ってしまいます。

感想を頂ければ、分かるのですがと、感想をすごく欲しがっている様を表現しようとしております。

三章 2話 絵本とおとぎ話（前書き）

いつの間にか1700ユニーク 10000PVを超えてました。
みなさま、本当に読んで頂き、ありがとうございます。

今回は、絵本のお話です。

なかなか、実際の絵本のように書くのは難しいです。

もし、誤字脱字や表現がおかしいところがありましたら知らせていただけるとありがたいです。

もし、この絵本に題名をつけるなら『みんなのファイア』だと考えます。

三章 2話 絵本とおとぎ話

宿にいた時はアイン兄さんがずっとべったりだったせいで、ほとんどこの絵本は読むことは出来なかったけど、ようやく落ち着いて読むことができるよ。ピンポンパンポンと音が鳴り、放送が始まった。

「今回は飛行船トワイライト号に乗船頂き誠にありがとうございます。当船は航路アルテリア法国からエレボニア帝国首都へと飛行時間約10時間を予定して運航しております。機長はドロップが務めております。みなさまごゆっくりおくつろぎください。お飲み物が必要なお客様がおられましたらもう少しして気流が安定しましたらラウンジにて無料にて配布させていただきます。どうぞ、ご利用くださいませ。」

僕は飛行船の音や風の音には気にすることなく絵本に意識は集中したのだった。

この本はゼムリア文明の大崩壊についてのお話らしい。題名はついておらず、ただ、表紙には七耀教会の周辺が雲の上の晴れて光輝いた空の女神とその周りに三人の男女と離れた場所に暗雲が立ち込めた雲の下で先程の男女より幼い薄汚れた少女が二人と両方から離れた場所で少年が見ている図が描かれていた。

『この絵本を愛する妹フィアに捧げる。』と表紙の裏に書かれていた。

昔々、あるところにそれはもう仲の良い四兄妹がおりましたとさ。

いつも四人は一緒にご飯を食べ、遊び、一緒になって寝るぐらい仲良しでした。

特に末の娘であるフィアは可愛がられ、笑顔を他の兄弟は見るのが好きでみんなが競って彼女にしてあげるのです。

その四人の様子を窓の中から見つめている少女アリスがいましました。

アリスはとてもなおりにくい病にかかっており、お医者さんはもうこの病気はなおらないと考えておりました。

しかし、アリスはあきらめずに一生懸命に願いました。

私もあの子達と一緒に遊びたい。

その瞬間、末娘フィアと突然目が合いました。

フィアはいきなり兄姉から別れてアリスの部屋を訪ねてきて突然尋ねました。

「私たちと遊びたいの？」

「うん、遊びたいけど病気があるから……。」

「なら、病気がなくなることを強く願って、私も一緒に願うから。」

それからフィアはアリスを毎日のように訪ねて、色々なことを話し合いました。

お医者さんがしばらくして訪ねた時にはなんと病気がなくなっていました。

そう、願いが叶ったのです。

それからアリスは様々なことを願うようになりました。

綺麗になりますように、お金をいっぱい持てるようになりますように、年を取りませんようになどです。そして、フィアも一緒に願ってみんな叶っていったのでした。

そうこうするうちにアリスは人気者になり色々な人が彼女を訪れるようになりました。

そう、アリスは色々な国の王子様がすすんで一緒に夫婦になりたい為に訪れたりもしました。

いつの間にかアリスを中心に国ができました。

それでもアリスは頑張っただけ願うことで、ついには大陸が彼女の下に一つになりました。

ほとんどの人は喜び、アリスをほめました。

しかし、いつもアリスの側にいるフィアはアリス相應しくない、自分達こそがアリスの側にいるべきだと思いました。

ある日、その中の一人がフィアがアリスの側にいるのはフィアが化け物だからだと言いました。

あまり意味のないことでしたが、色々な人が実際のことを自分の勝手な考えにより面白可笑しく書きました。

いつしかフィアは身体がおかしくなっていました。

そうするとみんなはさらにおばけだ、あくまでとさわぎました。

アリスのお陰で技術がすすんでいただったのでみんなの色んな考えがとも早く伝わっていくようになっていたので少しの間に大陸中に伝わりました。

アリスがフィアの様子に気づいた時にはフィアはあくまやおばけの様な姿になってしまっていました。

アリスはすぐにフィアはあくまやおばけである考えを止めるようにみんなに言いました。

しかし、フィアの様子を見た人はみんなこわいと思ったので、人をたべちゃうおばけだのいっぱいものをこわすあくまで色々な自分のこわい考えをみんなに書きました。

みんなはフィアはこわいものだという考えが大陸中のいっばいに広がりました。

ついにはフィアは人々の望んだ様になり、そしてみんなのフィア（英語できょうふの意味）になったのでした。

おしまい。

三章 2話 絵本とおとぎ話（後書き）

今週半ばから本当に忙しくなりそうです。その前に三章までは投稿を終わらせたいです。

三章 3話 甲板と雲の行方（前書き）

なかなか作者がぐっとなる文章が書けない……うん、文章を書く
ペーすが落ちてきました。

三章 3話 甲板と雲の行方

僕は絵本を読み終わり、座席の上に絵本をおいて背伸びをして風にちよつと当たりたくなつて甲板の方に向かった。

甲板へ続く扉を開けると、少し雲が出始めてはいるが、出発時と変わらず太陽がキラキラと輝いてそれなりの陽気があるのだった。僕が少し髪をたなびかせて、脇の柵に寄りかかつてたそがれている所に声をかけられた。

「ずいぶんと熱心に絵本を読んでいるようでしたけど、どのような絵本だったのかしら？」

横をみると、僕と同じぐらいの少女が髪を僕と同じくたなびかせ、微笑みながら僕に尋ねて来るのが見えた。

「ある少女が兄妹たちと別れて、病弱な女の子の望みをかなえて行ったのだけど、最後には自分が化け物になつちやうお話だね。もし、詳しく知りたいのなら座席の方に置いてあるから貸してあげるよ。」

「じゃあ、お話に出てくるある少女ってバカみたいじゃないの。何がしたかったのか全然わからないじゃない。だって、化け物になつちやうんだもの。」

「なら、仮にあなたがある少女で、僕が病弱な少女だったとするよ。最初に一緒に遊びたいと僕が願つてたのに、それを守らなかつたらどうするかな。」

「私なら、他の遊び相手を見つけるか……ってひょっとして、気を引くために……そう、そうなのね。」

「おそらくだけど、最初に一緒に遊びたいって病弱の少女が願ったから、一緒に遊ぼうって手を差し伸べるのをずっと待っていたんじゃないかな。だから、興味を引くように色んな願いを叶えてあげてたんじゃないかな。その少女と遊びたい一心で。」

「なっ、なんて……こんな初歩的なことに私は……全然気付かなかったのかしら……。そんなことなら私はいつでもできたはずなのにね。」

「いつでもできるわけじゃないよ。病弱な少女は色んな人を集めて国も作ったり、したいことややりたいことがたくさんあったからずっと黙って待っていたんだらうね。」

「まったく、馬鹿よっ、大馬鹿よ。そんなになるまでずっと待つているなんて……。」

「でも、そんな子だからこそ最後までずっとアリスのそばにいたんじゃないかな。」

「わっ、わたし……フィアに謝らないといけないとずっと……。」

おそらくアリスであろう人物は涙ぐんでいる僕は、そっとアリスの近くに行き、抱きしめてあげた。

「謝る必要なんてないんだよ。決して、フィアはアリスを恨んだり

怒ったりしてはいないよ。だって、そうじゃなければずっとアリスのそばを離れることがなかったんだから、いや、好きだったからこそ離れれなかったんだよ。」

アリスがうわーんと泣きだした。その涙が枯れるまでずっと、僕はアリスを抱きしめて頭をずっと優しくなでてあげるのだった。

「あー、泣いたのは本当に久しぶりね。私の名前は分かっているかも知れないけど、アリスよ。名前を聞かせてもらってもいいかしら？」

「僕の名前はツカサだよ。アリスさん。」

「アリスと呼びなさい、ツカサ。それと友達になってもらってもいいかしら？」

「うん、いいよ、アリス。」

そういうとじーと僕の方を見て片手に針の進んでいない銀の懐中時計を持ちつつのニヤリと笑った。

「でも、私だけ恥ずかしい思いをするなんて不公平だわ。そうだわ。」

その瞬間寒気がしたかと思うと壊れていると思っていた懐中時計の針が十二時方向だったのが六時方向に移動したような錯角をつけたよ。気のせいだよ。

「何かしたの？」

「ふふふっ、ちょっとしたサプライズよ。」

まあ、いいかすごく機嫌がよくなったみたいだしね。さて、暫くたつたせいか、周りにはどす黒い雲が出てきて肌寒くなってきた。

「アリス、ちょっと寒くなってきたから船内に戻らないかな。」

「ええ、いいわ。」

と腕を組んで船内に戻ろうとした瞬間、船内から大声が響き渡った。

三章4話 獵兵と爆弾処理（前書き）

さて、次の話かその次の話で今回の章は終わりです。

どんどん章の話数が短くなっているなあ。

最終的には一話が一話になったらどうしよう。

三章 4 話 獵兵と爆弾処理

「この飛空船は俺たち「北の獵兵」がハイジャックした。おとなしくすれば危害は加えない。もし、妙な動きをしたらボンツとなると
思え。」

と言つて、機長に銃を突き付けて話しているのが甲板からの扉の隙間から見えた。この事態にアリスの護衛の人と軍人さんは苦虫を噛み締めた顔をして武装解除に応じていた。僕は甲板の扉を非常にゆつくりと締め、隠れる場所を探した。そうすると船前の柵を越えた所にちょうど子供なら身体を寄せ合えば隠れられるくぼみを見つけた。小声であそこに隠れようとアリスに言つて、柵を越えて、少し滑り易くなっている飛行船の外壁の上をアリスの手を引きながら歩いた。僕がくぼみに隠れる瞬間、甲板の扉が開く音が聞こえた。急いでアリスを引っ張りこみ、甲板から見えない位置に抱き寄せて息を潜めた。

「まだ、ガキが二人いるらしいな。」

「ああ、リーダーは、イレギュラーは無くせと言っけど所詮ガキがたつた二人だろう。さして問題になるとは思えないがな。例え人質が何とかされようが、爆弾と言う切り札もあるしな。それに、（ガチャ）こいつだけで十分だぜ。」

と言つて、撃鉄を鳴らすような音が聞こえた。おそらく、銃を持っているのかな。しばらく、二人は一通り見回ると船内に入つて行く

音が聞こえた。

「ふう、もう大丈夫かな。」

隠れる為に僕たちは狭いくぼみに入っているせいで、アリスと強く抱き合っている形になってしばらくそのままの状態でいてしまった。ちよつと隠れる為にきつく引き寄せすぎたかな。

「アリス、苦しくなかった？もう離れてもいいよ。」

「……………いやっ。……………しばらく、このままでいさせて。」

「……………うん、ちよつとの間ならね。」

この間に、どんなことが起こったか考えてみようかな。

- 1、爆弾があり、船内に持ち込んだ人が居る。
- 2、3人は敵であることが船内を覗いた時に判明している。
- 3、敵は北の猟兵と名乗っており、3人とも拳銃を持っている。
- 4、現在、アリスと僕の2人以外は拘束状態であると考えられる。
- 5、飛行船は三階構造になっており、三階が甲板と客室、二階がラウンジ、一階が機関室と操縦室になっている。

うん、まだ、ちょっと情報が足りないかな。誰かと連絡を取ればいいのだけど、その前に出来るだけ危険を排除しないといけないから爆弾を探すことから始めた方がよさそうだ。

それから、10分近くそのままの抱擁状態だったんだろうけど、結構長く感じちゃった。

「ふう、充電完了。」

しばらくすると、満足げに離れ、アリスはなんかつやつやしているみたいだった。元気の源でも僕から奪っているようだったよ。

「まずは、爆弾を探して船外に捨てるか爆発しないようにするのが先決だと思うんだけどどうかな？」

「そうね、いいんじゃないかしら。彼らが爆弾を身につけていない限りは大丈夫と思うわ。」

「次にどこに爆弾を仕掛けているか……、一番可能性が高いのが機関室だね、動力部がやられればと考えると人を脅すのに使えるしね。次に客室かラウンジに隠してあるか、それともその三つ全部に隠してあるかだね。」

「妥当なところね。逆に爆弾さえ取り除ければ、人質を解放した時にあっさりかたずけることができるわね。」

「さて、一応使えるものがないか探しつつ、甲板から探して行こうかな。アリス、危険だからここに隠れてもいいけどどうするの？」

「もちろん行くわ、ミザリーも助けないといけないしね。」

「アリスの護衛の人かな？ミザリーさんってどれくらい強いの？」

「多分、爆弾がない状態で解放されれば、三人なんてあつと言う間に倒してしまうわ。」

「それは心強いね、なら、障害を僕たちが排除していいこうか。」

扉の中の客室をまず覗いていないと確認した後、アリスに客室を警戒してもらいつつ甲板を探してみると、ロープと金属製のバールのようなものと楔くわが12本手に入り、爆弾は見つからなかった。集中するどこに投げたら急所かどうかは分かったからカナンの姿になった時にあつた能力は残っているみたいだ。ただ、筋力が前よりも落ちていたので、威力がそこまではないかもしれないね。僕は楔とロープを持って、アリスにはバールのようなものを持たせた。気休めかもしれないけどね。

さて、次は客室だね。僕たちが客室に入ろうとする頃にはどす黒い雲が辺りを立ち込めつつあり、風も徐々に強くなっており、雷がなつてもおかしくないような天気になりつつあつた。客室を覗いても人は誰もおらず、みんな別の場所に移動させられた見えたかった。アリスに階下の方を見はっておくようお願いして、僕はすぐに客室の捜索に取りかかった。心配した見回りは捜索中は来なかった。椅子の下の一つに黒いエナメル質の箱状の物体がガムテープな様なもので貼り付けられており、ビンゴっ、爆弾があつた。ガムテープをはがすと音が出そうだから僕は甲板まで椅子ごと持って行き、外が険しい山脈付近入っていることを確認して、ポイツッと甲板の後から投げ捨てた。それなりにエナメル質の物体は大きく、およそ体

重計の計りぐらいの大きさと重さがあった。荷物の中にこんなものを持ってくるとしたら結構かさばるし、小さな段ボールか箱ぐらい必要……、あれっ、確か乗る前に箱を見かけたような。えっと、僕にぶつかってきた男だ。確か箱を持って行っていたから……あの大ききなら他に同じような箱がなければ体重計三つぐらいしか入らないはずだ。よし、じゃあ、あと二つ見つけていこう。

「下の階の方から音は聞こえたことはあるかな？」

「今のところ、エンジン音や風の音にかき消されてあまりよくは聞えなかったわ。」

「そっか、虎穴に入らずんば虎兇を得ずだね、椅子が無くなったことに気付かれる前にさっさと残りの爆弾を見つけ出そう。」

「……ええ、そうね。」

二階まで降りた時には外の方はちよつとゴロゴロと言いだしてきた。少し音を立てても分かりにくくはなっているが、逆にいえば猟兵が近づいて来た場合の音が分かりにくいということだ。時は金なり、急ぐとするね。一面に赤いカーペットが引かれているラウンジにも猟兵や人質はいなかった。もしかしたら、人質は操縦室の何か所にまとめられているんじゃないかな。また、アリスに階下について見回りが来ないか警戒するようにお願いした。二階には果物ナイフ二本と包丁一本があり、爆弾がジューズとか置いている棚の扉の裏に張り付いているのを発見した。その時アリスが、僕の所にやって来て階下から扉の開く音が聞えたことを教えてくれた。三階に移動するには足音でもしかしたらばれてしまうかも知れないし、僕たちは爆弾の仕掛けられていない方の予備のジューズの置いてある棚の中

にアリスと一緒に音をたてないように静かに息をひそめて隠れた。やがて、カンカンツと階段を上がってくる音が聞えて来て、二階のラウンジの中に入り、僕たちの方に足音が近づいてきた。いざという時の為に僕は楔をいつでも投げられるように構え、アリスもバールのようなものを構えた。キーッと隣の棚が開く音が聞こえてパタンと閉めた後、僕は身が縮こまる思いだった。足音が僕たちの隠れている棚の近くの方に近づいていき、通り過ぎた。

ふう、大丈夫かな。あれっ、なにか忘れていているような、そうだった、三階に上がられたらどちらにしろ爆弾がないことがバレルんだ。まずい、僕は、通り過ぎて棚の角を曲がったぐらいで、扉を音をたてないように開けた。僕がやらなきゃ、アリスや他の人たちも殺されるかもしれないんだ。でも、いざという時になると手が震えた。その時、そつと手を握ってくれるアリスの手があった。ニコリと僕の方を微笑んでくれた。そしてアリスに勇気づけられたのか震えが止まり僕の方を男の後ろの方から楔を男の後頭部に向けて投げ、見事にヒットし、男は崩れ落ちたのだった。男の武装解除と男の持っていたロープで男を後ろ手と足を縛りタオルで口をふさぐように結びラウンジの棚の影に引きづっていき隠した。幸い、男は気絶しているだけで息はあった。

でも、男の処置が終わった瞬間、僕は激しい嘔吐感にさいなまれ、何度も何度もラウンジの流し台の上に吐くものが無くなるまで吐いてしまった。そして、アリスが僕の背中をさすってくれたのだけど、僕は人を自分の意思で殺してしまうかもしれないことを激しく後悔し、そしてそれに声を殺して泣いたのだった。アリスがずっと僕をやさしく抱きしめてくれた。

「あはは、さっきの逆になっちゃったね、ありがとう。」

「もう大丈夫かしら。でも、きついなら止めておいた方がいいわよ。」

「ここまでやったんだ、最後までやらないとね。」

「……そう、ツカサがそうしたいならしなさい。私が駄目な時にはフォローしてあげるわ。」

「うん、助かるよ。」

幸い、外の風の音が大きくなってきており、他の猟兵には気づかれなかったようで、二階が上がってくる足音はなかった。これまで風の音が大きいならば、大丈夫だろう。猟兵から奪った銃をアリスに預けた後、ガムテープをナイフで切って爆弾を甲板からポイツと外に投げ捨てた。

よし、次で最後だ。階下に降りると、操縦室の扉でアリスに聞き耳を立ててもらおうのと、すぐに爆弾捜索に取りかかった。そうするとすぐにエンジンのすぐ近くの所に見えるように爆弾が設置してあるのを見つけ、取り外して爆弾を甲板からポイツと外に投げ捨てた。よし、爆弾は終了だ。

あとは、人質に危害をくわえさせないように何か手はないかな。扉はこの一つで、操縦室は飛行船の外から見るとガラス張りで周りがよく見えるようになっていたね。

えっと、サプライズ、サプライズね、そうだつ、危険だけど、あれをやってみよう。

三章最終話 取引と事件解決（前書き）

警告：倫理的によろしくない表現が含まれているかもしれないです。作者に向かつてこの（変態め）×5を言って読まれるか、引き返した方がいいかもしれません。

『レン』：物心ついた頃に実の両親に犯罪者組織に売られ、虐待を受けていたところを結社の任務で組織を壊滅させたレオンハルトとヨシユアによって助けられ、『執行者候補』として結社に引き取られた。その後、その才能を発揮し『執行者』となる。こうした経緯により、実の両親を偽物と呼び、常に自分の為に行動するパテル＝マテルこそが本当の両親であると思いついでいる。

三章最終話 取引と事件解決

僕は、アリスに作戦を伝えたと、甲板の方に移動した。しつかりと甲板の上のマストの様な所にロープを結びつけて、自分にもロープを巻きつけてさて、計画実行だ。うつつ、武者ぶるいがしてくるよ、風も強いせい何かスースーするような気もするし。

風は強くなってきた雷は鳴り始めた。これに乗じてなんとか成功させないとね。ロープを伝って下りて行き、操縦室の中の方を覗いてみた。すると、一人が扉の方を警戒しており、もう一人は操縦室の中央付近の人質達を窓に背を向けて見張っているような状態だった。なんとか猟兵たちに気づかれないようにしないとね。人質の二人が僕の姿に気づき……ってあれはゴルンと軍人風の男の人が、目配せをしてくれた。

「そっぴゃ、さっき話してたレーズンロールパンはバターロールに含むかって話についてだけだな。俺は、やっぱり、レーズンが入っているからバターロールに入るってのは納得いかねえな。」

「兄貴、それはさっき作るときにバターロールに作る際にレーズンを入れたらできるから、そこは納得したって聞いたでござんすよ。」

「んっ。」

「二人ともそういうがな。しかし、やはり、焼きあがったときの香りも味も、全然違うじゃねえか、やはりその点が違う以上は別物であるのは譲れねえな。」

「おい、静かにしねえか。」

と、銃でゴルンをこずく。

「俺たちにとつちやあこれは死活問題なんだよつ。結論が出るまで少し待つてくれねえか。もうちよつとで結論を出すからよ。同郷のよしみでよ、ちよつとぐらいお願いできねえか。」

うん、いまだ、トンつと僕はガラスの窓を蹴り、ちよつと動きの止まった所で足のついた場所に向かって楔をガラスに投げて勢いよく窓を蹴り割つてゴルンをこずいた猟兵に飛び蹴りを行おうとした。僕の方に向かって銃を構えようとしたが、何かに驚きその瞬間、飛び蹴りによって銃を叩き落とした。

それと同時に2つの出来事が起こつた。一つは人質の軍人風の男が扉の方を警戒している猟兵に体当たりをかけ、壁の方に突き飛ばし銃を落とさせた。もう一つはアリスが扉の方から飛び込んできて、まず人質の一人のミザリーさんの戒めを包丁で解いた。

「なにい、履いていないだつ。」

「朝はちゃんと履いてたつて、あれつ。つて見るな。」

ゲシツとかかとの部分で倒れている男のこめかみを踏みつけたらなぜか幸せそうな顔で気絶した。すごく納得いかない、とても納得いかないぞ。

「ごめんなさい、サプライズが必要だと思つてつい、てへつ。」

商人風の男の人が思わず叫んだみたいだ。

「イッツクレバー！」

「……………まさかオリビエ並みの変態に会えるとは思ってもいなかったな。」

軍人風の男の人は両手を横に挙げ首をフルフルと振って呆れているようだった。

「アリスエ〜。」

「なにも私が欲しいからというわけじゃなく、ツカサが撃たれないようにするために必要なことだったわ。」

「おっ、お嬢様っ、破廉恥です。はしたないにも程があります。帰ったら、お説教ですわよ。」

「ぜひ、こんなことが二度と起こらないようにすごーく厳しく躰けとしてよ。どこにやったの、早く返してよ。」

「普段ははいていな……………」

「お嬢様っ。」

「けど、久しぶりに履くといいものね。」

「イッツクレバー！」

この人が何を言っているのか僕にはとても理解ができなかった。その時、猟兵のもう一人がこうなりや道ずれだといって、ボタンをポチッと押したのだけど、何も反応がない。よかった、やっぱりあの爆弾はあの三つで正解だったんだ。

程なくして、三人の猟兵はロープに縛られてエレボニア帝国に到着するのだった。みんなの顔は晴れやかなのに対して僕はうなだれていた。

「いいよ、もう返さなくても……。」

「そう、よかったわ。」

クレバーと叫んでいた商人風の男の人が僕たちに話しかけてきたよ。

「本当に君たちのおかげで助かったよ。私はエレボニア帝国ストレガー社の支社長を務めているエドガー・ストレガーだよ。実にクレバーな人だ、帝国に着いたらお食事に招待させて頂けないか？」

「えっと、はいっ。アリスはどうするの？」

「お嬢様を呼び捨てにするとは何と不屈きなっ……。」

「ミザリー、私がそうお願いしたのよ。」

「えっ、本当ですか、お嬢様。」

僕に切りかかりそうになったのを一応剣を引いてくれた。

「申し訳ありません、ミスターエドガー、私どもは急用がございますので、せっかくのご招待は申し訳ございませんが、ご辞退させていただきます。ぜひまたの機会にお誘いの方お待ちしております。」

「そうだったか、またぜひお誘いしましょう。」

一緒にいた堅物そうな軍人風の若い男の人も話しかけてくれた。

「二人の機転のおかげで助かった。俺の名はミュラー・ヴァンダールだ。たまたまエドガー殿と一緒に帰国している所でこんな事態になるとはな、不覚だった。以後は、もっと気を引き締めることにしよう。」

「僕の名前はツカサ・カタシロです。今回は仕方ないと思います。爆弾がセットされているまでは誰も考えつきませんから……対策としたら各国に飛行船に乗る時に検問を強化して頂くぐらいしかなさそうですね。」

「ふむ、こんなに若いのにそのような見識があるとは、まだまだ俺も精進が足りないということか。さっそく、あの馬鹿共々協議することにしよう。」

「して、ツカサ殿はどのような要件でエレボニア帝国を訪ねられているのかな？」

「はい、実は人を探しております……詳しくはお食事の時にお話します。」

「ふむ、幼いのにしつかりしたものだ。今回のお礼にぜひ力になってあげよう。」

「エドガーさん、ありがとうございます。」

さて、到着するまでに確かめたいことと取引をしないといけないことがある……アリスにいえ、おそらく、身喰らう蛇の『ウロボロス盟主』に対して。

「アリス、二人つきりで話したいことがあるのだけど一緒に来てもらえないかな？」

「ええ、いいわよ。」

「お嬢様、お一人では危険です。私が話を聞くことにしてはいかがですか？」

「いえ、私と二人ということですから何か意味があるんだわ、ミザリーには悪いのだけど、ちょっと待っていてもらえないかしら。」

「……はい、分かりました。」

「ミザリーはいい子ね。では、行きましょう。」

僕たちは二人が初めて話した甲板の方に出た。風はまだ少し強かったが、雲はもうほとんどなかった。僕はアリスを横目に見ながら、おそらく正しいであろうことを確認してみた。

「もし、できるのならでいいのだけど、僕たち2人以外には入って

来れないような結界はできないかな、アリス？」

「できるわ。ツカサが御所望なら、今から張るわよ。」

二人の周りを灰色の外から不可視の結界が張られる。

30分後、二人の結界が解かれる。

取引内容については『レン』ちゃんのウロボロスにてなるべく早く心が壊れる前に確保させることとパテルⅡマテルの実験の凍結の確約はなんとかうまくいったよ。ただ、その為に……うつつ、父さん母さんごめんなさい、僕は汚れてしまったのかもしれないです。誰か他の人に見られてしまったら恥ずかしくて死んじゃいそうです。あんなことや……いやっ、もう以上考えないことにしよう。

その一時間後、空が再び晴れ上がり、トワイライト号はなんとかエレボニア帝国首都に到着したのでした。

三章最終話 取引と事件解決（後書き）

30分の間のごことは書く必要あるのかな……みなさんのご想像にお任せした方が面白そうなのでむしろ書きたくはないです。やっぱり、考えるってことは人が人である所以だと作者は考えるのですよ。

幕間 小説と選択（前書き）

一応、ノルマを達成。これで仕事が忙しくなったら書けなくても言い訳が立ちますね。今回も選択肢を設けましたが、メッセージか感想を頂ければありがたいです。

みなさん、本当に読んでいただきましてありがとうございます。ここまで書けましたのもひとえに皆様が読んでくれたお蔭なのです。

幕間 小説と選択

絵本の表紙に描かれたのと同じ幕がまた降りて来た。舞台の脇からピエロの化粧をした少年が一冊の本を片手に持って中央に歩いてきて、正面を向いてペコリと一礼する。

「みなさま、三章の劇、『トワイライト誘拐未遂事件』はいかがでしたでしょうか？」

では、次の幕間にてまたお会いできることを楽しみにしております……えっ、早いですって。実は絶版だった官能小説の本が手に入りまして、早く読みたいのです。

本の題名が『三十分の秘事』で副題が『お願い事^{ひめごと}にきた少女とその親友である少女を愛している少女による数々のいけない代償^{いたずら}とは……』です。

作者は不明で、どうみても二時間以上の分量に見えるのですよ。さて、次の章ですが、

(1) リベール王国のとある孤児院設立に関するお話

(2) エレボニア帝国における権力闘争に関するお話

(3) なにか突然ピコーンって閃いて別の場所に行く。(作者注：みなさまのご意見で書けそうなものであるならば時代については百日戦役の後であればオツケーです。)

では、今度こそ、次の幕間にてまたお会いできることを楽しみにしております。

深々と一礼して少年は舞台の脇の暗闇に消えていった。

幕間 小説と選択（後書き）

上のような官能小説を見たい人っていないですよね、きっと……さて、みなさんを信じてみよう。

四章 1話 再会と帝都到着（前書き）

ちよつと時間が空きましたが再開しました。
申し訳ないことですが、これからは更新が遅くなるかもしれないで
す。

四章 1話 再会と帝都到着

ジヨセフ：「戦争は様々な形で人を変えてしまう。いや、変わらざるを得ないのだ。」

選択肢：（１）リベール王国のとある孤児院設立に関するお話

途中で嵐に遭ったエレボニア帝国首都の上空に飛行船トワイライト号が到着した。今は、夕日に首都は赤く染まっており、蜘蛛の巣のように鉄道が外側に向けて何本か伸びている様子が飛行船から見えた。到着間近になると遠くからゴトゴトツツという鉄道の動く音やゴウンゴウンツツと工場の動いている音がかすかに響いてきた。そうだ、ミュラーさんに、言わないといけないこともあるんだよね。エドガーさんと二人で話しているみたいだ。

「お二人でご歓談の所すみません。ミュラーさん、ちょっといいですか？」

「ああ、なんだ。ツカサ嬢。」

「僕のことは、ツカサでお願いします。獵兵3人を捕まえたことについてだけど、ミュラーさんの手柄にしてくれないかな？」

「……きちんと報告することが必要だと思うが……。」

「常識的に考えて、自分で言うのもなんだけど僕みたいな子供が事件を解決できたなんて信じられないと他の人は思うよ。」

「確かに……そうだな。俺がもし見てなかったら信じていなかっただろう。でも、いいのか？」

「アリスにも構わないって了解はもらったしね。それに僕も目を付けられちゃうから、できればお願いしたいよ。」

「確かにそれがクレバーな考え方だよ。まさか、ミュラー君がそのまま報告しようとするとは思わなかったがね。君もオリビエ氏の生き方を少しは取り入れた方がもっとクレバーに過ごせるはずだよ。」

「俺にはやつのような生き方はさすがにまねできん。こういう性分だからな。だがな、この件については分かった、ツカサの言うとおりにした方がよさそうだ。」

「ありがとう、ミュラーさん。」

首都に到着すると、アリス達は真っ先に出て行った。

「アリス、またね。」

「そう、……またね、元気にしておくのよ。ツカサ。」

「お嬢様、参りましょう。ではツカサ嬢、お世話になりました。」

途中あれだけ睨まれたミザリーさんに礼をされた……。ちよつとびつくりした。

「ミザリーさんもお元気で、また会えたらうれしいよ。」

「……ええ、では、失礼します。」

最後に初めてミザリーさんがほほ笑んでくれた、やっぱり、笑顔はいいなあ。さあ。僕たちもそろそろ行かないとね。そう思っているとエドガーさんが話しかけてくれた。

「ミユラー君の方は犯人引き渡しとかで忙しそうだから、ツカサ君、一緒に行かないかね？」

「はい、お願いします。」

「最近、何人が私の屋敷には護衛も含めて増やしたからね、もしかしたら話の合う人もいるかもしれないな。その馬車がうちの所有物だ。」

「エドガーさん、お帰りなさい。お連れのお嬢さんは……。」

「ロベルトっ。」

と言って、僕はロベルトに向かって飛び掛かるように抱きついた。そして、ロベルト、ロベルト、っつと泣きじゃくって繰り返し返していたって後から聞くとしていたらしい。

「ロベルト、なに女の子を泣かせてるのよ。」

「カナン。この姿じゃ、分からないよね。僕っ、ツカサだよ。」

二人ともハトに豆鉄砲を食らわせたかのようにびっくりしたようだ。

「……っ。」

「本当にツカサなのか？」

「うん、本当に本物だよ。」

そういうと、ロベルト、カナンが二人ともぎゅーと抱きしめてくれた。ちよっと思が苦しい。

「二人とも苦しいよ。」

「心配掛けて……、どこにいつていたんだ。」

「気が付いたらアルテリア法国にいたんだよ。」

「もう、一人で勝手に行っちゃだめよ。」

しばらく、そのままの状態でいたみたいだ。回りから見るとすぐくけったいな光景だったと思うよ。

「……こほんっ。せっかくの感動の再会を邪魔するようで悪いけど、そろそろ商会の方に移動してもらった方がクレバーじゃないかな？」

「すっ、すみませんっ。」

3人してエドガーさんに謝るのだった。

馬車の方にエドガーさんと一緒に乗って、御者として、ロベルトで護衛がカナンさんが勤めてくれているようだ。

僕も、御者側に乗りたかったな。そんな顔が見えたのだろう、エドガーさんがこう言ってくれた。

「パーティには明日まで時間があるからね、久しぶりの再会だ、十分に会つといいよ。ともかく商会までは我慢してもらえないかな。」

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません。」

「いやいや、喜ばしいことじゃないか、パーティを行うネタは多ければ多いほどいいことだよ。」

「えっと、他にもって何か喜ばしいことがあつたのですか？」

「実はね、私の弟が結婚することになったのだよ。本人はここにはいないのだけど、お祝をしようと考えていてね。最近はよくないことばかりだったから、それを振り払う意味でも必要なことなんだよ。それで、ロベルト君やカナン君にお祝を送ってもらおうかと頼もうと考えていたが、考え直した方がいいかな。」

「僕も一緒に行きたいです。」

「ああ、そのつもりだ。それと君さえよければ、私の養子にならないかね。帝国で行動するためには市民権がないとずっと帝国にはいることはできないし、ロベルト君は帝国の市民の一員だ、私も帝国の貴族の一員でね、養子にすることで帝国の市民権を得ることがで

きるのだよ。それにこんなに若くてクレバーな子はこれまで見たことがなくてね。」

「……、ちょっと考えさせてもらってもいいですか。」

「ならば、私の弟の所に行って帰るまでに結論を出すことはどうかな？今日はうちに泊っているといい。」

「はい、ありがとうございます。」

しばらくして、馬車はとある建物に着いた。その建物には羽の生えた馬の様なシンボルマークがあり、おそらく会社のマークではないかと思った。

「ようこそ、エレボニア帝国支部ストレガー商会に。」

と、シルクハットを取って儀式めいたように一礼した。

商会に着くと、辺りは結構騒がしい界隈の一角で、すぐ近くに鉄道の駅も見えた。もうすでに街灯はともっており家路に帰る人でにぎわっていた。

うーん、そういえば、パーティーのマナーとか知らない、不味いよね。身内だけの誕生会パーティーを予想してたけどアリスを誘ったことを考えるとそんなわけではないよね。せめてどれぐらいの規模かと、出席される人で偉い人だけでも後で聞いておこう。まずはマナーについて何とかしないとエドガーさんに恥をかかせちゃうよ。護衛として入るのは、やっぱり無理だね。

「商会の中でパーティーマナーをよく知っている人は誰かいませんか？」

「ボローニヤおばさんがいるね、あそこで怒鳴っている人だよ。」

「うっ、あの人が。ありがとうございます。パーティーマナーを教えてくださいょうように頼んでみます。」

「ああ、そうしてもらおうといい。私から頼んでおこう。」

エドガーさんに頼りっぱなしだ。エドガーさんが話した後で紹介があり、僕はボローニヤさんに近づいた。相変わらず忙しそうに動いている。

「あのお忙しい所、すみません。今度のパーティーに出席させてもらうのですが、パーティーマナーを教えてくださいませんか？」

「ふーん、あんただね。やるからにはきっちりするから覚悟おし。」

「はっ、はい。」

「はいは、一回だけのはいです。もう一度。」

「はい。」

今夜はもう眠れないかも。向こうの方でエドガーさんがニヤニヤしていた、多分エドガーさんもこの人に仕込まれた口だろう。

「はい、よそ見はしない。きちんと姿勢を正す。まずは……。」

こうしてパーティーが始まるまでみっちり正に一睡も出来ずに仕込まれた。後で分かったことだけどここまで、このパーティーにはこんなにもナーは必要ではなかったのにな。

四章 2話 養子とパーティ（前書き）

うくん、都市の名前は憶えていないので、適当になるかもです、帝
国とリベール王国国境付近の大きな都市の名前がヴァンダール中将
が言っていた気がするんだけど、思い出せない。困ったものです。

四章 2話 養子とパーティー

ボローニヤ先生は僕に教えながらと同時にテキパキとパーティー会場のセッティングや人の配置を決めていくよ。ようやくこの地獄から解放される。

「まだまだですが、少しは見られるようにはなりました。」

「はい、」指導ありがとうございます。」

「パーティーまでこれを飲んで少し休んでおきなさい。」

と柑橘系の甘い飲み物を差し出してくれた。ゆっくりと椅子に座り飲むと疲れが本当に抜けていくようだよ。パーティーが始まり、音楽が次々に流れ出す。あつ、この曲は『星の在り処』^{あつか}だ、僕も好きな曲だよ。しばらくして音楽が一段落した所で、主催のエドガーさんの話があった。あつ、僕を呼んでるみたいだしね、行かないとね。

「……………この子が私の娘のツカサです、皆様もどうかお見知りおきをお願いいたします。」

「……………つ。ご紹介にお預かりましたツカサと申します。今宵は皆様と会えましたことを心からのお喜びとさせていただきます。若輩者でありますので、どうか皆様のご指導の程よろしくお願いいたします。」

ニコリと微笑み、一礼をする。ちよつと待ってよ。養子の件はまだ

考えるって昨日言ったばかりだぞ。
はめられたっ、既成事実を作る気だ。エドガーさんはニヤリと僕の方だけ笑い、

「これからも娘ともども仲良くお願いします。以上を持ちまして、ご挨拶とさせて頂きます。皆様もどうかおかつろぎ、ご歓談なさいませ。」

と、締めくくった。パーティーが終わったらエドガーをとつちめよう。今夜の主賓が音楽を演奏していた中から現れた。えっ、変装はしてるけど、あの人はオリビエさんだよ。皆さんに色々ご挨拶をして、わわっ、僕の方にも来たよ。白い薔薇を僕の胸にさして手を取ってきたよ。

「小さなレディ、はじめまして。」

「はじめまして、オリヴァル……いえ、オリビエさん。」

「ほう、一度も名乗っていないのに知っているとは、なかなか事情通のようだね。僕もエドガー氏とは懇意にしているね、相思相愛の仲だよ。ミユラーから聞いたが、僕個人としても一度二人きりでお話したいものだよ。」

「残念ながら、僕にはオリビエさん程の話を面白くすることは出来ませんよ。それでもよろしければ構いませんよ。」

「ふふふ、是非とも飛行船での大活劇を聞かせてもらつたのを楽しみにしているよ。そうだ、お礼に一曲君の為に演奏してあげるよ。何がいいかい？」

「『星の在り処』^{あじか}でお願いします。」

「かしこまりました、小さなレディ。仰せのままに。」

と一礼して、演奏の中に戻って曲にアレンジを利かせて演奏してくれた。思わず拍手をしてしまう位、上手だったよ。僕がそうこうしてる内にパーティーはお開きになった。適当に挨拶して愛想笑いするような感じで良かったのかな？

次の日、僕はパーティーの練習かパーティーそのものの疲れのせいかベツトに横になると翌日のお昼前までぐっすりと眠ってしまった。

「ふあ、うーん、よく寝たよ。」

うーん、と背伸びをしてベツトから起きた。あっ、昨日洋服のまま寝ちゃっていたからしわになってる……うわっ、あとでボローニヤ先生から大目玉だ。さて、動きやすい格好に着替えよう。着替えにあまり違和感が無くなってきたような、いけないいけない僕は男なんだ、ちゃんと意識を持たないと元の身体に戻った時に大変なことになっちゃうよ。

「まずは、昨日のパーティーではめられたことをエドガーさんに文句いわなきゃ。」

エドガーさんの執務室に着くと、コンコンつとドアをノックした。

「誰かな？」

「司です。」

「どうぞ、はいりたまえ。」

ドアを開けると、キッチンと片付いた部屋でエドガーさんはペンを書類に走らせて、僕が入っていくとペン音が止まった。

「昨日の『養子』の件で、話に来ました。どうして、あんなことをしたのですか？」

「君が迷ったということは十分に考慮の余地があるということ、それに商売では先手を取らなければすぐに別の人に主導権いや、母屋すらも取られてしまうのだ。だから、この機会に早くお披露目すること君が帝国内で動けるようになったのだよ。書類もほらこの通り。」

「でっ、でも、僕は考えさせてくださいと言ったはずですが、それを破ってまでなんでそんなことをしたのですか？」

「君が本当に欲しくなったのだよ。私達ではまだこの帝国で力はまだまだ弱い、それを上がっていくためには、優秀な人材が必要、いや、不可欠なのだよ。君は人を引き付ける力もあり、行動力もある、ただの駒で終わらない可能性が高い。そのような人材が私達には喉から手が出る程必要っ……。」

僕は、彼に思わず平手打ちをしてしまった。

「僕が帝国で動けるようになる手をここまで素早く打ってくれたこ

とについては感謝しております。でも、こんなことをしていると信用が無くなりますよ。商売には信用が一番必要なのではないのですか？」

「本当に必要なものには商売抜きで手に入れるのがクレバーだよ。信用は後ほどでも回復できるものでね。」

「……っ。そんなことをやっていると女性に嫌われますよ。」

「それは困るな、ならば、ご機嫌を取ることによろ。明日にでもロベルト君達と一緒に出立できるように準備が整っているよ。リベル王国のルーアンの近くの村で僕の弟、『ジョセフ』の結婚式がある。そのお祝金と弟の手伝いをする為に少しの間だが旅行をプレゼントしよう。」

「プレゼントについては分かりました。でも、なぜ、僕なのですか？」

「クレバーだったからだ。オリビエ氏、いや私もかな。君に恋をしてしまったという答えではいけないかね。」

エドガーさんが恥ずかしくしている姿をちよつと見ただけでもちよつと溜飲が下がった。まったく敵わないな……大変な人達に惚れこまれてしまったようだ。

「ふふふ、分かりました。でも、エドガーさんってロリコンなんですね、僕みたいな子に恋をするなんて。では、僕も明日の出立の準備がありますので、それでは。」

エドガー：「ちよっ、ちがっ……。」

そういうと、答えを聞く前に部屋の外に出て行った。後ろで何か言ってるようだけど、きーこーえーなーいっ。ロベルト達と出立の話を詰めないかね。

四章3話 出発と王国入国（前書き）

人物紹介を書いた方がいいのかな、どうなんでしょう、五章に入る前に整理して書いてみようかな。

イースのアドルさんは冒険毎に女の人を作っていくという感じですが、

司も章ごとではないけど、何人もお父さんを作っているような……。

四章 3話 出発と王国入国

次の日は雲一つない快晴だった。早朝から鉄道の音がガタンゴトンと聞えて来た。

帝都の朝は東の地平線から真つ赤な朝日が朝靄の中から上がっていき、様子が窓から鮮やかに見えた。昨日の計画通りに帝都商業地区中央駅から鉄道に乗ってリベル王国の国境付近のパルム市まで移動した後にララちゃんには帝都でお留守番してもらって三人で歩いて国境迄向かい、国境を越える為の書類をハーケン門の警備係に渡す算段だ。ブレイサー（遊撃士）のカナンの国外派遣と言うのが名目で、僕とロベルトはその同行人だね。帰りには、ララちゃんにリベル王国土産を買っていかないといけないけどね。

さて、いよいよ出発だ。その時、ボローニヤ先生が何か本を僕に差し出してきた。

「ツカサ、あなたにはもつと学ぶことが必要よ。この本をきちんと読んで実践すること、いいですね。」

「はい、ありがとうございます、先生。」

帝国貴族マナー中級編をもらった。多分、僕の為にボローニヤさんが書いてくれたのだろう。食糧、書類、お金、夢等色々な物をかばんに詰めて僕たちは出発した。エドガーさんは出発間際に見送りに来てくれた。

「可愛い子には旅をさせよという言葉の通りだな。くれぐれも身体には気をつけることだ。クレバーな土産話を期待している。」

「エドガーさんも色々と気を付けてください。無理はしないようにね。」

「ツカサ、そろそろ出ないと列車に乗り遅れちゃうわよ。」

「おにちゃん、おねちゃん、いつてらっしゅい、ララはちゃんという子で待ってるからね。」

「うん、みんな行つてきます。」

手をちよつと振ってから、僕はカナンの所にタッタッタと走って行った。

帝都商業地区中央駅は売店や食堂がかなり充実しており、まさに巨大ターミナル駅でたくさん荷物を乗せた貨物列車も行き駆っている。駅の切符売り場には先にロベルトが並んで切符を3人分買うようにしており、もし僕が今並んだら数時間程度掛かるぐらいには窓口の数だけ列ができていた。しかもまだ鉄道については敷設していない部分かなりあり、これからまだ成長することができるみたいだった。さて、僕達も朝のお弁当を調達しないといけないね。

「朝ごはんとして何を選ぶ、カナン？」

「列車はかなり揺れるから軽いものの方がいいわよ。むしろ飲み物の方を多めに取った方がいいわね。」

「なら、サンドウィッチと大きめのお茶を人数分買うようにしよう。ロベルトは朝からずつと並んでるし、ちよつと多めに選んであげち

やおつ。」

「ええ、そうした方がいいわね。あとはそうね、最近話題になっている、チョコレートについても買ってもいいわね。」

「えっ、チョコレートなんてあるの？」

「ええ、リベル王国の方からわざわざかだけど輸入してるみたいだから、向こうに行けばもっと安く食べれるとは思っけど、かなりパルム市までは時間がかかるからちょっと味見程度に買っちゃおうか。」

「僕の答えはもちろんYESしかないよ。」

すぐに買い物をして終わった所にちょうどロベルトが3人分の切符を買ってやってきた。

「長い間お疲れ様、ロベルト。はい、これっ。」

「これは、チョコレートか、お金は大丈夫か？」

「ちょこつとだから、大丈夫っ。それにカナン折半にしてるしね。じゃあ、早く列車に乗ろうよ。」

3人でホームの方に出ると百日戦役が終わったばかりでリベル王国方面から帰ってくる人と迎えに来る人で人が溢れ返っていた。中には片腕を失った人、眼帯をした人、様々な怪我をした人が迎えに来た人と抱き合っ泣いている姿が多く見ることができた。それを横目に僕たちはパルム市行きの列車に乗るのだった。

「えつと、『2等乗車券 5号車6 - 1〜3』だね、僕が窓際の1もらいつと。」

「俺は構わないが、カナンもいいのかい？」

「この前に乗った時に窓際だったから、今回はツカサに譲っていいわよ。」

「二人ともありがとう。」

列車の椅子は向かい合いの席で座席はかなり堅い感じだ。座布団が何か柔らかいものを下に置いた方が揺れた時にはいいかもしれないね。列車は導力エンジンで動いており、建造されて1年ほどのかなりの新しい車両だった。鉄の匂いとなぜか涙と血の匂いがするような気がした。

気分を変えようとカナンの方を見ると、ブレイサー（遊撃士）の紋章が正遊撃士の紋章に変わっているのを初めて気がついた。

「あっ、ブレイサー（正遊撃士）に昇格おめでとう、カナン。今、初めて気がついたよ、国外派遣って確かブレイサー（正遊撃士）じゃないと難しいんだよね。そっか、それで僕達も便乗できるってわけだね。」

「便乗って、ツカサ、あなたのおかげで私は昇格できたようなものよ。デミアの村の魔獣を討伐するクエストがクリアできたおかげで昇格できたのだからね。」

「えつと、そういえば僕が行方不明になってから……どうして帝都

にいたの？」

「それはツカサ、あなたを探すためよ。国内外にいるかどうかは分からないから、海外にも支部のある情報が集まるストレガー商会にロベルトは勤めることにしたの、それで私の方はブレイサー（正遊撃士）になつて国外に一緒に行くことでなんとかツカサの手掛かりを見つけようとな。」

「……………僕のせいで、そんなことになつちやつたんだね。」

「いや、それは違うぞ。ツカサのおかげで俺達、いやデミア村も救われたからな。それにいずれ帝都には行こうとは考えていたものでな。その時期が早まつただけだ。」

「……………。」

「そこまで気にすることは無いってことだね。こうして無事に戻つて来てくれたんだから。」

と行って、カナンは僕を抱きしめてくれた。僕は涙がホロリと出てしまった。もう、話をそらさないと涙が止まらなくなつちやう。

「……………おなががすいたから早く買ったサンドウィッチを食べよう。ほら、ロベルトはおなががすいているんでしょ。」

「ふふふ。」

ロベルトとカナン二人とも笑っているや。

「もう、二人とも意地悪なんだから。」

「確かに、俺もおなかが減ったしな、もらおうか。」

「私ももらおうかしら。このまま意地悪していると無くなっちゃいそうだしね。」

「はい、プレゼントっ。」

二人にサンドウィッチを渡し、僕もサンドウィッチを食べた。やっぱり、少し涙の味がした。列車は順調に走っており、太陽もかなり高くなっていった。パルム市までは夕方に着くようになっていた。僕は田園風景を見ながら、陽気のせいかうつらうつらとした。目を覚ますと前の時と同じようにカナンの膝枕で寝ていたよ。目を開けたらカナンが話しかけてくれたよ。

「あのまま寝ていたら危なかったから、ちょっとは楽になった？」

「うん、ありがとう。カナンは寝なくてもいいの？」

「私は大丈夫よ、これでも旅は慣れてるからね、宿に着いたら休ませてもらっけどね。」

「そっか、あとどれぐらいでパルム市に着くのかな？」

「あと、一時間ぐらいだから……もうちょっとぐらいなら寝れるわ。」

「ふぁ、うん。後一時間ならもつ起きるよ。」

カナンは我慢できないらしく僕をぎゅっと抱きしめて来た。えっ、ちょっとちょっといきなりだよ。じっとしてたらそれから到着するまでずっと、カナンに抱きつかれたままだったよ。

「癒される〜。ごめんごめん、ついかわいすぎたから抱きしめちゃった。今度から事前にいうからごめんね。」

事前にいうって、アネラスさんみたいに抱きつくことは止めないんだ。とにかく、パルム市の宿を探して泊まらないといけないね。手早くカナンが見つけて来たんだけど、普段より値段が高い一部屋しか空いていなかったから3人で一緒に泊まることになった。宿ではベッドを二つくっつけて、僕が真ん中になって3人で川の字になって眠ったよ。

次の日は薄日が差す曇りの日で歩くには最適だった。僕が起きたころには二人とも出発準備はできており、僕が準備をするだけになっていた。

「うん、二人とも起きているんなら僕も起こしてくれてもよかったのに。」

「気持ち良さそうに寝ていたものでな、それにちょうど準備も終わった所だ。」

「もうちょっと寝てたら、おぶって連れて行こうと思っていたわ。」

「……………、早く起きるよ。」

すぐに出発準備を整えてハムエッグとパンと牛乳の朝食を食べて、僕たちは一路ハーケン門に目指した。パルム市郊外にはまだ軍の設営跡がたくさん残っており、まだ百日戦役が終わっていない霧囲気があった。パルム市からおよそ4時間程歩いて大きくそびえる金属性の建物であるハーケン門が見えて来た。ハーケン門のリベール王国見張りの兵が僕達に気づき、カナンが停まる旨と要件を伝えた。

「私達はブレイサー（正遊撃士）でリベール王国遊撃士協会の要請により貴国に入ることになっているわ。書類についてもこのように所持しているわ。」

「しばらくの間待て、上の方に連絡する。」

「ええ、お願いします。」

えっと、あれは玉ねぎ頭の人がきつそうな女性を携えて出て来た、リシャール大佐と確かカノーネさんだ。僕は思わず叫んでしまった。

「リシャール大佐っ。」

「はっはっはっ、よしてくれたまえ、私はまだ少佐の身に過ぎない。しかし、私の名前を知っているとはそちらのお嬢さんは物知りのようだね。」

「えっと、いきなり申し訳ありませんでした。」

「ともかく、ふむ、書類の方は問題ないようだ。だが、いまだ我が国内は不安定だ、何か問題が起こり次第、君達の身柄についても保護される可能性もあることは先に伝えておくよ。」

「そうならないように気をつけますわ。では、門を通らせていただきますね。」

すると、きつそうな眼をした女の人がいきなり脅してきた。

「保護ではなく、国外退去にならないように気をつけることね。」

「カノーネ君、よしたまえ、彼らには何も罪はない。余計な因縁をつけることはよくないといつも言っているだろう。」

「いえ、そのように言われても仕方がないことをしたから……。」

と、ロベルトが申し訳なさそうに言ったよ。

「ふむ、君達の名前を聞かせてもらえないだろうか。失礼、私は『アラン＝リシャル少佐』、こちらの女性は『カノーネ＝アマルテイア少尉』だ。」

「『カナン＝フリントツアー』です。」

「……『ツカサ＝K＝ストレガー』だよ。」

「『ロベルト＝アイヒマン』だ。」

「カナン君にツカサ嬢にロベルト君か……なかなかいい面構えをしている、何かあった時には私を訪ねたまえ、できるだけ力になってあげよう。我が国にも欲しい人材だな。」

「ありがとうございます、リシャール大佐。」

「大佐ではないというのに、では私の方も仕事があるのでまた無事会えることを楽しみにしている。」

「では、失礼しますわ。」

そして、僕たちはリベール王国に初めて足を踏み入れるのだった。

四章4話 戦痕とボース市（前書き）

強さといっても色々な強さがあるからなんとも言えないのだけど、目安として下の様な感じになっていると考えると考えてください。

Sランク アイソ

Aランク ” 剣聖 ” カシウス、ブライト ミザリー

Bランク（達人レベル） グレゴリー ” 千の腕 ” ルフィナ リシ

ヤール ” 狂槍 ” コラッド

Cランク ” 死の商人 ” ケルン ミュラー カノーネ カナン ロ

ベルト

Dランク 司

Eランク（兵士レベル） ゴルン三兄弟

Fランク（一般人レベル） ビンツ村長 リンダ

以上、これからの劇によって変動するとは思いますが、現地点（七耀歴1192年）ではこんな感じですね。

四章 4話 戦痕とボース市

ハーケン門を過ぎても百日戦役の傷痕は色濃く残っており、周りの木々に弾痕が残っていたり、地面もまるで血が染み込んでいるかの様に赤茶けた色をしているようだった。僕は怖くなり思わず二人の手を強く握っていた。

「想像した以上に酷いものだわ。なんでこんなことを人間達つてするのかしら。」

「他人の庭は青いと、ことわざにもある。人のものが欲しくなるんだろう。贅沢をしたいという欲望が際限なくあれば容易に争いになるんだ。」

「私は少し相手を思いやる心があればいいのと思うわ。」

「誰しもカナンのように考えるなら争いなんて起こらない。」

二人が言っていることは僕にも分かる。カナンみたいな人達だったらしいのだけど実際にはそんな人はほんの一握りだね。そして、戦争も歯車も運命もただ一度動き出したら止めることは難しいんだよね。あるトリガーをひいてしまえばあとはもう……。はたして僕はこの世界で何か出来ているのだろうか、いや、ロベルトやカナンは少なくとも救えたはずだ。僕が強く望めば何だって成し遂げることができる、そう思うことこそが重要なんだ。迷っちゃいけないんだ。

そうこう悩んでいる顔を上げると近くに街が見えてきた。標識を見

ると商業都市ポーヌだ。街に入ると街の中央部分の方から活気のない声が聞こえてきた。そこに近づいて行くとテントが何軒も集まって市場を開いており、食材や本や果ては使い古しの靴下まで品物が売られていた。

「さあ、よつてらっしゃい見てらっしゃい、この黄金のオタマジャクシ、育ったら金色の帰るになるよつ。一匹なんとたったの10ミラだつ。」

「こつちに見えるはかつてこの国の女王様も立ち寄ったといわれる牧場の牛の肉だ、なにせ、女王様も食べたことがあるっていう食材がそれが何と一枚1000ミラだ、めつたに食べれない王宮食材がたったの1000ミラぼつちだつ。さあ、買った買った。」

「その綺麗なお嬢ちゃん、この花の髪飾りとかどうだい？絶対に面白い得の500ミラだ、これでかわにゃきや損損つ。」

等々、色々と活気のある様子がマーケットを通ると賑やかな様子が僕の沈んでいた気持ち忘れられるようだった。最後のおじさんの台詞で数人の女の人が振りむいていたよ。やっぱり、うきつきするよな場所だね。僕達は食事を済ませていなかったで、マーケットの中にある食堂代わりのテントの『肉無しカレーライス』を一杯50ミラで食べたよ。近くに金髪の10歳前後の女の子もおじいさんと一緒にカレーライスを食べているみたいだ。

「こんにちは、この街に住んでいるかな？」

「こちらこそこんにちは。この街に住んでいたのだけど、別の所に避難をして戻って来た所です。」

「この市場は活気があっていいよね、こっちまで元気になっちゃうよ。」

「ええ、私もそう思います。お姉さん方は旅人さんですか？」

「うん、僕達はルーアンの方に向かってる途中だよ。この街が落ち着いたら、この中央の商業地区に大きな建物を建てるといいと思うね。色んなものを集めて売る為のターミナルにすればもつとこの街が活気があるようになれるんじゃないかな。」

「お姉さんは先見の明があるのですね、私もそう考えてます。そろそろ行かなければいけないので……、私の名前は『メイベル』と言います。今度は旅のお話を聞かせてもらえると嬉しいです。」

ペコリと礼をして向こうに見える大きな建物に入って行った。えっ、あの子が後のメイベル市長さん、若い時からしっかりした人だなあ。僕も負けずにしっかりしなくちゃね。さて、今夜はボースに宿を取って明日はクローネ峠を越えないといけなからね。

四章5話 峠道と野営晩飯（前書き）

20000PVと30000ユニーク突破しました。

たくさん読んでくれるおかげでなんとか忙しい中でも投稿する意欲が湧いてきます。本当に読んで頂きありがとうございます。

四章5話 峠道と野営晩飯

次の日は雲一つない快晴だった。これは峠道を登っていたら暑くなりそうだね。相変わらず僕が起きる前に二人とも起きていたよ。僕の方は7時ぐらいに起きているのに二人とも何時に起きているんだろう。今度機会があったら聞いてみよう。

「ツカサ、もう少し眠たいなら出発までは後30分ぐらいあるから寝ててもいいわ」

「寝起きは歩いたりすると怪我をするからね、そろそろ起きないといけないから、起きるよ」

「きつくなったらすぐにいうこと、いいな」

「うん、ありがとう、ロベルト」

僕達は霞の掛かったようなクローネ峠を見上げる入口に正午頃に着いた。それまでは、王国側は治安がいいせいかわ魔獣はほとんど見かけなく、そして、見かけてもどうやら向こうの方が避けているように逃げていく感じだった。

僕の記憶が正しければ、クローネ峠は一本道でルーアン地方まで続いていたはずだ。ただ、厄介なのが、倒したら爆発するような玉子状の魔獣がいたはず……ただ、僕らは接近戦をする人は誰もいないので魔獣が接近する前に倒してしまえば、大丈夫だね。

その後、峠道で何匹かは魔獣と出合いそうになったが、ロベルトが大抵先に見つけてくれたお陰で、僕達のナイフ攻撃や弓矢で射るこ

とで無事切り抜けられた。峠の関所については、百日戦役の影響で焼けただれたまま放置されておりまだ復旧の見通しは立っていないようだった。

峠の下り道についても登り道と同じく対処することで無事ルーアン地方に到着した。

峠の道を下りきると下の方に海岸線が見え、夕日の紅に染まった海原が綺麗に輝いており、沖の方に船が浮かんでいるのが見ることができた。

「うわ〜……………すごくきれいだよ」

「そうね……………こんなに本当にエメラルドを散りばめたみたいにキラキラしているわね」

「ああ……………これは初めて見たが、きれいだ」

まだ、村まではかなり遠かったはずだから、この辺りで野営を今日にした方がいいかな。ボースでも食材は少しは補充したからあと一週間ぐらいは3人で過ごしても大丈夫だ。

「そろそろ野営をした方がいいよね」

「ああ、さっき峠で拾った焚き火用の木もあるし、ここらで野営をしよう」

「ええ、そうね。まず、テントの準備からね」

「僕も何か手伝うよ」

「山道で疲れてるでしょ、少し休んでおくといいわ」

「二人も作業しているんだから、何かやるよ」

「では、料理を作ってくれないか、以前作ってくれた玉子雑炊は本当においしかったからな」

「うん、任せてよ。腕によりをかけて作ってあげるからね」

久しぶりの調理だ。さて、今日は玉子状の魔獣をいっぱい見かけたから玉子はあんまり食べたくない。ならば、小麦粉をこねて魔獣の肉とニンジンとシメジとジャガイモをぶつ切りに切って味噌でコトコトしばらく煮込んでいい匂いがして来たよ。

できたー、『ほうとう』の完成だ。ご飯も欲しかったけど、水場が見つからなかったから、水の節約の為に今回はパスしたよ。でも張りきって大きな鍋に作りすぎちゃったよ。これじゃあ、明日の朝の分以上あるね……、困ったなあ。あれっ、向こうの方でロベルト達と別の人が話している。あれは、ゴルン三兄弟とエレボニア帝国の軍人さんかな。

「ずいぶんといいにおいがするじゃねえか、俺達にも相伴にあずからせてくれよ」

「なにか食べれる物でも持ってきてるならいいが、なければ断る」

「しかたねえな、とっておきをだすしかねえか。この前帝国から追い出される直前に買ったコッペパンが残っていたはずだ。それでどうだ」

「ツカサ、カナンそれならいいか？」

ロベルトは振りむいて僕達に聞いてきた。

「ええ、仕方ないわね」

「僕は構わないよ」

ロベルトは仕方なさそうにゴルン三兄弟に許可を出した。そして、エレボニア軍服を着ている人に向き直りロベルトは再び聞いた。

「あんた達は何を出せる？」

「そうだな、今日釣った魚なら出せる」

僕達に聞いたので、僕はどんな魚か見せてもらおうように言ったら見事な黒鯛だった。もちろん僕は了解し、半分は刺身にして、半分は塩焼きすることにした。これは醤油をださなきゃいけないよね。僕達三人、ゴルン三兄弟、エレボニア軍人さん四人の合計十名の大所帯での晩御飯になった。

みんなの分のお皿はなかったが、マグカップの様なものや別の小鍋に入れたりしてなんとか全員分のお皿代わりにして食べ始めた。ちよつと多めに作ったのが福となったみたいだ。ゴルン三兄弟も軍人さん達もうめえうめえと食っている。よっぽどなものを食べていたんだろう。

「コッペパンもうめえが鍋に付けて味噌の汁をつけて食べるともっ

とうめえ
「

んっ
「

「口の中に一緒に入れたら同じだってバルンがいつているざんすよ」

「おめえな、ちつとは分けてくわねえと、このありがたみがわからねえだろうがっ」

んっ
「

「この食べ物はやらないざんすよ……………もうしかたがないざんすね、まったくこのいやしんぼさんが。これっきりっすよ」

と、ゴルン三兄弟の方を見ると本当に楽しそうに食べているようだ。一方、軍人さんの方を見てみよう。

「魚以外の美味しいものが食べた、我にとっては懐かしいなこの味
膾味は」

「隊長、オレッチはもう感激ですよ。魚以外もう食べれないものだ
と思っただけですから」

「なんだあ、小僧、世の中にはな、もつとうまいものが空に輝く星
の数程あるんだ。それを食べる前までは私は死ねないな」

「……………」

一人は分からないが他の人はまあまあ満足してくれているようだね。カナンとロベルトの方も見てみよう。

「……………負けた……………私が作るよりもうまい」

「カナン……………お前が作ったものは黒い物体しか見たことがないぞ」

「……………なら今度ロベルトにたくぷりと作ってあげるわ」

「……………勘弁してくれ。とにかくツカサの作るものに外れはないな」

「もっつ……………。でも、今度話に聞いた玉子雑炊も食べてみたいわ」

よかった、二人にも好評のようだ。ちょっと食事が一段落したらな
んでこんな所にいるのかをみんなに聞いてみよう。

まずはゴルン三兄弟の方だね。

「船ではお世話になりました。ありがとうございます。それで、な
んでリベール王国にいるのかな？」

「いや、船ではお互いさまってこつた。エレボニア帝国ではな、市
民権がないとずっと住めないんだとよ。仕方ないんでな、鉄道に乗
ってリベール王国に向かってここに至るってわけだ」

「んっ」

「まったく、ひどい目にあったださんすよ。おかげでコッペパンがま

だ食べ足りないでござんす」

「……………それは大変でしたね」

「そついや、おめえって揚げパンってコッペパンに入ると思っかい？」

「いつ、いえ、僕はよくわからないので……………失礼します。色々教えてくれてありがとう」

なぜかあの空間にいたら突っ込み疲れて大変なことになると感じ、とつさに逃げることにした。さて、次は軍人さんの方だね。

「軍人さんってエレボニア帝国の方だね、失礼しました、僕の名前は『ツカサ』です」

「ああ、そうだが……………我は『ベレント』だ」

「答えられる範囲でいいのだけど、なぜこのリベール王国にいるのかな？」

「……………後始末のためだ。これ以上は軍の機密にかかわるのでな」

「はい、答えにくいことをありがとうございます。」

「嬢ちゃん達は、エレボニア帝国のブレイサー（遊撃士）の仕事かな？」

「はい、この先の村に用があまりまして、そこに行く途中ですよ。」

「隊長、確か、ジョセフさんがその村で……」

「小僧……、いやなんでもないんだ。しかし若いのに帝国の正遊撃士とはずいぶんと優秀だな」

「僕ではなく、あそこにいるカナンが優秀だから」

「そうか、同じ帝国人として忠告しておくぞ。ルーアンにはあまり近づかない方がいい」

「はい、ご忠告ありがとうございます。」

「まったく、やつも……いや、なんでもない」

さっきのジョセフという人の名前を出した時もベレントさんの目がかなり鋭くなった。あんまり触れない方がいいよね。お礼を言っ
て僕はロベルトとカナンの所に戻った。

「ただいま、少し彼らから話をきいてきたよ。帝国の人はルーアンには近づかない方がいいって軍人さんが言っていたよ」

「情報を聞いてくるのはいいが、あんまり一人で行動しない方がいい」

「そうよ、何をされるか分からないわ、今度聞くときはロベルトが私のどちらか一緒にしなさい」

「えっ、うん。わかったよ」

あまり二人にも心配をかけているみたいだね。今度から気をつけよう。それからは各自少し離れた場所で野営をした。僕の方は山道で疲れていたらしく、食事の後片付けをしたらテントに入るとすぐに眠りについてしまった。

四章 6話 昔話と村落到着（前書き）

うーん、なかなか話がうまく書けないです……どうしましょう。

四章 6話 昔話と村落到着

次の日はどんよりとした曇りで海風が少し強く吹いており、波が白く泡立っているように遠目には見えた。ひよつとすると雨が近いかもしれないね。カナンは起きており、ロベルトは寝ているみたいだった。

「おはよう、ツカサ起きたのね」

「うん、朝何も食べてなかったら何か作るうか？」

「いえ、雨が降りそうだから、ロベルトを起こしてなるべく先に進みましょう。雨が降る前にもしかしたら着くかもしれないしね」

「じゃあ、僕がロベルトを起こすね」

「ええ、頼むわ、私の方はテントを片付けて出発準備を整えるからね」

「うん。……ロベルト、（ゆさゆさ）起きてよ、もうすぐ出発するよ」

「ツカサ………そうか、もうすぐ出発か………起きたぞ」

うわっ、ロベルトですごく寝起きがいいみたいだ。一発で起きたよ。

「えっと、他の人たちはどうしたの？」

「軍人さんは夜明け前から海辺の方に向かったわ。三兄弟の方は、気が付いたらいなくなっていたわ。おそらく先に進んだんじゃないかと思うけどね」

「そっか、なら僕達も早く出発しないといけないね、ロベルト大丈夫、まだちょっと疲れているみたいだけど」

「ああ、大丈夫だ。村に着いたら休むことにするからな」

ロベルトが大丈夫っていうなら村までは持つのだろう。すぐに出発準備が整い、ちよつと小走りにみんなマリノア村に向けて出発した。道中にはサメつばい魔獣がちらほらと見かけたが、陸地ではあまり速度が早くない為、逃げ切るか先制攻撃で倒すことができ、雨がポツポツ降りだした頃にはマノリア村の入り口が見えて来た。

程なくして村の中央にある『白の木蓮亭』に雨に降られながら僕達は駆け込んだ。と、その時、とつさに避け様としたけど、6歳ぐらいの小さな子供とぶつかってしまい、二人して尻餅をついてしまった。

「ごめんね、大丈夫かな？ 僕が前を見ていなかったから……」

「あ、いえ、大丈夫です。すみません、私の方こそそ見をしてしまつて……」

えっと、なんか聞いたことのある台詞だなあ……、僕がその子に近づいて手を差し出して起こしてあげると『クローディア姫殿下』……

…いやっ、『クローゼ』さんじゃないか。

なんで、こんな所に……ってそういえば『クローゼ』さんって『テレサ』さんに面識ってあったんだよね。って、結婚式ってまさか、『テレサ』さんと『エドガー』さんの弟の『ジョセフ』さんっ。

僕がぼっとしていると、バスタオルが頭からかけられた。

「ほら、さっさと拭かないと風邪をひくぞ」

「うっ、うん。ありがとう。さっきの子は……？」

「上の階にいる『ジョセフ』さんとその花嫁の『テレサ』さん呼びに行っただようだ」

「あっ、降りてきたみたいだよ」

ロベルトと話していると、エドガーさんを穏やかにして若くした感じな『ジョセフ』さんが手をしっかり握って同じく穏やかそうな女性『テレサ』さんが『クローゼ』さんが先行して階段を下りて来た。

「はるばる遠い所、お疲れ様だね。エドガー兄さんは相変わらず元気そうにクレバーとか言っていたかい？」

「はい、クレバーとか言っつて勝手に僕を養子にするぐらいにはクレバーでしたよ。あっ、僕の名前は『ツカサ』と言います。彼が『ロベルト』で、あちらの女の人が『カナン』だよ」

「へえ、兄さんが養子をねえ……これで僕の方は兄さんの魔の手から逃れられるみたいだ。君も大変な人に見込まれたものだよ。一応知

っているかもしれないけど、僕の名前は『ジョセフ』でこちらが僕の花嫁の『テレサ』だよ。そして、この子が『クローゼ』だよ」

みんなでペコリと一礼した。なんだか微笑ましいなあ。

「やっぱり、そうなんだね……。今まで本当にお疲れさまでした。そしてご結婚おめでとunggozaimasu」

「結婚式は明後日だし、長旅で疲れただろう。今日はゆっくりした方がいいよ。君の連れも疲れているみたいだしね」

「はい、ご迷惑をおかけします」

「ご迷惑をかけているのは僕の方だよ。エドガー兄さんにも多大な迷惑をかけているからね」

「今までの迷惑料と考えたらいいんじゃないでしょうか」

「そうに違いないね。クレバー迷惑料とでも言ってもらったところかな。夜にでも僕なりのエドガー兄さんいやクレバー対処法でも教えようか？」

「是非、お願いします。でもいいんですかお嫁さんを放っておいて僕と一緒になんて」

「放っておくわけじゃないじゃないか、テレサもクローゼも無理でないならロベルトさんやカナンさんも一緒に昔話として聞いてもらうんだよ」

「あははっ、そうなんです、それは楽しみです。あとで二人も誘ってみます」

「ああ、夜に待っているよ」

と言って、三人で階上が上がっていった。僕達もロベルトやカナンはちょっときつそうにしているから、部屋を取ってから二階に上がって休むことにしたよ。二人とも起きたら聞きに行くから、一人で行っておいでだってさ。

夕飯は酒場のマスターにもうすぐめでたい結婚式だからって腕をふるってもらって、ごちそうのご相伴を食べさせてもらった。ロベルトとカナンは疲れて眠ってしまったので後で二人が起きた時に食べれるようにロベルトにパエリアでカナンにサンドイッチを作ってもらった。

夜になっても二人はぐっすりと眠っているようだし、僕は二人を起こさないようにして夜部屋を抜け出してジョセフさんの部屋に向かった。まだ、外は雨が激しく降っており、時々遠くから雷がなっているのが聞えた。

コンコンと扉をノックして、返事を聞いてから僕は部屋にジョセフさんの泊っている部屋に入った。

「夜分遅くすみません。本当にさつきからわくわくしてましたよ」

「それはそれは、でもそんなにいいはなしではないんだけどね。では、エドガー兄さんと一緒に家出をした時のことを話そうか」

『あれは僕が12歳でエドガー兄さんが14歳の頃のことだったね。確か、兄さんが父さんの商売方針に反対して口論になり、家を飛び

出したんだ。兄さんも僕もだけど小さい頃に母さんを亡くしていてね、抑えてくれる人が誰もいなかったんだ。そう、その日も今日と同じように雨が降って雷も鳴っていたんだ。

僕も兄さんも飛び出したのはいいのだけど、行くあてもなかったからね。運よく雨をしのげそうな橋の下を見つけて雨宿りをしにかけで行ったよ。ただ、その場所には先約が居てね。僕と同じかちよつと幼い子だったよ。ちようどそうだね、ツカサさんか、クローゼさんぐらいの年頃だったね。ただ、最初は薄汚れていてね女の子だとは分からなくて男の子だと僕は勘違いをしていたよ。

僕達が濡れているからって自分の寝て過ごす毛布を出してくれてその時は僕はボロキレのように見えたから断ろうとしたのだけど、兄さんはね、喜んで身体を拭いたんだよ。僕には信じられなかったね、兄さんが母さんが亡くなってから初めて笑ったんだ。その子も一緒に笑ったんだよ。兄さんはもつと若いころから色んな貴族の世界や商売の世界に携わっていたから、おそらく人の本質みたいなものが見えるのだと思うんだ、だからそのボロキレは喜んで受け取って使ったのだと思うよ。

それからかな、僕達三人が一緒に生活を始めたのは、ゴミ捨て場の様な所から捨てたものを探してきて修理して売る生活をね。

でも、長くはその生活は続かなかった。なぜなら女の子は重い病気に掛かってしまった。兄さんはどうにかお金を稼いで医者に見せようとしたのだけど、お金が足りなくてね。最終的には父さんに家に戻るって約束でお金を持ってきたのだけど、その子は亡くなってしまったよ。だからかな、それから兄さんは大切なものに対してはお金を商売に関係なしにするようになったんだよ。

そついう僕も百日戦役で怪我をしなければ大切な『テレサ』を見つけることができなかったんだよね。そついうわけだから兄さんにはストリートに感情を表現すると照れてしまうのでね、何かしらで表現してあげれば降参してくれるよ』

「……………今度、エドガーさんに聞いてお慕参りしますね」

「ああ、そうしてもらおうと兄さんも喜ぶね」

「テレサさんと一緒に何をなさるのですか？ エドガーさんからお手伝いを頼まれているので……………もしかして『孤児院の建設』ですか？」

「ツカサさんは超能力者が何かかい？ 三人だけの秘密にしていたはずなんだけど。結婚式で村の人には言おうと考えていたんだよ。一応秘密で頼むよ」

三人ともすごく驚いている、あんまり将来のことを知っているのも考えものだね。

「なんで孤児院建設なのですか？」

「僕が百日戦役でやったことを考えるとね。何かこの国の子達に少しでもしてあげることはないかってね。それで孤児院建設をして戦役で亡くなった親代わりをしてあげればと考えたんだよ」

「そうですか、そういうことならぜひ僕達も手伝わせてくださいね」

「ああ、もちろん期待してるよ。ただ、もう今夜は遅い、寝なさい。子供は夢を見る時間だ」

「そうですね、ジョセフさん、テレサさん、クローゼさん、おやすみなさい」

「ツカサさん、おやすみなさい。また明日です」

さすがにクローゼさんも眠そうに目をこすっている。手を軽く振って僕はロベルト達の部屋に戻った。二人ともまだぐっすりと眠っていたので僕も一緒に横になって眠りに着いた。

四章7話 誘拐と資材調達（前書き）

人物紹介『アガット・クロスナー』：『後に「重剣じゅうけんのアガット」の異名を持つランクC（『SC』ではBに昇格）遊撃士。二つ名の示す通り巨大な重剣を武器としており、直接攻撃を中心としながらアーツは補助に使うという戦闘スタイル。ある出来事から12歳年下の『ティータ・ラッセル』に対しては頭が上がらなくなってしまい、「年の差カップル」と揶揄される様になった人物。その性で奥義はドラゴンダイブという名称をロリコンダイブとネット上で言われることも。

四章 7話 誘拐と資材調達

結婚式前日、昨日の嵐の様な天気が一転して雲一つない快晴になった。僕達はルーアンのブレイサー（遊撃士）ギルドに一時的にカナンの籍を移す為と、結婚式に必要な物資……結婚指輪や食材等の調達を頼まれた為にロベルト、カナン、僕の三人でルーアンに向かった。酒場のマスターにもルーアンの治安が悪いから注意する様に言われた事が気にかかった。

マノリア村を出発して街道沿いにどんどん歩いて行くと途中では何事もなくお昼前にはルーアンに到着したよ。街に入った瞬間からあまりよくない視線の様なものを感じる気がするよ。まずは三人でブレイサー（遊撃士）ギルドを訪ねてカナンが手続きをやっている間にロベルトは食材とかの買い出しに行くことになっている。僕は二人のどちらと一緒にいた方がいいのかな。

よし、カナンと一緒にしよう。ロベルトは打ち合わせ通り素早くギルドを出て行ったよ。手続きってどれぐらいかかるのかな、ちょっと暇になって依頼掲示板の付近に置いてあるソファアに座って足をブラブラさせていた。と、その時、僕の方に話しかけて来た僕より少し幼いの子がいた。

「その姉ちゃん、銀髪の兄ちゃんがちょっと呼んでるよ」

「えっと、なんでなの？」

「さあ……分らないけど多分、すぐ姉ちゃんに用があるってさ。いじょう、姉ちゃん」

と言ってグイグイ引っ張ってくる。うーん、これは……おそらく畏

だよ。でも、主犯が分かるなら攫われた振りをするのも一手かな。何か合図の様なものができればいいけど、どうしよう……そうだった……。

ロベルトやカナンには悪いけど今回は急だしね……ほんとに二人に心配かけてばかりで駄目だよ……。

少年に引つ張られながら通りを通って行き、長い橋を渡ってルーア
ン海岸埠頭の倉庫まで駆け足で連れて行かれた。

予想通り畏だね……僕は警戒しながら倉庫内に案内された。扉をあけると中は薄暗く中には一人は僕と同じぐらいの年の少年で二人は連れて来た男の子と同じぐらいの年だった。

すぐに明るさに目が慣れてくると、リーダーの子……赤い髪の少年が口を開いた。

「レイス、てめえ、本当にこいつ帝国人なのか？」

「銀髪の帝国人達と一緒にいたから多分そうだと思うけど……」

えっと、赤髪の子つてもしかするとロリコンダイブ……もといドラ
ゴンドライブの『アガット』さんかな。アガットさんが僕の近づいてきて言った。

「おまえは帝国の奴か？」

「えっと、帝国出身ではないけど一週間ぐらい前に帝国の国籍にさせられたのかなあ」

「なんか良くわけわからない奴だな……だが帝国の奴だっこ

とは確かだな」

アガツトさんは目が鋭くなっけいきなり僕の胸倉を掴んできた。

「てめーらが来やがったから俺の妹『ミーシャ』があんなことになっちまったんだっ。てめーらさえ、てめーらさえ来なければ、くそっ」

「……………」

ぐいぐいとアガツトさんが僕の胸倉を締め付けてくる。ちよつと苦しいけど…………じつとアガツトさんの目を見ている。

確か、アガツトさんはミーシャちゃんが百日戦役で亡くされたのは聞いていたけど…………その影響で不良グループ『レイヴン』に入っているみたいだった。

「くそっ、てめーも何か言いやがれ」

「…………こんなことをしてもミーシャちゃんは喜ばないよ」

「…………っ…………てめーに何が分かるってんだ。」

僕は横に突き飛ばされて、空の段ボールの山に突っ込まされた。さらに僕は胸倉を掴まれて立ち上がらせられた。ちよつと口元が切れたみたいだ。

「それともなんだ、俺かミーシャにでもなれるってんでもいうのか」

「……………」

「『自分の気持ちってというのはな、その本人でないと分からねえもんなんだ』……………知ったような口を聞くんじゃねえ」

「……………」

その時、倉庫の外がちよつと騒がしくなった。ちよつと気弱そうな少年が言った。

「やばいよ、アガットの兄貴。帝国の奴らが来やがった」

「ちつ、ロツコ、デイン、レイス、おめーらはずらかりやがれ、俺は言いたいことがあるんでな」

「でも、兄貴奴ら殺気立って居やがるよ」

「いいから、いけ。必ず俺もあとで行く」

「わかった」

三人の少年は倉庫の中から去って行った。その時アガットさんが片手で持てる木片を拾ったのを横目に見た。すぐに戦闘態勢を整えたロベルトとカナンは入口から現れた。

「大丈夫か、ツカサッ！」

「ツカサ、大丈夫つ、すぐに助け出してあげるわ」

「ちょっとでも動いてみる、こいつの命の保証はしないぞ」

アガットは片手で僕の後ろ手を持っていて、もう片手で僕の背中に何か……おそらく先ほど拾っていた木片を突き付けていた。後ろ手の締め付けはそんなに厳しくなくいつでも今の僕なら抜け出せることはできるけど、今抜け出したらアガットさんの命が危ない……だから僕はアガットの動くのに合わせて彼を庇う様に一緒に動いた。じりじりと一緒に倉庫の出口まで動いた。アガットは扉を閉めて鍵をかけた。

「てめーらはしばらくこの中に居な、こいつはちょっと離れた場所
で放してやるぜ」

「待ちなさい、必ずとっ捕まえてやるわ」

「やなことつた、じゃあな」

アガットさんは倉庫から少し離れたところまで歩いていき、僕を放してくれた。

「……なぜ、俺を庇った。いつでも抜け出せたんだろう」

「やっぱり、分かってたんだ。それはアガットさん、あなたをこれ以上傷つけたくなかったから……」

「くそつ、帝国の女に庇われるなんて俺も落ちたもんだぜ」

「……………」

「まったく、おめえは変な女だぜ、調子が狂っちまう。ほら、さっきの倉庫の鍵だぜ、さっさと持って行きな」

「アガットさん、ありがとう。えへへ、やっぱり優しいんだね」

「俺は、優しくなんかねえ。でもな……ツカサっていったっけ。おめえはわかってねえな……人の死つてもんがな……ちくしょう、さっさといけってんだ」

僕はアガットさんから鍵を押し付けられて、そして彼はそのまま水路を通って建物の陰に消えていった。僕は急いで倉庫に戻って鍵を開けた。ロベルトとカナンは警戒しつつ出てきて僕を見ると安心して武装を解いた。

「二人ともごめんなさいっ、僕が彼に付いていかなければ二人には心配をかけずに済んだのに」

「とにかく、ツカサが無事でよかったわ、今度出会ったら赤髪の奴には腕一本ぐらい覚悟してもらおうかしら」

「俺ももらうから腕二本だな」

「二人とも止めてよ、アガットさんは悪い人じゃないよ。百日戦役で妹さんを失ったんだからそれでこんなことをしちやっただよ」

「それでも、俺のツカサに怪我をさせたんだから許せねえ、今度出

会ったら顔に切り傷ぐらい覚悟してもらおうぞ」

「腹の虫がおさまらないわ、私も付けるから顔に傷二つだわ」

「とっ、とにかく用事を済ませて早くマノリア村に戻るよ」

「……………そうね」

ようやく、二人はちよつと落ち着いてそして、僕の両側について腕をまるで組むようにして道具屋と食材屋とブレイサー（遊撃士）ギルドに寄ってからマノリア村に戻った。

ところでなんで、二人が僕の居場所が分かったかって……………それはとっさに僕の指を隠しているナイフで切って血痕を落として行って印をつけたんだ。ロベルトとカナンは僕の血痕をたどって倉庫まで来れたってことだね。でもその性で、僕が大怪我してるかもしれないって、二人とも殺気だってしまったんだけどね。

四章7話 誘拐と資材調達（後書き）

うわっ、PSPの空の軌跡の続編の『零の軌跡』が発売決定されたけど……PC版には販売発表がない。

プレイするにはPSPを買っしかないのか……><
ショックで書くのが遅くなってしまいました。

四章 8話 結婚と建設誓約（前書き）

人物紹介：『セーラ』：10年後の七耀歴1202年にはロレントの居酒屋アーベント隣、民家2Fに住んでいる少年『パット』の母親 ちなみに父親は『レトラ』

うーん、必要ないモブキャラのキャラ紹介しちゃいました。要らないよね……ふつうは><

四章 8話 結婚と建設誓約

マノリア村に戻ると海岸線の向こうに真っ赤な太陽が沈みかけており、いよいよ明日ジョセフさんとテレサさんの結婚式がある。ルーアンでは誘拐事件みたいなものがあつたから二人の結婚指輪とかは初めて見た。クラシックな銀の二人の名前が刻まれた指輪だった。夕日が指輪で反射してまるで小さな日食のように綺麗だった。

「触っちゃだめだわ、でも、素敵だわ」

「うん、素敵だね」

カナンと僕は指輪に魅入られたかのようにうつとりした。ロベルトがしばらくたって咳払いをするまで二人とも続けたのだった。村の中に入ると遅くなってしまうので、ジョセフさんとテレサさん、そして、クローゼさんの三人が宿の一階で起きて待っていてくれた。

「遅かったですね、何かありましたか？」

「えっと……僕がちよつと攫われちゃったかな……」

「でも、無事でよかった。僕もルーアンの治安は悪いので心配だったのですよ」

三人ともびっくりしていたが、僕達が無事戻ってきたのでほつと胸をなでおろしているようだった。そして、ルーアンで起きた誘拐事

件の事情を根掘り葉掘り聞かれたので僕は素直に全部話した。

「しかし、ツカサなぜ付いて行ったのだね？」

「うん、軽率だったとは思っけど、こんなことをする犯人を見つけようかと思って……」

「そうだね、軽率だね。ツカサ、君を心配してくれる人がこんなにもいるのに、もし、一人ならともかく三人で対処できない状況だったら君はロベルト君、カナン君まで危険に巻き込むことをしでかすことになるんだよ」

「あつ……その通りです。……ごめんなさい」

「ツカサ、君は勇気が有って、時には無茶をすること、いや無茶なことをしないといけないかもしれない。だがね、それをする必要があるときとそうでない時の見極めをできると僕は考えているんだがね……それが兄さんのいうクレバーってものだと思っよ」

「はい」

「そして、ロベルト君、カナン君にも言わないといけないがね……二人ともね、きついことを言うけどね。ツカサを甘やかすすぎだよ」

二人ともうつむいている。さらにジョセフさんは穏やかに諭すように言ってくる。

「事情があるにせよ、君達三人が深い絆で結ばれているのは周りから見て分かるよ。でもね、手を掛け過ぎるとそれ自体をかえって悪

くしてしまうもんだよ。僕達はハーブを育てていてね、それがよくわかるんだ」

「でも……………」

「まあ、君達はまだ若い……そこまでやるのは難しいとは思う。だから、そんな時には僕みたいなもう少し年を取った大人を頼ることも必要だよ。でも、まだおじさんとか呼ばれたくはないけどね」

と、笑って締めくくってくれた。うん、さすがクレバーな人の弟さんだよ。明日は晴れの舞台なのにこんなに心配をかけてしまったんだなあということが改めて分かったよ。

「あなたもお疲れでしょう。そろそろ休んだ方がいいわ」

「テレサ、それをいうならお前もクローゼも疲れているだろう。明日は早いから寝た方がいいな」

「色々ありがとうございました」

僕達三人は礼を言っつて階段を上がつて部屋に入つて寝ちゃった。その時、懐かしい顔が宿の別の部屋から覗いているとは知らずに。

結婚式当日は前日と同じ雲一つない快晴でまさに結婚式の門出にふさわしい日だよ。風車小屋の方が結婚式の会場になっており、サテイの花屋さんも張りきつてお花を飾り付けているよ。カナンやロベルトも後ろの方で参列するようになっていて僕もそっちがいいつて言ったら『僕はエドガーさんの代理』として式に出ることにな

ついているから前の方に座るようにだつてさ……なんだか僕の方が緊張するよ。ジョセフさんを見るとタキシード姿がしっかりと決まっ
ていて男前だったよ。そして、白い系ドレス姿のテレサさんを見ると
と髪にはハーブ系の花をつけており、すごく素敵だよ。二人に見と
れていると、式の方がいつの間にかクライマックスまで進んでいた。
あれれっ、あの女性の神父さん、いや神母さんと言った方がいいの
かな……あれはっ、『ルフィナ』さんがやっているんじゃないか！

「それでは、指輪の交換と誓いのキスを……」

「テレサ……」

「ジョセフ……」

「創造の女神エイドスの御名において今ここに二人が夫婦とな
ったことを証する」

そう、神母さんがいうと辺りから一斉に拍手の音になったよ。ほと
んどマノリア村の人が全員来ているんじゃないかな。

「……なんか感動してきちゃったよ」

みんな一旦は風車小屋から出てちよつとして新郎新婦がハーブのブ
ーケを持って出て来た。

「では、これから花嫁がブーケを投げます。未婚の女性は前の
方に出て来てください。うん、これだけは私も参加をしたかった

わね」

「……では、いきますね」

「テレサさんは右利きだから、左寄りに来るはず……だからベストポイントはここねっ」

カナンもすごく狙っているし……なんか周りの女の人が全員殺気だったように一瞬感じたよ。ふわっとブーケが上上がり風に流されて……後で分かったことだけどロレントから旅行に来ていた『セラ』さんという方が手にしたみたいだ。

「わっ、私が頂いていいのかしら」

「おめでとう、あなたにはいいご縁があると思います」

「どうしましょう……私……まだ心の準備が……」

カナンは少し残念そうにした後、拍手をし始めた。

「ブーケってお似合いの所になぜか行くのよね」

「確かにそうだね……お幸せに」

「さて、これで式はすべて終わりよ」

改めて、二人の幸せを願って盛大な拍手がみんなから送られた。

「今、王国は大変な状況ですけど、いかなる苦難を吹き飛ばすよう

幸せな家庭を築いてくださいね。それが出席してくれた人達へのなによりの恩返しだわ」

「ええ」

改めて、新郎新婦がキスをして式の方は大盛り上がりの中、幕を閉じたのだった。

式の後、新郎新婦、神母ことルフィナさん、クローゼ、そして僕達三人で白の木蓮亭の酒場で二次会をすることになった。

「まさか、ルフィナさんが来るとは思わなかったよ」

「ツカサ、さんづけはやめてよね、今度言ったらちゃんづけするわよ。私だって巡回神父の仕事があったからここにたまたま寄ったわけ、偶然だわ」

「ところで、グレゴリー父さんは元気してるのかな？」

「ええ、元気が有り余っているようにしているわ。もうすぐ結果が出るけど、出たら手紙を送るわ。あとで居そうな場所でも教えておいてね」

「しばらくはここにいるとは思っけど……もし、遅いようならエレボニア帝国支部ストレガー商会までをお願いするね」

「ええ、わかったわ」

「まさかこんな可愛い神母さんがツカサ君の知り合いだったとはな、

ずいぶん顔が広いんだね」

「ルフィナさ……とはついこの間会ったばかりなんだけどね」

「そうか……今回、君達にあつまってもらったのは、ある誓約をしようと考えていてね。その証人になって欲しいんだ」

「ジョセフさんとテレサさんが二人見合っつてうなずいてから一緒に誓約の言葉を言った。」

「僕達夫婦ジョセフとテレサがこの村とルーアンの間のハーブ畑の土地に孤児院を作ることを誓約します」

「ええ、誓約の言葉は確かに創造の女神エイドスに届いたわ」

そういつてルフィナは、いやみんなが微笑んだ。

四章9話 選択とおむかえ（前書き）

人物紹介：『ユリア・シユバルツ』：10年後の七耀歴1202年頃には王室親衛隊の女中隊長（後に大隊長）で、レイピアを用いた剣技を得意とする。クローディア姫の護衛兼養育係も兼務しており、クローゼがレイピアを使うのもそのため。生真面目な性格で、姫の護衛兼養育係としての職に誇りと愛着を持っている。士官学校時代にはカシウスから剣を学んでおり、実力は軍の若手で随一とされる。

今週のジャンプのBLEACHの崩玉の能力とツカサの能力は何か似てる気がする……気のせいだということにしよう。

四章 9話 選択とおむかえ

その日の晩僕にロベルトがずっと預かっていてまだ『カシウス』ブライト』さんに渡していなかった黒いゴスペルを僕に戻してくれた。次の日からすごいペースで孤児院の建設は始まった。資金の方はエドガーさんから預かった結婚祝いのお金が100万ミラもあり、ハーブ園の奥の方に建物を建設することになった。

ロベルトとジョセフさんは資材の運搬の手伝い、カナンは各担当者への連絡役兼資材調達係、テレサさんと僕はみんなの元気が出るような食事を作る係になった。

クローゼさんはちよつと用があるけど孤児院が完成した時には必ず来ますと言つて、私服で鋭い目つきを帽子で隠している女性だけど、シロハヤブサで僕にはばればれの『ユリア』さんが迎えに来ていた。ルフィナさんは結婚式の次の日にはもう巡回神父の仕事と言つて別の地方に旅立つて行った……もうちよつとゆっくりしていけばいいのに……。

そして、マノリア村、いやジョセフさんとテレサさんを支援するみんなの力が合わさつてなんと半月で『マーシア孤児院』はハーブの香りに包まれながら完成することになった。

その落成式の日、サティの花屋さんからルーアンのブレイサー（遊撃士）ギルドから連絡があり、6歳ぐらいの子供をルーアンのギルド迎えに来るようにと依頼が僕達にあつたつて男の人が知らせてくれたよつて言われた。おそらく、孤児院が完成したからクローゼさんを迎えに来るようにと僕達に依頼されたんだろう。そして、ジョセフさんにこれを渡してくれつて半分折にされた手紙も押しつけるように渡されたつて言われた。僕達が手紙を持って行こうかと言つたら渡してくれた。受け取る際に受け取り損ねて落としてしまった

拍子に、『馬車にホールケーキのプレゼントがある』といった殴り書きの手紙の内容が見えてしまった。うゝん、勝手に人の手紙を見ちゃったらまずいよね。

ジヨセフさんとテレサさんは昨日からずっとマーシア孤児院にこもりつきりで落成式の準備をして居る為、サティの花屋さんから僕達に手渡したそうだ。あとで、馬車で花を孤児院に届けるように依頼されているってさ。やっぱり、落成式に花一面というのもなかなかいいものだよね。

さて、どうしようかな。

(1) ルーアンのブレイサー(遊撃士)ギルドにクローゼを迎えに行く

(2) なにか突然ピコーンって閃いて行動する。(作者注：みなさまのご意見をお待ちしております。)

四章9話 選択とおむかえ（後書き）

できれば、みなさまの感想なり、メッセージがとても欲しいです。選択肢を設けましたので、もしよかったら書いてもらえる嬉しいです。

次は、書き終わったら投稿します。

四章最終話 離別と死の贈物 (前書き)

今回は残酷なシーンが含まれている可能性が高いので、嫌いな方は『戻る』を押して引き返した方がいいと思います。

四章最終話 離別と死の贈物

選択肢：（１）ルーアンのブレイサー（遊撃士）ギルドにクローゼを迎えに行く

僕達は何か違和感を感じながらマーシア孤児院に寄って忙しそうに準備をしているジョセフさんに手紙を渡した後、ルーアンへクローゼを迎えに行った。

ルーアンに向かう途中で遠くから剣戟の音がする。あっちの学園に続く小道の方だよ。ロベルト、カナン、僕の順番で剣戟のする方に近づいていくと、向こうの方でユリアさんがクローゼさんを庇いつつあれは、ルーアン地方に来た時に会った帝国の軍人さん達と戦っているのが見えた。

『ベレント』といった帝国軍人のリーダーが僕達の方を見て、言った。

「帝国人である以上は奴ら王国人ではなく、当然我ら帝国軍人に加勢するんだろう。あの娘を捕まえたら100万ミラも夢じゃない」

「くっ、これ以上加勢がきたら……まずい」

ユリアさんは苦しそうにレイピアを使って4人の帝国軍人の猛攻を防いでいるが、このままだと時間の問題だろう。

さて、僕達も早く加勢しないとね。

……もちろん、ユリアさんにね。僕がベレントに向かってナイフを投げ、右腕に刺さった。そして僕達がユリアさんに加勢すると一気に形勢がひっくり返った。

「王国に与する奴は帝国の誇りを忘れた愚か者、いや、裏切り者、非国民だ。そんな奴らに帝国軍人の我がやられてなるものか」

「やるかやられるかどうかなんて実力や運でしかないんだよ。人種や国によって違うわけではないんだっ」

と言つて、僕はベレントが左腕でサーベルを切りかかってくるのを左側に避けつつ、左腕の方にもナイフを命中させ、サーベルを落とさせた。もう、この時には他の人はすでに相手を一人ずつ気絶または、無力化させていた。

「降伏してください。もうこれ以上は無意味だよ」

「ははっ、降伏だどっ。我らは誇り高い帝国軍人だ。そのようなことをする者は一人もおらぬわ」

「でっ、でも隊長……」

「小僧は黙っておれ……だがな、もう一人の裏切り者にはもうすぐ裁きが下される……我ら流の完成祝いの爆弾ブレゼントでなっ！」

その時、遠くから爆発音の様なものが聞えて、その途端、ベレント

がクローゼの方にダッシュした。ユリアが咄嗟にベナレスの胸を突き絶命させた。しかし、僕はそのことを見る暇も惜しんで駆け出したのだった。

僕は、悪い予感がしながらも走れるだけ走って孤児院へと急いだ……。

……僕が目に入ったのは焼け焦げた馬車とそこに横たわっている無残な動かないモノ。

空から花びらがはらはらと大量に舞っており、まるでその光景が舞台か劇の幕が終わって閉じていく様ようだった。

もうすでに誰だか分からないモノ……だけど、僕にはそのモノが……
『ジョセフ』さんであったことを確信していた。

喉がカラカラと乾いており、動悸が激しくなり、僕はそのモノを抱きしめた。

僕はそのモノが生きていることを願った………最初の時はわずかにゴスペルは光ったが………すぐに光は消え、何度も願ったが何も起こらなかった。

そして、テレサやロベルトやカナンが現場に駆け付けた時には、焼け焦げたモノに抱きつきつつ気を失ったツカサが倒れているだけだった。

僕が目覚めた時にはロベルトとカナンが僕を覗きこんであり、二人ともひどく疲れた顔をしていた。

「ほら、二人ともひどい顔だよ。そんなに疲れているなら寝ないと元気が出ないよ」

「でも、こんな状況じゃ寝ることなんてできないわ」

「ああ、カナンの言うとおりだ」

「なら、横になるだけでもした方がいいよ。僕が横に付いてあげからね」

二人ともしびしびながら横になってくれた。僕が二人の手をしつかりと握っている……二人とも疲れていたみたいですうすうと寝息を立てて眠ってしまった。

僕は二人との手をしっかりと離さないように一晩中握り続けた。

ジョセフの葬式にはテレサさんもクローゼも村の人達も……空までもがみんな泣いていた。まるで僕の分の涙まで流してくれたようだった。

でも、僕は泣けなかった……この体験がまるでゲームで……空想であり……この劇が早く終わってしまうものだと思った。

どこかに……いやどこにもない……セーブポイントに戻ることを望んでいたんだろう。

僕はいつも間にか……夜の浜辺にとぼとぼと一人で歩いていた。

海の方を見ながらさざ波を聞きながら僕は浜辺に腰を下ろした。

闇の帳を照らす灯台の光が、あまりにも遠くて僕の手には届かないように思えた。

だけど、僕には好きな人を守れなかった。しばらく、うつむいて下を見ていた。

「おとーさん、あそこでおねえちゃんが泣いてるよー」

そこで僕は太陽の様な父娘に出会うことになったのだった。

幕間 背景と選択（前書き）

私は今回すごく小心者だということが分かりました。小説の中の人物を一人亡くならせたせいで気分がすごく滅入ってしまったのです。

でも、登場人物が勝手に動いちゃうってあるんですね。

今回についても、ご意見がない場合は（1）をそのまま進めるようにします。

みなさんに読んでもらうおかげでどんどんお話は進めることができました、ありがとうございます。

お気に入り小説登録は25件も頂き、初めて小説を書いたのにここまで登録して頂いているのは感無量です。

みなさまのご期待にそれるかどうかは分かりませんが、忙しくなっ
てはきませんが、自分なりに頑張って書いていくつもりです。

幕間 背景と選択

絵本の表紙と絵柄が同じ幕が降りて来た。舞台の脇からピエロの化粧をした少年が中央に歩いてきて、正面を向いてペコリと一礼する。

「みなさま、四章の劇、『百日戦役の置き土産』^{プレゼン}はいかがでしたでしょうか？ 今回は全然背景情報が分からなかったとは思いますが、少し補足説明をさせて頂きます。

帝国軍人、帝国至上主義の『ベレント』は百日戦役で海上からルーアン攻略に携わりました。

しかし、王国側の海を塞ぎ止める作戦により攻略日数が時間がかかりすぎた為、そのまま帝国に帰ってもほぼ軍事裁判にかけられ罰が与えられることが確定していたわけです。

そこで、一発逆転を狙っている所、王国軍人らしき人物が護衛している『クローゼ』を偶然見かけ、タダものではないと気付いたので一度襲った所を、怪我をして『テレサ』に助けられていた帝国軍人の『ジョセフ』が『クローゼ』を救ったわけです。

二回目の襲撃については、皆様の劇中をご覧になられた通りでございます。

殴り書きの手紙については、『ベレント』の隙を突いて、部下の小僧と呼ばれていた人物『シュルツ』という人がいます。シュルツがジョセフと部隊に一緒にいたときに命をジョセフに何度も救われたことがあった為、恩返しにジョセフが死なないように手紙を渡した

わけです、結果的には無駄手紙となりましたけどね。

最後になぜ、馬車が孤児院ではなく飛び出していたかは、手紙を読んだジヨセフが気付いた為、自分達の夢を壊されないように単身馬車で海岸沿いまで駆けて行く途中で馬車に仕掛けられたホールケーキ爆弾が爆発したわけです。

『蛇足』かもしれませんが、背景情報をみなさまに教えさせて頂きました。

さて、失意のツカサはどうなるか、次幕の劇については後で述べるお話の中から演じさせていただきます。

さあ、みなさま、お手元のカラクリにてこの幕間の間にお選びくださいますよう、お願い申しあげます。(ペコリ)

(1) 太陽の様な父娘に係るお話。

(2) エレボニア帝国における権力闘争に係るお話。

(3) なにか突然ピコーンって閃いて別の場所に行く。(作者注：みなさまのご意見で書けそうなものであるならば時代については百戦役の後であればオツケーです。)

そうそう、人物紹介を次の幕の前に行います。登場人物が多すぎて、もう少し少なくなした方が分かりやすいかもしれませんけどね。(ニヤリ)

では、次の幕間にてまたお会いできることを楽しみにしております」

深々と一礼して少年は舞台の脇の暗闇に消えていった。

人物紹介その一（前書き）

四章完結時の登場人物紹介です。

名前の前に の付いた人は原作で名前が出たキャラクターです。

原作に出てくる 『カーネリア』 『アイン』 『セルナート』 『星杯騎士団の守護騎士第一位の女性と』 『神代行者01』 『アイン』 の男性は別の人物です。

しまった……同じ名前になってしまいました。

それと、作中ではストレガー社という靴装備を店で販売している会社があるのでストレガーについて がつくかもしれないですけど、エドガーについての人物はオリジナルなので は付けないこととします。

ちなみに、ジョセフについては原作ではストレガー家でも帝国とも全然書かれていないので、原作には名が出ているので をつけております。

さらに原作と年齢も違う可能性がありますのでご了承ください。

四章の途中に書いた強さランクの目安の転記です。

- Sランク アイン
- Aランク ” 剣聖” カシウスⅡブライト ミザリー
- Bランク（達人レベル） グレゴリー ” 千の腕” ルフィナ リシヤール ” 狂槍” コラッド
- Cランク ” 死の商人” ケルン カノーネ カナン ロベルト
- Dランク 司
- Eランク（兵士レベル） ゴルン三兄弟
- Fランク（一般人レベル） ビンツ村長 リンダ

人物紹介その一

舞台の脇からピエロの化粧をした少年が中央に歩いてきて、正面を向いてペコリと一礼する。

「今回は登場人物について紹介をさせて頂きます。（作者注：名前の前に の付いた人は原作で名前が出たキャラクター）」

序章の主要登場人物は

『堅城司』かたしろつかさ 男性 21歳 『ツカサ』つかさ K『ストレガー』 女性 外見

12歳

『丹生藤健』にっせいただける 男性 21歳

『ララ』らら アイヒマン』 女性 6歳

『ロベルト』ろべると アイヒマン』 男性 16歳

『リンダ』りんだ デミア』 女性 16歳

『 ” 死の商人 ” 』しのかうじん ケルン』 男性 28歳

『 ゴルン三兄弟 』ごるんさんけいだい 男性 25歳 23歳 21歳

『 ” デミア村村長 ” 』てみあむらむらぢやう ビンツ』びんつ デミア』 男性 47歳

『 ” 狂槍 ” 』きやうしやう コラッド』 男性 25歳

『 カナン 』かなん フリンツァー』 女性 16歳

の十二人です。

二章の新しい主要登場人物は

『 グレゴリー 』ぐれごりー マウワイヤー』 男性 53歳

『 ルフィナ 』るふいな アルジエント』 女性 17歳

『 ” 神代行者01 ” 』かみしろこうじやう アイン』 男性 年齢不詳外見18歳の三人です。

三章の新しい主要登場人物は

『 ” 盟主 ” アリス 』 女性 年齢不詳外見12歳

『 ミザリー 』 女性 18歳

『 ミュラー 』 ヴァンダール 』 男性 18歳

『 エドガー 』 ストレガー 』 男性 33歳

の四人です。

四章の新しい主要登場人物は

『 ボローニャ 』 コルネリアス 』 女性 41歳

『 オリビエ 』 レンハイム 』 男性 15歳

『 アラン 』 リシャル 』 男性 24歳

『 カノーネ 』 アマルティア 』 女性 17歳

『 メイベル 』 女性 9歳

『 ジョセフ 』 男性 30歳

『 テレサ 』 女性 21歳

『 クローゼ 』 リンツ 』 女性 6歳

『 ユリア 』 シュバルツ 』 女性 17歳

『 アガット 』 クロスナー 』 男性 14歳

と帝国海軍軍人四人との合計の十四人です。

スポットが当たった順に登場人物は自己紹介をしてくださいね」

指をパチンツと少年がすると少年のスポットが消えて、そして舞台の中央の少し離れた個所にスポットが当たる。

やせ型の黒髪で黒瞳の青年が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「僕の名前は『かたしろつかき聖城司』で性別は男で21歳だね。序章の冒頭しか出番がなかったから……おそらくみんな忘れているかもしれないね。親は放任主義で、あまり家族一緒にはご飯を食べた記憶がないよ。兄弟姉妹は上に兄貴だけいるよ。

今は大学3年生で一人で居ることが多かったから料理が得意だね。そして色んなゲームをするのが好きだよ。

英雄伝説6『空の軌跡』というゲームについては一回作品を通してクリアしたぐらいだね。

他の人には普段は人に流される感じでお人よしで思い込みは激しいって言われてるね。

だけど時折、常人には考えられない突飛な思考をして、実行に移すんだってさ。

でもね、割合常識人で突っ込み役となることが時々あるよ」

青年が一礼するとスポットが落ち、しばらくして同じ場所にスポットが当たった。

そこには金髪で碧眼の愛嬌のあるボーイッシュな花で例えるなら『カーネーション』のショートカットの見た目が14、5歳の女の子が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「えっと、僕の名前も『ツカサカタシロ』だね……ってこれは変わったときにだけ言えばいいよね。

後で出てくるんだけど、『カナン＝フリンツァー』さんと双子の姉妹のように似ているね。

僕に関してはこれぐらいだね」

少女が一礼するとスポットが落ち、しばらくして同じ場所にスポットが当たった。

そこには黒髪で黒瞳の優しそうで、15、6歳ぐらいの背の低めなやせぎすの神官服を着た少年が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「僕は二章の時に紹介される『グレゴリー＝マウワイヤー』さんの息子さんにそっくりな姿だね。

あまり僕に関しても言うことはないかな」

少年が一礼するとスポットが落ち、しばらくして同じ場所にスポットが当たった。

そこには12歳の日光を受けると薄く虹色に輝くような金髪の蒼眼の花で例えるなら『鈴蘭』^{スズラン}のセミロングの女の子が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「僕では名前が変わったからね。僕の名前は『ツカサ＝K＝ストレガー』で性別は女性の12歳ぐらいかな。

二章の時に紹介される『神代行者01』アイン』さんの妹』抹消された神代行者04』ファイア』さんに似ている姿をしているらしいね。

『ファイア』さんは『人の想いを取り込み反映させる能力を持つ』とアインさんは言っていたよ。

四章完結時の装備は下のようになっているよ。

武器：シークレットナイフ

防具：リフレクター

足装備：コンポジット

アクセサリ1：女神のペンダント（アインからもらったペンダント）

アクセサリ2：なし

アイテム：黒のオーブメント、絵本、帝国貴族マナー中級編

所持金：24000ミラ：ロベルト、カナンと共有

えっと、空の軌跡のゲームで言うと大体、ファーストチャプターFCが終わったぐらいのレベル40だね。クラフト技は次に述べるとおりだよ。

1、チェイン1（2人連携）

2、クリティカルシュート CP20 急所に向かって投擲しダメージをクリティカルさせる

3、ワイドシュート CP30 扇状に投擲し、範囲内にダメージを与える。

4、シャドウシュート CP20 影を縫い付けるように投擲する
（付随効果 SPD - 30% Move - 50%）

5、クレバーアドバイス CP20 味方一人に動きをアドバイス
することで能力を高める（付随効果 ATK + 30% SPD + 30%）

Sクラフト 奥義 投舞円陣 対象一人 一人に高速で周りを走り
ナイフを同時に投げることでダメージを与える。

アーツ《導力魔術》について言うとまだ戦術オーブメント技術がそ

これまで栄えていない為に一部の人しか戦術オーブメントを持っていないので使えないみたいだね。
ちなみに僕だと中央と中央から三つ目が『空』で一本線で繋がっているようになるよ。

四章完結時にはすごく落ち込んでいるけど、みなさんに見てもらえるようにこれからも頑張りますので応援お願いします」

女の子が一礼するとスポットが落ち、しばらくして別の場所にスポットが当たった。

少し小太りの青年が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「俺の名前は『丹生藤 健』「つひじたけのでつかさと同じ男の21歳だ。家は神道……ありていに言くと神社だ。親父の手伝いでお札とかも時折作っている。
趣味はパソコンいじりだ。まあ、俺も冒頭の方に出ただけだからな。では、じゃあな」

青年が一礼するとスポットが落ち、しばらくして別の場所にスポットが当たった。

4 5歳ぐらいの花で例えるなら『タンポポ』の可愛い銀髪の女の

子が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「わたしのなまえは『ララ・アイヒマン』です。好きな人はおねちゃんたちです。これからもぶたいをよろしくおねがいます」

女の子が一礼するとスポットが落ち、しばらくして別の場所にスポットが当たった。

優しい目をした体つきはしっかりしている銀髪で群青色の瞳の15、6歳ぐらいの少年が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「俺の名前は『ロベルト・アイヒマン』で性別は男で16歳だ。エレボニア帝国の南東部のデミア村出身で、村では狩人として生計を立てていた。四章完結時にはツカサを探すために外国にも鼻の利くエレボニア帝国支部ストレガー商会にお世話になっている。

趣味は狩りを含めて仕事をする事だ。見た通りそのままの性格だ。装備などは後の通りとなっている。

武器：強化ロングボウ

防具：リフレクター

足装備：コンポジット

アクセサリ1：なし

アクセサリ2：なし

アイテム：救急道具

所持金：24000ミラ：カナン、ツカサと共有

1、チェイン2（3人連携）

2、デレイション2 CP25 2体までの敵の足を打ち抜き、行動を遅らせる（Delay効果）

3、応急処置2 CP20 対象を応急処置することで体力を5000回復させる。

4、対応射撃2 CP15 自分以外の対象二人を指定することで、対象に与えられる物理攻撃を阻止するように弓矢を打つ（物理攻撃のみ限定 発動90%）

Sクラフト 奥義 暴乱射撃 範囲大 大きくジャンプをして範囲内を射撃することで範囲内の敵に大ダメージを与える。

セカンドチャプター

261

ツカサから言われたんだが、空の軌跡のゲームで言うと大体、SCの中盤ぐらいのレベル65だ。

オーブメントは中央が風で中央から二つと四つに分かれているが、俺にはよくは分からない。では、失礼」

青年が一礼するとスポットが落ち、しばらくして別の場所にスポットが当たった。

気の強そうな15、6歳ぐらい縦ロールの女性が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『リンダ＝デミア』性別は当然女性の16歳ですわ。ロベルトさんの隣とは『愛する二人はいつも隣同士』ですわね。デミア村の村長の娘をしていますわ。趣味は服作りですわ。どこかの泥棒猫がロベルトさんを一時的に連れだしているけど、必ず私のもとに戻ってきますわ。では、またごきげんよう」

少女が一礼するとスポットが落ち、しばらくして別の場所にスポットが当たった。

恰幅のよい商人風の男が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『死の商人』ケルン』、性別は男性で28歳です。趣味はお金の有効活用です。レベルは約80といったところですか。身喰らう蛇の執行者候補で計画を練るのが好きですね」

男性が一礼するとスポットが落ち、しばらくして別の場所にスポットが当たった。

人相の悪い男とチビでやせた男と背の高くて太っている男が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「俺達は『ゴロン三兄弟』で全員男だ。オレは長男の『ゴロン』25歳、チビの次男の『ザルン』23歳、デカイのが『バルン』21

歳っていうんだ。趣味は食べ物色んな食べ方を生み出すことだ。ザルンは『くざんす』が口癖で、バルンは『んっ』が口癖だ」

三人の男性が一礼するとスポットが落ち、しばらくして別の場所にスポットが当たった。

ひげを蓄えた男性が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。「私の名前は『ピンツ』デミア』で男の47歳だ。エレボニア帝国の南西部にあるデミア村で村長をやっている。先ほど紹介した『リンドン』デミア』の父親だ。趣味は昔の文明のことを文献などで調査することだね」

壮年の男性が一礼するとスポットが落ち、しばらくして別の場所にスポットが当たった。

紅い槍を持った男性が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。「俺の名前は『狂槍』コラッド』男で25歳だ。趣味は慈善事業と掃除ってところだ。ははっ。レベルは大体1000つて所だ。さっき紹介しやがった『ケルン』と同じ身喰らう蛇ウロボロスレギの執行者候補だが、奴と違って俺は面白いことをすることが好きだから

男性が一礼するとスポットが落ち、しばらくして別の場所にスポットが当たった。

そこには金髪で碧眼の愛嬌のあるボーイッシュな花で例えるなら『カーネーション』のショートカットの見た目が14、5歳の女の子が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『カナン』フリントツアー』で女性で16歳よ。趣味は木登り……いいえ、登山と訓練することね。料理は……まあ、ロベルトに言わせれば黒いものしか残らないって……あつ、今笑った人は大盛りで食べさせるわよ。レベルはSCの中盤セカンドチャプターぐらいのレベル65ね。装備などは後の通りとなっているわ。

武器：苦無くない

防具：リフレクター

足装備：コンポジット

アクセサリ1：なし

アクセサリ2：なし

アイテム：ブレイサー手帳、ブレイサー正遊撃士紋章

所持金：24000ミラ：ロベルト、ツカサと共有

1、チェイン2（3人連携）

2、クリティカルシュート CP20 急所に向かって投擲しダメージをクリティカルさせる

3、アーチシュート CP30 半円状に投擲し、範囲内にダメージを与える。

4、オーバーシャドウシュート CP20 影を縫い付けるように1体の対象を中心とした小円に投擲する（付随効果 SPD-50% Move-75%）

Sクラフト 奥義 投舞円陣 対象一人 一人に高速で周りを走りナイフを同時に投げることで大ダメージを与える。

オーブメントは中央が火で中央から一つと五つに分かれているわ、まだ戦術オーブメントを持っていないからアーツ（魔法）はあまり関係ないわね。以上よ」

少女が一礼するとスポットが落ち、しばらくして別の場所にスポットが当たった。

人物紹介その一（後書き）

次話まで人物紹介は続きます

人物紹介その二（前書き）

四章完結時の登場人物紹介その一の続き、二章から四章です。名前の前に の付いた人は原作で名前が出たキャラクターです。某精神コマンドだったIでツカサKIIストレガーを調べると『不屈、激闘、感応、友情、再動』だったです。感応とかはあつてそう。今、日本ファルコムさんの公式ホームページで『零の軌跡』の登場人物の出演について募集していましたので、一件応募してみました。女性キャラの10番に名前は9文字だったので『ツカサ ストレガー』ですけど、……多分、当選は難しいとは思いますが、当選落選によってもエンディングを変えますね。

人物紹介その二

黒髪にちよつと白髪が入った渋そうで厳しそうな男性が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「名前は『グレゴリー』マウワイヤー』で、性別は男性で年は53歳だ。趣味は教えることと学ぶことだな。四章完結時にはまだ異端審問会で審査待ち中ではしばらくはでねえみたいだ。レベルで言うと120程度だな。まだ、そこまで制御できねえが^{ステイグマ}聖痕の能力は『移動』。また、おめえらと会える日を楽しみに待つ」

初老の男性が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

ボウガンと法剣を構えた^{テンブルソード}ピンク色の髪をしたきりつとした才女にみえ、花で例えるなら『アネモネ』の若い女性が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『ルフィナルエージェント』で、女性で17歳ですわ。趣味は小説を書くことよ。レベルは110程度ね。今度戻る時には新作のチヨコレートをケビンとリースに買っていこうかしら」

女性が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポット

トが当たった。

落ち着いた感じの顔立ちが整った18歳ぐらいの白髪の男性が一步前に出た。

「俺の名前は『神代行者01』アイン』、性別は男だな。趣味は記録をつけること。『妹を愛でることが趣味』って言われるかもしれないが、生活そのものである以上、趣味ではないと断言しておこう。レベルは400程度といった所だ。能力は……『ツカサ』からまたビンタされるからな、今は言うことはできないな。まあ、文句を言う奴がいたら消せばいいのにな(ニヤリ)」

青年がそう言うとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

金髪紅眼のすごく目端が整い気品にあふれた12歳程度にしてはスタイル抜群であり、花で例えるなら『ガーベラ』の少女が一步前に出て優雅に一礼した。

「私の名前は『盟主』アリス』で性別は女性で年齢の方は皆様のご想像にお任せしますわ。趣味はイタズラかしら。身喰らう蛇ウロボロスの盟主ですわね。能力については皆様のお時間を大幅に割いてしまいますので省略するわね。では、皆様ごきげんよう」

少女が優雅に一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

金髪碧眼の剣士の様に身体が引き締まっている花にたとえるなら『すもも』の女性が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『ミザリー』で、女性で18歳です。趣味はお嬢様の躰しっけをすることです。レベルは200程度です。お嬢様の護衛の為にここまで来たのですが、皆様にご迷惑をかけませんでしたか？ すぐに戻らないと、では失礼します」

女性が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

エレボニア帝国の軍服を着た堅物っぽい若者が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「俺の名前は『ミュラー・ヴァンダー』で男性の18歳だ。趣味は鍛練だ。家で親父からヴァンダー剣術を三章の方で出てくる『オリビエ』と一緒に習っている。『オリビエ』がまた何かしでかすかが心配だ」

青年が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

商人風のやせぎすの男性が一步前に出てシルクハットを取って正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『エドガー・ストレガー』で男性の33歳だよ。趣味はクレバーと思ったことを収集することだね。エレボニア帝国にてストレガー商会の支社長をやっているよ、主に取り扱っているのは靴だ。もし、皆様にクレバーな話があれば商会まで持ってきて頂けるとありがたい」

青年がシルクハットを取って一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

ちよつときつめの眼力がめぢからすごい花で例えるなら『カトレア』の淑女が一步前に出て正面を向いて恭しく一礼する。

「わたくしの名前は『ボローニャ・コルネリアス』と申します。性別は女性で41歳でございます。趣味は経理です。では、わたくしはこれにて失礼させていただきます」

淑女が恭しく一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

スポットが当たると、楽器を持った金髪の少年が歌を歌いながら一礼をする。

「ららら、僕から君達に捧げる歌だ、ぜひとも受け取ってくれたまえ。(一曲歌った後)僕の名前は『オリビエ・レンハイム』で男性の15歳だね。趣味は『ラブアンドピース』さ。また、次会った時には新曲を披露させてもらおうよ」

少年が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

玉ねぎ頭の形の金髪の青年が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『アラン・リシャル』で男性の24歳だ。趣味は良いワインを集めることだね。よく言われることだが私は大佐ではなく、まだ少佐の身なので間違えないよう気を付けてください」

青年が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

性格的にも顔もきつめの花で例えるなら『スターチス』の女性が一歩前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『カノーネ・アマルティア』で女性の17歳です。趣味は整理することです。レベル的には70程度よ。これ以上は軍務にかかわりませんので失礼します」

女性が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

金髪の花で例えるなら『水仙^{すいせん}』の少女が一歩前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『メイベル』で女性の9歳です。趣味は美味しい紅茶を飲むことです。年の離れた父が病気がちなのでとても心配なのですが、『リラ』も一緒にいるので楽しい毎日をおくらせて頂いてます」

女の子が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

『エドガー・ストレガー』を穏やかにして若くした感じな青年が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「僕の名前は『ジョセフ・ストレガー』で男性の30歳です。趣味は歴史や戦史です。皆様にはいつも兄さんやツカサがご迷惑を掛けています。長い目で見てやってもらえると嬉しいですね」

青年が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

優しげで母性溢れた花で例えるなら『チューリップ』の女性が一歩前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『テレサ・ストレガー』で女性の21歳です。趣味は子供の世話をすることですわ。主人の残した孤児院で子供の成長する姿を見ることが幸せですね」

女性が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

紫の髪で花で例えるなら『コスモス』の少女が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『クローゼリンツ』で性別は女性で年齢は6歳です。趣味は友達の『ジーク』と一緒に遊ぶことと読書です。ジョセフさんとテレサさんから教えてもらったハーブの育て方についても最近に興味が出てきました」

女の子が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

水色の髪できりつとしたスマートな体形で、花で例えるなら『花苳^{はなじよ}蒲^{うぶ}』の女性が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「私の名前は『ユリアッシュバルツ』で性別は女で17歳だ。趣味は訓練だ。ある御方からクローゼ様のお世話と護衛を賜っている為、この場は失礼する」

女性が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

赤毛の生意気そうな少年が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「俺の名前は『アガット・クロスナー』で男の14歳だ。趣味は今では修練だな。帝国の女なんかに庇われるようじゃ駄目だからなでは、修練の続きがあるから、じゃあな」

少年が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所にスポットが当たった。

四人のエレボニア帝国の軍服を着ている人達が一步前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「我の名前は『ベレント』だ。あとは、小僧……任せた」

「ええつ、隊長ひどいですよ。オレッチの名前は『シユルツ』で男で20歳です。他の人も全員男でベレント隊長は43歳で、グメルさんは35歳で、ミユートさんは27歳です。オレッチの趣味は整備です。手入れとかも得意です。グメルさんは趣味はグルメですね。ミユートさんの趣味はないようです。以上、失礼しました」

四人の男性が一礼するとスポットが落ち、しばらくして違う場所に

スポットが当たった。

ピエロの化粧をした少年にスポットが当たって一歩前に出て正面を向いてペコリと一礼する。

「ようやく、これで四章までに登場した人物の紹介は終わりました。ちょっとハプニングがありました。平和に紹介終わって何よりでした。えっ、僕の紹介ですって、劇中にちゃんと登場したらするつもりですよ。では、今度こそ次の幕間にてまたお会いできることを楽しみにしております」

深々と一礼して少年は舞台の脇の暗闇に消えていった。

五章 1話 決断と太陽父娘（前書き）

原作のキャラクターには名前の前に マークがついています。

人物紹介：
セカンドチャプター

『エステル』ブライト』：原作の『空の軌跡』のFC

ファーストチャプター

SCの主人公で女性の6歳、花で例えるなら『ひまわり』。趣味は虫集めと釣り。天真爛漫な性格で、思い込んだら一直線の元気な少女。彼女がいるだけで周りの雰囲気明るくなること等から、彼女のことを指して「太陽の娘」という表現が使われている。

『カシウス』ブライト』：前述の『エステル』の父親で『エステル』いわく中年不良の男性の35歳。リベール王国軍において大佐の階級で働いていた事もある。《剣聖》と呼ばれるほどの剣の使い手だったが、遊撃士になった折に剣を捨てた。百日戦役の折に妻の『レナ』ブライト』は『エステル』を庇ってロレントの時計台で死亡している。武の理に至ったとされるその実力は凄まじく、彼の放つ一撃一撃が大地をも震撼させる程であり、大抵の者は手加減された状態でも全く彼にかなわない。また知略においても、先を遠く見通す程に大変優れ、百日戦役では軍事戦略上革命的な反攻作戦を立案・指揮して王国の危機を救った実績がある。名実共にリベールにおける最強の代名詞たる人物で、娘のエステルを始め、彼を尊敬し目指す者は決して少なくない。またクローゼは彼のことをリベールにおける「最後の守護神」と評しており、リベール王家・王国軍・遊撃士協会など多方面からカシウスに寄せられる信頼度には絶大なものがある。いわゆる『チート親父』。

ついに主人公とチート親父を出してしまいました。って四章の最終話で空の軌跡をプレイしている人にはばれただったとは思いますが……うん、もっとうまく文章が書けたらなあ。くやしいです。

五章 1話 決断と太陽父娘

カシウス「ブライト、人は様々なものに影響を受けながら生きていく存在だ。逆に生きていくだけで様々なものに影響を与えていく。それこそが『縁』であり、『縁』が深まれば『絆』となる。そして、一度結ばれた『絆』は決して途切れることがないものだ。遠く離れようと立場が違えども何らかの形で存在し続ける」

選択肢：（1）太陽の様な父娘に関係するお話。

僕がちよつと顔を上げると人懐っこそうな笑みを浮かべた女の子が僕を覗きこんできた。

「あれー、私の見間違いだったかな」

「……………」

少し遠くから足音が聞えて来て、大人の男性の声が聞えて来た。

「おーい、エステル、また何か見つけたのか？」

「おとーさん、おねーちゃんがいる」

「すぐにそっちに行く」

砂浜を踏みしめる音が聞え、僕の隣で足音が止まった。

「生きてはいるみたいだな……」

「……………」

その人物、『カシウス』『ブライト』さんは僕の隣にどつかと座り、黙ってしばらく灯台の光が届いている海原を見ていた。

「……………そうだな……………少し昔話でもしようか。昔々ある所に一人の男がいた。その男は愛する者と出会い、結婚し子供もできた。男の属している国の中でも出世をし順風万端のように思われた。そしてその男は隣の国と戦争が起こりそんなことを予期していた為、準備を整えてギリギリの瀬戸際で敵軍を追い払うことに成功した。国の人々からは英雄と祭り上げられた。しかし、その男は最愛の人をその戦争で亡くしてしまった。だから、その男は考え、二度と大切な人を失わない為に今までの生き方を捨てる誓いを立てたんだ」

「僕にも大切な人、頼ってもいいという人が居たのです。でも、その人が僕は殺されることを止めれたはずなのにできなかつたんです。だから、僕が代わりにしっかりとしなければ大切な人をもっと失ってしまうんです。だから僕は……………」

「その頼ってもいいという人はどんな人だったのかい」

僕は、ぼつりぼつりとカシウスさんにジョセフさんと出会ったこと、

そして昔話をしてもらったこと、さらにはもっと自分に頼るように言ったこと等を話した。

そして、最後にジョセフさんが亡くなったことについて話そうとした時に……。

「……僕が馬車の所に……着いた……時には……うくっ……っ……うっ……うああああああっ……」

しゃくりあげた後、僕はついに大声で泣き出してしまった。

「よくここまで我慢していたな……気の済むまで泣くといい」

カシウスさんはずっと僕の泣いている所に一緒に付いてくれた。

「ごめんなさい、みっともない所を見せてしまって……」

「可愛い子が泣いているのを慰めれるなんて男にとっては嬉しいものだぞ。どうだい、少しは落ち着いたか」

「あっ、はい、おかげ様で。僕の名前も言っていなかったよね。僕の名前は『ツカサⅡKⅡストレガー』です。『カシウスⅡブライト』さん？」

「ほう、俺の名前を知っているとはな。ツカサ、ストレガーとは……エレボニア帝国に支社があったはずだが、その関係者なのかい？」

「はい、一か月ぐらい前に養子になりました」

「そうか、おつ、エステルが戻ってきた見たいだぞ」

エステルちゃんが何か小脇に抱えて僕達の方に来るのが見えた。

「はいっ、おねーちゃん。これっ、あげる」

小脇の方から甲殻類のわきやわきやしている姿が見えたかと思うと、
でっかいカブトムシを僕の方に突き出してきた。

「あっ、ありがとう」

「ロレントだったらもつと大物をあげられたのに、残念」

僕が笑顔で受け取ると、もつと大きいカブトムシをプレゼントでき
なかったのを悔しがっているようだった。

「おねーちゃんがやつと笑ってくれた」

「えっと、僕も何かお返しできればいいんだけど……そうだ、もし
よかったらしばらく掛かるけど、僕が作った靴を二人にプレゼント
させてもらえないかな？」

「ああ、それは楽しみに待っている」

「おねーちゃん、ありがとう」

ブライト父娘は今夜はマノリア村で宿を取ろうと考えており、僕は帰り道のついでに案内することを申し出た。

「こつちがマノリア村の方だよ……それにこれからは僕がもつとしっかりしなきゃ、ロベルトとカナンを守ってあげられないよね」

「……………なあ、ツカサちょっといいか。もしよかったら俺の修行と一緒に付き合わないか？」

「ふえ、えつ……………僕は……………」

「ツカサ、お前の選ぶことだ、他の人に聞いて選ぶことではないとだけは言っておく。明日の朝までは村にいるからな、その時に答えを聞かせてもらおうか」

途中からはエステルちゃんは疲れてカシウスさんにおんぶされた。それから黙ってマノリア村まで案内することになった。

そして、村の入り口でヤキモキしているロベルトとカナンに出会うのだった。その夜は僕にとっては長い長い夜になった。

次の日の朝、僕はロベルトとカナンと一緒にカシウス父娘を一階の酒場で待っていた。朝日が出てしばらくして階上から足音が聞えて、二人が降りて来た。

「おはようございます、カシウスさん」

「で、答えは決まったかい」

「はい、僕を修行を一緒にさせてください、お願いします」

「ほう、そうか……ロベルト君、カナン君、二人とも責任を持ってこの『カシウス』ブライト』がツカサを一時預かる」

「……頼む」

「……お願いするわ」

こうして僕は、『エドガー』ストレガー』への手紙をロベルトとカナンに託し、ツァイス方面にブライト父娘と一緒に向かったのだ。た。

五章 2話 故障と天才一家（前書き）

ツアイス地方の思い浮かぶ5つという私には、『中央工房』、『ペンゲー』、『ヒツジン』、『にがトマト』、『最後に『温泉』という感じでした。（原作キャラクターの名前の前には 印をつけておきます。）

人物紹介： 『アルバート・ラッセル』：男性の58歳でティータの祖父で、導力器を発明したエプスタイン博士の直弟子の一人。中央工房の設立者であり初代工場長。「導力革命の父」と呼ばれる偉人。

『エリカ・ラッセル』：女性の23歳でティータの母親で、アルバートの娘。金髪。基礎理論こそ父親に譲るものの、他の追随を許さぬ応用性を以って、カペルやアルセイユの基盤を作り上げた才女。可愛い物好きの二強の一人。

『ダン・ラッセル』：男性の26歳で、ティータの父親で、温和で物静かな性格。棒術を得意とした凄腕の遊撃士だったが、怪我を理由に一線を退き技師に転向する。

『ティータ・ラッセル』：女性の2歳で金髪の可愛い娘。原作では重要プレイヤーキャラの一人。後に 『アガット・クロスナー』との年の差カップルになるかも。赤ん坊の時の遊び道具としてゴム製のスパナとか持っていていそうな気がするけど……気のせいかな。

五章 2話 故障と天才一家

エステルちゃんは、相変わらず、元気に周りの街道の木々や池に興味深々と言う状態で、僕も一緒につられて覗きこんだりしつつ街道を進んで行った。その姿をカシウスさんが、優しく見つつ僕達の旅は再び始まった。

「そういえば、なぜカシウスさんは旅をしているのですか？」

「俺か、ちょっと知り合いの人のツテで手ほどきを受けようと思っ
てな」

「えっと、それは棒術の手ほどきですか？」

「ふむ、ツカサ。その通りだ。しかし、なぜ分かった？」

「えっ、えっと、それは……他の人に聞かれない場所ってあります
か？」

「ふむ、それについては、修行の終わりにでも連れていくことにし
よう」

「では、その時にお話しさせていただきます」

「うむ、分かった」

そして、ツァイス地方への玄関口のエア＝レットン関所でブライト

父娘と一緒に僕は一泊した。カシウスさんを見ると関所の役人が敬礼していた。しかし、カシウスさんが自分は軍を辞めたので礼は必要ないと言ったので、役人さんはみんな残念そうにしていた。

次の日、暗闇のカルデア隧道をブライト父娘と一緒に僕は通ってツイイス中央工房へ無事着いた。暗闇の隧道はカンテラの明かりを使って移動したけど、幸い魔獣はメイン通路までは来ないで、遠くの方から唸り声や叫び声が聞えて、さらに僕を見に来るような視線があるような感じだった。ツイイス中央工房に到着したが、エレベーターは百日戦役の影響か動作せず、非常階段にて僕達は正面玄関まで上がった。

カシウスさんは、迷わず街の外れにある工房を訪ねた。しばらく経ってでてきたのは元気そうな老人『アルバート』ラッセル』さんだった。

「誰かと思ったら、お主か、カシウス大佐、いや今はカシウス殿と言った方がよいかな」

「ええ、その方が有り難いです。ラッセル殿もお変わりなくお元気ですね。して、『ダン』ラッセル』殿はどこかにお出掛けですか？」

「ああ、エルモ村に養生しに出掛けておる。息子ダンに何か用かの？」

「ええ、遊撃士としての心得と棒術の手解きをお願いしたいと思いまして参りました」

「剣聖のお主がか……ふむ、ならばワシも一緒にエルモ村まで行く。ちょうど馬鹿娘エリカに頼まれていた部品ができたからの」

「それは心強い」

「して、そちらの小さい娘はエステルちゃんだったと思うが、もう一人の金髪の娘は誰かの」

「はい、僕の名前は『ツカサ』K『ストレガー』といます。カシウスさんに修行を一緒にしないかと誘われたので付いてきました」

「ほう、この娘がの。二人とも馬鹿娘^{エリカ}の毒牙にかからないか心配じやわい」

「あはは、多分……『ティータ』ちゃんがいるから大丈夫かと思いません」

「ふむ、確かにそうじゃな」

ツアイス市をその日のうちに出発し、ラッセル教授を加えた旅も順調に進み、その日のうちにエリモ村……温泉の場所に着いた。

夕日の中に正面には旅館のような建物が見え、その場所に僕たちは入っていった。

その宿には何人か宿泊客が来ており、その中の一人金髪の若い白衣を着た女性『エリカ』ラッセル』と眼があつた瞬間、エリカの眼がキラーンと輝き、僕は殺気を感じた。

すぐさま、僕は回れ右、すなわちコマンド：『逃げる』を選択した、ダカダカダカッ。

多分、背後を見たら暴走した初号機のような四足で襲い掛かってくる姿が眼に映ったことだろう。

もうすぐ、出口の扉だ、これで逃げられる……。

しかし、まわりこまれてしまった。

無常にも扉のドアのノブはエリカの手で押さえられているのであった。

エリカの攻撃：『抱きつき』

「なぐに、この可愛い娘は……ティータにも負けず劣らず可愛いじゃない」

エリカは僕を抱きつきながら、すりすりとお擦りをし始めた。

こうして僕はエリカに捕獲されてしまったのだった。

部屋でエリカは右手にティータちゃん、左手に僕を捕まえていて、非常にご満悦だ。栗ご飯を頼んでいたらしく、ホクホクの栗のいい香りがしてくる。アーンと言ってティータちゃんに食べさせているけど……まさかっ、そんな恥ずかしいプレイは……嫌だ、嫌過ぎる。目の前にはおいしそうな栗ご飯、そしてその香りが満遍なく部屋に漂っている。しかも今日はほぼずっと歩き詰めでお腹がくうくと今にもならんばかり……。周りにはエリカとティータちゃんしかいない状況で耐えられるはずもなからう。

「じゃあ、ツカサちゃんもアーン……」

「……アーン……」

なんか色々なものがガラガラと崩れ去り、涙があふれ出てきた。

「涙が出るほどそんなにおいしかったのね……じゃあ、もう一回アーン……」

「……アーン……」

栗ご飯は本当においしかったです、ただ、少ししょっぱかったです。

「しかし、困ったわね、これは早く温泉を修理しないと『温泉で楽しもう大作戦』が実行できないじゃない。ダンも怪我しているし、困ったわね」

「えっ、温泉がどこか壊れているのですか？」

「ツカサちゃん、そうよ。なんか宿の人の話によると修理しようとして温泉の上の方の小屋の方に向かうと小屋の中から黒いものや赤いものが襲い掛かってきたって言ってたわ」

「僕でよければ、調べてみましょうか？」

「ダンが怪我しているからね……カシウス大佐と一緒になら大丈夫ね。いいわよ、ただし、怪我をしないように気をつけなさい」

「はい、では、行ってきます」

「待って、その前に」

と言って、またすりすりと僕をほお擦りしてきた……まったく、この人は……。

五章 2話 故障と天才一家（後書き）

近況報告にも書いたのですが、ちょっとどころではなく書くスピードが遅くなりそうです。次は、やっぱり温泉と言ったら……決まっていますよね。

幕外伝〜スピリットと湯けむり騒動〜序（前書き）

作者「温泉ということに急遽、退魔師見習いさんの『欠陥チート勇者』とクロスオーバーします」

ツカサ「本編はどうするつもりだよ」

作者「んなもん、幕外伝終わってからにする」

ツカサ「……」

作者「みなさん、ピンクって好きですよね？」

ツカサ「ええっ、そっそんなこと言っただって色々と『欠陥チート勇者』の主人公『駆』君にもご迷惑がかかるし……」

作者「退魔師見習いさんの作品でも話題に出ていることだし、大丈夫でしょ」

ツカサ「そっ、そんなあ〜」

幕外伝くスピリットと湯けむり騒動く序

ある日、僕はストレガー商会の支社長の一室に呼ばれた。

「なんででしょう、エドガー支社長」

「いけないね、なんどもお義父様もしくはパパと呼ぶことがクレバーと言ったはずですけど」

「そんな下らない用だったのですか、ますます変態王子オリヒエの馬鹿が感染したようですね、失礼するよ」

「いや、失敬失敬、本題に入ろうか。実はこの建物、商会の建物だがね。そろそろ改装しようかと考えているんだよ。それでね、その改装している間、君達4人にはいつもお世話になっていつことだし温泉にでも旅行に行って貰い日頃の疲れを癒してもらおうかと思うのだけどね」

「えっ、本当ですか。ありがとうございます、お義父様」

というわけで改装がある為、日頃の疲れもあるしエルモ村温泉旅行4人分を『エドガー』ストレガー』にプレゼントされた。さすが支社長、実にクレバーな提案だね。お土産にいいものを買ってきてあげようつと。ロベルト、カナン、ララと一緒に早速飛行船を乗り継いで何事もなく温泉のあるエルモ村に到着した。

途中のお店でカナンが何か熱心に品物を見ており、後で商品を部屋まで届けるように頼んでいた。

「何を買ったの？」

「ふふふ、秘密よ、届いてからの楽しみ」

宿屋のお婆さんから聞いた話には温泉の奥地に『秘湯があり、そこに入れば何かすごいことが起こる』という伝説がある。

さらに『その秘湯に入る為には般若湯はんじゃとうと呼ばれる未成年でも飲めるような飲み物（注：決してお酒ではありません）を飲みながら秘湯を探さないと見つけれない』という言い伝えだ。

というわけで僕とロベルトの組とカナンとララの組に手分けして秘湯を目指し探し始めた。僕は般若湯はんじゃとう飲みつつ歩いて行くと何だか気分が良くなってきた。

「ふふふつ、このしゃきには必ず秘湯がありゆつ、しよれを僕が見しゅけてやるれすよ」

「おつ、おいつ、ツカサ大丈夫か？」

「ぼつ、ぼくはだいじょうぶれすよ、酔ってなんかないれすよ」

僕は思わず気持ちよくなってちょっと駆け出していくとちょうど子供が入るぐらいの隙間が草むらの下であり、その下にあった温泉に勢いよくダイブしてしまった。その温泉に入ったがためにこの後想像もつかない展開になるうとは誰も想像できなかっただろう。

「おゝい、ツカサ、どこに行った」

幕外伝々スピリットと湯けむり騒動々序（後書き）

本当に退魔師見習いさん、無茶振りばかりしてすみません。
ありがとうございます。

幕外伝「スピリットと湯けむり騒動」破（前書き）

作者「では、今回から『欠陥チート勇者』の主人公の登場です」

ツカサ「ああ、僕みたいにひどい目にあわなきゃいいんだけど…」

…（合掌）

作者「ふふん、本文を見てみれば分かるんじゃないか」

ツカサ「……」

幕外伝〜スピリットと湯けむり騒動〜破

side ロベルト

1分後？

あれ？ おかしい。

どこにもいない……。

「どうする」

ピカーン！

と、突然草の下に隠れている温泉が発光した！

すると何と、金髪のお姉さんが……いや、ただの小汚いオッサン出現！

「……誰だアンタ」

「丁寧語を忘れておるぞ。ウオホン、……私は温泉の精霊じゃ」

えっ！ こんな小汚いオッサンが！？

どう考えても中年のサラリーマンだ。

それに頭が淋しい。

「お主何処を見ておる！」

ぶっ、いや失敬した。

「……まあ良い。お主……何か温泉に落としたじゃろ？」

「？ ああ」

「返すからのう。もう落とすなよ」

オッサ……いや、温泉の精霊さんが持っていたのは、黒く長いサラサラした髪。凜とした顔立ちに後ろから見える白い首筋。しかもミニスカ浴衣からは白く滑らかな素足がチラリと見える。さらに頬が湯あたりのせいか少し赤くほてっており、大人と少女の境目のアンバランスさを持った。その名は『欠陥チート勇者』の駆子ちゃん。

注意：駆子は駆の性転換バージョンである。ちなみに巨乳まさかつ、ツカサ（注：実際は『本物の駆子』です。次からは『駆子』のみ表示します）。第四幕と同じようにまた姿が変わったのか！？

なんて可愛くて はっ、背後に金髪のは『可愛いもの好き』二強のエリカが……これはツカサ（駆子）を守らなくては……色々やバイ。おっ、ツカサ（駆子）が目を覚ましそつだ。

「うっっ、ここは……」

「可愛いものレーダーを持って来てみたらここから反応がすごいことになってきたわ、ふふふいい子だから、その可愛い娘を渡しなさい」

「渡すわけにはいかない、カナンちょうどいい所に来た、ツカサ（駆子）を連れてここから離れるんだ」

「あ、ああ、すまん。だが俺は……」

「そのミニスカ浴衣もすばらしいけど、セーラー服やウエディングドレスの他にも……ふふふ、ファンタジーらしくプリンセスの姿やたまたメイドさん、いいえ、清楚にバトルシスター姿も捨てがたいわね、じゅるり」

「さっさと行けっ」

「あくまでも邪魔する気ね、ならば無限の妄想とこの機体の前に潰えなさい、いでよっ、『オーバルギアオートマチック』（ガシヨン）」

「そういえば、一つ言い忘れていた。時間を稼ぐのはいいが別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」

side 駆子

それ以降、背後でガシヨンガシヨンと動く機械音と何か高速で動く物音、そして凄まじいまでの爆音の音を聞きながら俺たちはカナンと呼ばれる娘に連れられて温泉宿の方にでて来た。

「ひとまずは私達の部屋に避難しましょう、見つかったら……また考えればいいわ」

「ああ、そうだな。それと俺はカナンの言っているツカサではない」
「えっ、そうだったの。ただ事情があるみたいね、部屋で話してもらってもいいかしら？」

カナンの案内する部屋に通されると、タンポポのような銀髪の女の子が部屋で出迎えてくれた。

「カナンお姉ちゃん、おかえりなさい。あれっ、そっちのかっこいいお姉ちゃんは誰？」

「ああ、俺か、俺の名前は『駆』だ。実は……」

「ストップ、その前にこのタオルで頭を拭きなさい。ララは駆君に余ったタオルを渡してちょうだいね。そういえば、もうそろそろ着替えになるものが届くはずだけど……」

そうカナンがいうやいなやドアをノックする音が聞こえ、続けて「荷物を届けに参りました」と男の声がした。

「はい、ちよっと待っていてください」

タオルでごしごしと髪をしようとする、ララと呼ばれた娘が手を止めてきた。

「駆さん、ダメ。せっかくそんなに素晴らしい髪なのにそんな拭き方をしたら痛んでしまう。駆さんはその椅子に座ってもらえば私が綺麗に拭き取ってあげる」

「あ、ああ、ありがとう」

椅子に座るとララが俺の髪をタオルで上下から挟み込むようにポン

ポンと抑えるようにして素早く拭き取っていく。大体その作業が終わる頃にカナンが戻ってきた。

「ただいま、たまたま駆君には一着だけはサイズが合うものはあったのだけど、色々試してみようか。事情を聞きつつ着替えましょ」

だが、その選択肢に俺は愕然とするのだった。

幕外伝「スピリットと湯けむり騒動」破（後書き）

駆君がヤンデレたアリスさんにやられないことを切に願う次第でございます。ちよいと不満だったので、修正を大幅に入れてみました。

幕外伝〜スピリットと湯けむり騒動〜急（前書き）

今回は私、香多詩路が送った選択肢に退魔師見習いさんが返した文章が面白かったのでそのままここに掲載します。

作者 「駆、お前なら何にする？」

駆 「どれもいやだあああああああああ！……！」

作者 「うるせーよ」

駆 「はあああ、なんだこのふざけた選択肢は！？」

作者 「やっぱりミニスカ浴衣がいいかね？」

駆 「いや、あれは足がスースーする……って何言わせんじゃ……！」

作者 「意外にしっかり考えている駆君でした」

駆 「……………」

作者 「それじゃ、胸がきつくお尻ダボダボな服？」

駆 「却下」

作者 「それじゃ子供用ワンピース。身体のラインがよく出るよ」

駆 「却下」

作者 「それじゃ、ゴスロリ。アリスと仲間だね」

駆 「……………んじゃそれでいいよ……………」

作者 「決定しました。出来るだけ全部」

駆 「オイ!!」

幕外伝／スピリットと湯けむり騒動／急

side カナン

……少女説明中……

「ふむふむ、話は分かったわ、ただ早く着替えないと風邪を引くからね、はいこれ」

選択肢その一：子供用の白いワンピースの場合

情景を言うとは飾りの少ない白いワンピースで、サイズが小さいせいか身体の線がはっきりと出ているおり、特に下の方は短いタイトスカートの様にピッチリしていた。子供っぽい中にも清楚でかつ大人な雰囲気兼ね備えた格好よ。

「これはツカサに着せようと考えていたわね、ちょっとサイズが小さいかしら」

「これは俺のサイズに合っていないので却下だ」

「仕方ないわね、次いきましょうか」

選択肢その二：水色系の明るめのスカートに紅と黒のブレザータイ

プの上着の場合

情景を言うとは活発な感じながらも持ち前のスタイルの良さが胸の辺りを際立たせて盛り上げており、正に『so sexy』という言葉がぴったりにね。

「これは私が着てみんなで写真を撮ろうと選んだ服だわ」

「ちょっと、これは胸がきつくて、お尻辺りがブカブカだ」

「うっ、悪かったわね、どうせ私は駆君みたいにスタイル良くありませんよーだ」

「とにかく俺にはこれは合わないな」

選択肢その三：男物のタキシードの場合

着替え途中にて：下着姿に男物のワイシャツ一丁着た姿で胸がはち切れんばかり。こっこれは、そのままの姿じゃ、私の理性が持たないわ。

「カナンお姉ちゃん、手が止まっているよ」

はっ、ララに声を掛けられなかったら間違いなく襲っていたに違いないわ。なんて恐ろしい娘。

更にタキシード姿の完全体なら倒錯的な魅力で普通の女性ならイチ

「口だわ。」

情景を言うと黒いタキシード姿にしっとりとした胸の上まである黒髪。そして凛とした澄ました顔立ちの中に女性らしさを十分に醸し出す形で着こなしが決まっております、「お姉様」と呼ばせたい、いいえ、むしろこれと呼ばすして何を呼ぼうかという姿だ。

「ねえ、その姿で『君を迎えに来た』とか言ってみて」

「カナンお姉ちゃん、またさっきの怪しい目付きになってる」

「これを元の姿ならともかく女の姿の時に着てもなあ、ということ
で却下」

選択肢その四：ゴスロリの服の場合

フリフリのついた貴族が着そうな服でサイズは正に駆に合わせた様にぴったりである。その姿は美の完成型の一つといってもいいだろう。普通なら妖艶さが混じる所だが着こなしてみると不思議と生来の凛とした顔立ちとみずみずしい黒髪が相まって清楚さと可憐さが際立つ姿となった。

「この服は洋服を運んでくれた店員さんがたまたま持っていた服を買ったものだわ」

「全部女装じゃねえか、嫌だ」

「なら、そのミニスカ浴衣を乾かして着るしかないわ」

「うつ、ならこのゴスロリ服でいい、何故かアリスと色彩が一緒なのが気になるがな」

「えっ、そうなんだ、なら買ったのは不味かったかしら」

「どうして、そう思うんだ」

「……えっと、まあ、後で分かるわよ。それとお姉さんからのちよつとした忠告よ。そのアリスさんとはこれからもすれ違いや時には喧嘩も色々あるとは思っけど、本当に大切なのはね、相手のことを想う気持ちいいえ、絆を行動だけでなく言葉でも気持ちをほっきり伝えないと伝わらないわよ」

「……ああ」

「多分、駆君はどこかの鈍感な人達とちがって分かっているとは思っけどね。さっきのワイシャツ姿で『いいよ』とかタキシード姿で『君のことを迎えに来た』とか言ったら一発なんだけどね」

「お姉ちゃん、せっかくのいいこと言ったことが台無し」

「……へくしゅ」

「大変、身体が冷えてしまったみたいね……早く温泉に入って身体を温めないといけないわね」

温泉の暖簾の前に行くところは見事に大きく赤い文字で『女湯』と書かれていた。

「俺は男だ。……男風呂の方に……」

「駈君、今、君が男風呂に行った時のことを想像してごらんさい」

「……ああ」

「はい、ストップ。分つたでしょう、ハイエナのごとく襲われるだけよ、さあ入りましょう」

と言って無理やりに駈君を女湯入口の方に入らされた。大きなサイズはなぜか使われており、若干サイズよりも小さめなバスローブを手渡された。

「さあ、さつさと着替えて入りましょう」

俺が女として着替えるのには抵抗がある……ちょっと戸惑っていると後ろからすでにバスローブをまとったララがやってきて、俺を覗き込んできた。

「まだ、着替えていないんだ。早く着替えないと風邪を引いちゃうよ」

こんな小さい子にまで心配をかけるわけにはいかないからな。俺は意を決してバスローブを着た。

情景描写：ピンク色のバスローブで少し丈が短い為、所々際どい感じで、若いながらも巨乳な姿と流れるような黒い髪凄くマッチしており、まさに姿は湯煙に降り立った女神のよう。

「ララもかつこいいお姉ちゃんみたいに大きくなれるかな」

「ああ、頑張ればなれるんじゃないか」

「わーい、ありがとう」

そして、着替え終わると三人一緒に女湯へ続く扉を開けた。

そこでようやく俺はアリス達と合流したのだった。

幕外伝々スピリットと湯けむり騒動々急（後書き）

というわけで、すべて計画通り着せてみました。
如何だったでしょうか。

退魔師見習いさんの作品『欠陥チート勇者』の方にもこちらの作品
の主人公ツカサが行動してますので、ぜひ読んでくださいね

幕外伝々スピリットと湯けむり騒動々終（前書き）

ちなみにロベルトはその後の答えがなかった為、フラグが不完全だった為に、大怪我だけで済みました。

注：かなりピンクなのでそんな展開は全く駄目駄目な人は必ず引き返してください。

幕外伝〜スピリットと湯けむり騒動〜終

「……………」

僕達の間にも気まずい沈黙が流れた。

というか、僕がアリスさんに襲われているときにカナン、ララと今の僕と同じ姿の本物の駆子さん……………。

たっ、助けて……………。

でも、あの人が話にアリスさんが探していた駆子さんだね。

この場所に来たのなら駆子さんもまずいんじゃない……………。

カナンとララを見ると二人はバスローブを着て……………って駆子さんが僕を……………いやっ、胸を見てるっ。

咄嗟に僕は両手で胸を隠して、3人を耳まで赤くなりながら見た。

「お姉ちゃん達……………誰？」

気まずい沈黙を破るようにララが問い掛けた。

ララは本当に場を癒してくれるね。

同じく幼く見えるアリスちゃんは僕の後ろに抱きついていてちっちゃい胸がずっとな押し付けてきているよ。

「……………か、駆……………様？」

「ああ。アリス……………お前何やってんだよ」

駆子さんが呆れたようにアリスに言うと、アリスはバツと僕から離れて駆子さんの方に行ってくれたよ。

服を着ていたせいとか、お湯を吸って重くなり、途中一回転んでお湯にダイブすることになっていたみたいだけど……。

「か、駆様！ 無事だったんですね！」

「それに比べてお前はハッスルする直前だったな」

顔を綻ばせるアリスちゃんに駆子さんは冷ややかに答えているね。逆に駆子さんの傍に居るカナンとララはゆっくりと僕に寄っていたよ。

「えっ？ なんで二人はニヤニヤしながら近付いて来るの？」

僕はびくびくしながら、手をワキワキとしながら近付いてくる二人に怯えていた。

ちよ、ちよっと二人とも目つきが危ないんだけど……いつも純粋なララちゃんまで……

助けを求めるように周りを見渡してみても、カナミさんはのんきにお風呂に入っているし、

それに二人の方は痴話げんかでもしているみたいだ。

(作者注…この後の駆子については、『欠陥チート勇者』で見て下さい)

というよりそんなことを気にしている暇は僕にはないんだっただ。

「つかまえた、お姉ちゃん」

「ふふふ、なんで周りを気にしているのかしら」

「お姉ちゃんはさっきの女の子の方が好きなんだ……私達を全然見てくれないなんて……」

「いや、そんなことはないよ」

「そうよそうよ、他の娘にかまけて私達の事なんてどうでもいいのね」

「そんなことはないっ……今からそれを示すよ」

二人ともびっくりした顔をしていた。そんなに僕は意気地無しに見えたんだろうか。

「まずは、いつも待たせているララちゃんから……カナンそれではないね」

「ええ、私もララにはいつもお世話になっているからこんな時には譲らないとね」

「ありがとう、お姉ちゃん」

僕はララちゃんと同じ目線まで少し屈み、優しく抱きとめながら唇を重ねてあげた。最初は舌を絡めるのを戸惑っていたようだが、僕が微笑むと力を抜いてゆっくりと絡めてくれた。

「んっ……ちゅ……」

「ふぁ……ツカサお姉ちゃん……」

しばらくたって唇を離すとララちゃんの綺麗な銀髪のように二人の間に橋がかかった。

そしてララちゃんの胸を優しく撫でさするとララちゃんは頭をちよつとフリフリしつつ快感に戸惑いつつ耐えているようだ。

「あっ……んっ……やっ……」

「ふふふっ、僕に任せて」

ララちゃんの青い果実の敏感な部分を舌で攻めると玉の様なララちゃんの身体は徐々に赤みを帯びてきており、目がすでに潤んできていた。

そんな状態でも健気にララちゃんはおぼつかない感じの舌触りで僕のメロンの敏感な部分を舐めて来た。

可愛い姿を見ると胸がキュンとなり、気がつくとい僕はもう一度ゆっくりと唇を重ねていた。

「ちゅく……れろっ……ふふぁ……」

甘く柔らかい吐息がお互いにかかり、唇を離すと、ララちゃんはもうちょっと遠くを見るような感じになりながらも耳まで赤く染めていじらしくこっちを見てきた。

そんな表情を見てしまうと僕はもう気持ちを抑えれなくなってきた。ゆっくりと青い果実を揉みながら一番敏感な部分を舌で……。

「っ……ツカサ……お姉……ちゃん……あっ……ふぁ……そっ
そんな……所まで……だっ、だめえ……」

『18歳未満は見てはメツな展開中』

横でララちゃんは果てており、僕の方も息を荒くしながら振りかえるとカナンは待ち遠しそうに目が潤ませていた。

「おまたせ、カナン、君の番だよ」

「ふぁ……ええ……分かったわ」

「大丈夫かい、きつい様なら止めとくけど」

「いえ、大丈夫よ」

僕はカナンとは先程のララちゃんとは対照的に情熱的な感じでキスをして、ギュッと抱きしめてあげた。

「ぷはっ……ふう、ふう」

「はあ、はあ……この日を、ずっと待っていたわ……ふふふ、私の気持ちも示してあげるわね」

いきなり、カナンは僕のメロンを激しくねぶるような感じで揉んできた。

「ああん、いやっ、くうん！」

僕の方も自分の声とは思えない艶のある喘ぎを温泉の中に響かせていた。

さらに僕の果実を揉みつつ首筋の敏感な部分に舌を這わせてきた。

「ふふふ、こんなに美味しいものだったなんてもっと早くやってあげばよかった」

「いつ、いやっ……そこは……らめえ……」

この快感に身を任せてしまいそうになるが、僕はカナンも気持ち良くさせなければいけないと思い、カナンの耳に息を吹きかけた後、ゆっくりと耳たぶを甘噛みすることで反撃にでた。

「ふあ……ツカサっ……そっ、そこは……あんっ」

「はあはあ……僕ばかり……気持ち良くなっても……っ……だめだよ。……一緒に……ね」

どんどんと僕の方は切なくなってきたのでカナンと再び唇を重ねて、舌を絡ませる。

「ちゅく……ちゅば……じゅる……」

「あっ……んっ……」

ゆっくりと離れた後、お互いの果実をねっとり揉み合った。

「前……んっ……だったら……はっ……立場……んっ……逆……ね」

「ふえ……うっ……きやう……ん」

カナンの方を見るともう我慢できないみたいに目を潤ませており僕はお互いの一番大事な部分を。

『18歳未満は見せられないよー展開中』

「はあ……はあ……」

ララちゃんとカナンは僕の足元で果てていた。

よく見れば駆子さんもアリスちゃんを果てさせて、逃げようとしていた。

あの腐……いやまた殺されちゃう……人相手に……すごいね、僕には真似できないよ。

「ツカサ！ 大丈夫か！」

「う、うん！」

「とりあえず、性転換の薬はアリスの部屋にあるはずだ！ 早く行こう！」

僕は駆子さんの手に取られて温泉から走って出た。

が、脱衣所に一人の少女が居たのだった。

「か、花梨！？」

そう、秋代さんの作品『オリ主によるオリ主の我が儘』の主人公兼ヒロイン。

というよりこの温泉、クロスオーバーしすぎだよ！
いったい何作突っ込むんだよ！

答え：出来るだけ

ふざけないでよっ！！

「か、駆子ちゃんが二人？」

花梨はオロオロと動揺していたが、途端に目の色が変わったよ。
そう、狩られる方から狩る方にね。

「な、何するかしらんがとりあえずやめ」

「やめないよ！ こんな可愛い双子美少女には私の着せ替え人形になってもらうんだから！」

「ごめんなさい。

目が怖いです。

というよりどっかで見た感じにそっくりだよ。

「ゲシュペンスト、ヴァイスリッター、アルトアイゼン、アークゲイン、フェイクライド、アルクオン、私の着せ替え人形を捕まえて
！！！」

花梨がそう言った瞬間、周りの空間が裂けて四方八方からロボットが襲い掛かってきた。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ
あ！！！！！！！」

僕と駆子さんの悲鳴が虚しく脱衣所に響いた。

その後、僕達は花梨に12時間の間、着せ替え人形にされた。

アリス達が僕達を見つけてくれなければ……………ぞつとするよ。

その時の話は二人とも一切語らなかったが、花梨さんから『双子のプリンセス』が最高だったわという話があったけど、これはまた別のお話だね。

ちなみにカナミさんはずっとのんびりとお風呂に入っていたらしいよ……………。
少しは心配してほしいよ……………。

後日談だけど、僕が性転換薬で駆君と一緒に駆君の姿になった途端、『盟主』アリスが現れ、僕を拉致して元の姿に簡単に戻したのだった。

ただ、それ以後、『盟主』アリスの秘匿蔵書が一つ増えたのはここだけの内緒である。

幕外伝々スピリットと湯けむり騒動々終（後書き）

もし、規制に引っかかったら消しますね。

ただ、私のピンク力はこの程度です。

他の人はすごいですよね

五章3話 修理と魔獣退治（前書き）

ながらく、本編についてずっと先延ばしにしておりました。申し訳ありません。実はこの空白の間に他の作者さんの外伝に登場したり、他の作者さんと皆さんには見せられないレーティングでお話をやり取りしたりしていたのです。

もし、ご要望があればそのうち手直ししてどちらかの作者がアップするかもしれませんね。

五章 3話 修理と魔獣退治

僕がエリカから解放されてから宿のおばさんに聞くとカシウスさん達は中庭で棒術の手解きをダンさんから受けているとの事だ。僕が中庭の方に向かうと向こうの方から棒の振る音と「えい、やあ」というカシウスさんの掛け声とそのちよつと遅れて「えい、えい」と言う可愛いエステルちゃんの声が聞こえてきた。

「基本的には棒の使い方は今の流れですが、円の動きを意識せずには体得出来れば更に幅が出てきます。カシウス殿は元々剣術をしている為、基礎は出来ており、その型を繰り返していけば上手く扱える様になりますよ」

「ああ、ダン殿、ありがとう」

「おお、ツカサ大丈夫だったか？」

「えっと、まあ大丈夫には大丈夫だったけど……あんまりまたしたくはないかな」

「ツカサ君かな、すまなかつたね。エリカも僕が怪我をしてから色々ストレスが溜まっていたからね。君が本当に来てくれて助かったよ」

「あはは、えっと……どういたしまして。ところで、カシウスさん、温泉小屋の所にいるモノについては聞きましたか？」

「ああ、ダン殿の手解きが終わったら退治に行こうかと考えていた

所だ、ツカサお前も一緒に行くか？」

「うん、もちろん」

「ダン殿、すまないがエステルを宿で見えておいてくれないか？」

「はい、分かりました。エステル君もいいかな？」

「はいっ、おとーさんもツカサお姉ちゃんも怪我しないようにね」

「「うん（ああ）」」

そんなこんなで僕とカシウスさんは一緒に温泉をくみ出すポンプ小屋に向かった。ポンプ小屋は宿から少し離れた所があり、近づくとき中からゴソゴソと音がする。

「やっぱり、まだ中にいるみたいですよ」

「さっさと悪いが、追いつことにしよう」

「うん、じゃあ、僕が開けるからカシウスさんは援護をお願いします」

「ああ、まかせておけ」

ガチャッと扉を開けると、紅いもこもことしたものが一匹と黒いもこもことしたものが三匹いきなり僕達の方に襲ってきた。

「俺が黒い方は引きつけるから、ツカサは紅い方を任せた」

「うん」

まず、僕は襲いかかってきた紅い角の生えたモノにナイフを投げつつ、その勢いで身体ごと左斜め前に前転した。僕の髪を何本か巻き込んでその物体は横を突撃していった。

起き上って、向こうの方を確認すると……あれは確かヒツジン……それも紅いやつだ。おそらくレッドヒツジンで、多分紅いし角があるから他のヒツジンより性能が1.3倍ぐらい強いのに3倍の強さだっって言われるんだ。しかも額の角の部分にナイフが刺さって、さらに紅くなつて興奮しているよ。

「わわっ、危ないよ」

今度は何か小さな竜巻の様なものを飛ばしてきた……『ヒツジン旋風波』だ。咄嗟に左に避けたけど、ちよつと右腕をすりむいちゃったな。

僕の方も反撃で今度は足を止めないとあんなに早く襲つて来られたら今度は避けれる自信がないしね。僕は避けて体勢を立て直した後、紅ヒツジンの両足にナイフを投げた。綺麗な斜線を描いてナイフは紅ヒツジンの両足に刺さったが、まだ致命傷ではなく若干動きが遅くなっている程度だ。

「今度はくるっ」

いきなりキューキューといきり立つと僕の方に紅ヒツジンは飛び掛かり、ナイフが刺さっているにも関わらず三度蹴ってきた。『ヒツジン三段蹴り』だ。僕は右腕を盾にして何とか防いだが、ヒズメの跡が右腕にくつきり残っており、痺れてしばらく使い物にならないだろう。

しかし、怪我をした足で攻撃をして奴も痛がっているみたいだし、僕は残った左腕で思いつきり腕を振りかぶり、ナイフを紅ヒツジンに向けて放った。それは、紅ヒツジンの胸に見事に吸い込まれて行き、あっけなく紅の物体は破裂して、パーンとクオーツ（作者注：換金アイテムの様なものです）を吐きだした。

「ふう、危なかったよ、カシウスさんの方はどうかな？」

僕がカシウスさんの方を見ると、カシウスさんはどうも練習相手としてゆっくりとしているらしく棒を円状に回しつつしているとブラックヒツジンも警戒して近づいてカシウスさんの周りをゆっくりと回っているようだった。

僕の方が終わったのを横目で確認すると、棒を回転するのを止めた途端、ヒツジン達はカシウスさんに襲い掛かってきた。

えっと、あっという間に倒してしまったよ。えっと、解説をすると一匹目がカシウスさんを蹴ろうとすると、ジャンプして避けた。次に二匹目が飛び掛かろうとすると、一匹目を踏み台にして二匹目を棒で一撃で熨してしまった。続いて、一匹目も降り際に棒で熨して、三匹目は恐れをなして逃げて行ったよ。

「まあ、こんなものかな」

「すっ、すごい……やっぱり達人なんだ」

「いや、これでも俺はまだまだだ、上にはまだ化け物があるもんな」

とにやりとしながら謙遜していたけど、やっぱり余裕があるって言うのか格が違うね。

「さて、ちょっと中を掃除した後、修理できる人呼んで来ないといけないね」

「その前に手当てをしないといけないな、腕がまだ痺れているんだろっ」

「え〜と、はいっ、その通りです」

「後のことは俺がやるからまず宿屋の方に行って手当てをしてきなさい」

「はい」

ポンプ小屋の修理はカシウスさんに任せて僕は一旦宿に戻った。するとサングラスをかけたよく見なれた女の人と男の人が驚いたような感じで救急箱を手に僕に駆け付けた。

「こんなに怪我しちゃって、すぐに手当てをしなきゃいけないわ」

「ああ、俺にまかせろ」

「……カナン、ロベルト……それはツツコミ待ちということではないのかな？」

「私はカナンという人物ではないアルよ」

「おつ、俺もロベルトという人物ではない」

「ふう、怒ってないからバレバレなのは見て分かるからね」

「はい、ごめんツカサ」

「ああ、すまなかった、ツカサ」

「謝らなくてもいいよ、心配してついて来てくれたんだからね。せっかくだから手当てをしてもらってもいいかな」

「ああもちろんだ」

二人に右腕の手当てをしている間にポンプ小屋の修理の方もラッセル一家のおかげで無事終わったみたいだ。故障の原因はヒツジンの毛がポンプに詰まったからだそうだ。さて、打ち身にも効くらしいし温泉が楽しみだよ。

五章3話 修理と魔獣退治（後書き）

戦闘シーンについてちょっと描写を変えてみました。
こんな感じでいいのでしょうか……アドバイスがあると嬉しいです。

五章 4話 悪夢と温泉療治（前書き）

長らく主人公が外伝にて死亡しておりまして、状況が分かるまでは更新することを控えておりました。

お待ちいただいた方々には大変ご迷惑をお掛けしました。

作中のように男湯に女の人が入るのは県によって法律が違いますので、自分でちゃんと確認してから入りましょう、くれぐれも捕まらないようにね。

明治時代に混浴が禁止されたというのを初めて今回知りました。

五章 4話 悪夢と温泉療治

近頃僕には知らない間に様々な記憶が増えていることがある。例えば、温泉で女神の様な綺麗な女の子に襲われそうになったり、カナシと少し大きくなったララちゃんと……あうう……その、ちよめちよめなことをしたりした記憶がぼんやりとある。

それに、文化祭に参加して喫茶店でお手伝いをしたり、みんなでじやがアイスを食べたり色々な楽しい記憶もいっぱいある。（作者注：Arishiaさんの『神様の力で異世界へ〜チートってありますか?〜』を是非ともみてね）

さらに遊戯王というカードゲームに僕が参加した記憶すらもいつの間にか増えていた。（作者注：秋代さんの『魔法先生ネギま!〜三人の転生者〜』も是非ともお勧めですよ）

何でこんな記憶が増えているんだろう……そう考えながら、傷の手当てを終えてから温泉の方に向かって……いきなり、後ろから捕まえられた。

「つゝかゝまゝえゝたっ」

「うわっ、現れたよ」

「なによ、お化けみたいにく、やっぱりいいわね。この肌触り……すべすべ〜」

「……っ」

まったくもう怪我もして疲れているんだから離してくれればいいんだけど……っとならなかつた。

僕は咄嗟にエリカの腕から抜け出し、紺色の『男』と書かれた側に逃げ込んだ。元々、男だからこっちに行くべきだよ。後ろの方で舌打ちしている声が聞えるけど気のせいだよ。

暖簾を通って中に入ると……三人のバスローブ姿の男の人……つまり、『ロベルト』、『ダン』さん、『カシウス』さんと目が合ったよ。

まず、口を開いたのはにやりと笑ったカシウスさんだった。

「なかなか大変だったようだな」

「うん、こっちで入らせてもらってもいいかな……あつちだと……襲われちゃいそうだからね」

そう言うと、小さめのバスローブをロベルトが僕の方に投げてください。

「それをちゃんとその隅で着るのならこっちでも俺はいいぞ」

ダンさんも笑いながら言ってくれた。

「エリカの相手は大変だったろう、ツカサ君さえよければ僕もいいよ」

「……三人ともありがとう」

そういつて僕は渡されたバスロープを持って隅の方の三人から見えない場所でバスロープ姿に着替えた。三人は向こうの離れた所でごちやごちやと話しており、時々笑い声が聞えてきた。僕は急いで着替えて、バスロープをしっかりと着こんで三人が話している所に向かった。

「お待たせしましたっ！」

「……おおっ、きたか（ね）……」

「じゃあ、早く入ろうよ」

「そんなに急ぐと滑ってしまっぞ」

「まあまあ、温泉というものは心がはしゃいでしまうものですよ」

「ツカサ、一緒に行こう」

「うん、ロベルトっ」

ちよつと、恥ずかしがりながらロベルトは手を差し出してくれた。僕はロベルトの手を取って連れ添ってお風呂場に入っていた。ただ、後ろで、二人の笑い声が聞えたような気がした。

お風呂場を見ると身体を洗う所と大きなお風呂が一つ、それと外の露天風呂へ続く扉が湯けむりの中に見えた。

銭湯でも温泉でも、まず身体を洗うこと！……これが鉄則だね、なぜかというと身体に付いた汚れがお風呂の中に入っちゃって後から入る人に迷惑をかけちゃうからね。

さて、身体を洗わないといけねえね。今までの旅ではお湯につけたタオルで身体を拭いたり、水浴びとかしていたけど、しっかり洗わないと今までの汚れや疲れが落ちないからね。

みんなで背中のかすりあいつことかして楽しく過ごしたよ。色んな記憶のお陰で、女湯や露天風呂の方からはよくない気配がしたのに気づいたので今回はパスしたよ……銭湯は湯気のマークの通り三回入るのがいいみたいだからね。後にでも露天風呂に入ろう。

お風呂上がりにはやっぱりあれだよ……三人と一緒に風呂上がりに例のモノを飲んだよ。三人は『コーヒー牛乳』で僕は『フルーツ牛乳』だったけどね。

さて、部屋に戻って僕は一旦休むことにしようかな。

「カシウスさん、僕は先に上がって眠らせてもらっけど、いいかな？」

「ああ、俺はエステルを待ってから上に行くでしょう」

「ダンさん、ロベルト、おやすみなさい」

「おやすみ（なさい）」

僕は部屋に戻ると疲れていたせいかすぐに眠りについた。

その日、僕は夢を見た。その夢がまるで僕の未来を暗示しているかのようにであった。(作者注：退魔師見習いさんの『欠陥チート勇者』のシヨタロリクエストを見て頂ければこの状況がより分かりますよ)

以前乗っていた、飛行船トワイライト号で僕は爆弾の廃棄しようとしたのに失敗して爆発してしまった。

咄嗟に僕は失いつつある意識の中”盟主”アリスを庇って抱き止めた。

次に目が醒めるた時には”盟主”アリスと僕は一緒に飛行船の残骸の大きな板に捕まって波の中に漂っていた。

なんとか、僕は遠くに見える島影まで”盟主”アリスに負担をかけるないように必死にただひたすら身体を動かした。

血はでてボロボロだったけれど、それでも助けることができるなら僕の命ぐらいは安いと想い……”盟主”アリスの持ち物が輝いて身体に少し力が湧いて来てくれた。そして、身体をなんとか動かさ……そして浜が見えた時に意識がプツンと途切れてしまった。

それ以後、僕は声は聞え、映像は見えるが、操作できないロボットのようになってしまうた。

”盟主”アリスはどうかして僕を生き返らせようとした……しかし、僕がいくら叫んでも喚いてもそのロボットは何も反応しなかった。

だから、”盟主”アリスは僕をなんとかする為に自分の思い通りにする人形にした。それは人形をなんとかして生き返らすために生き残らせる手段としては、僕にとって妥当なものだと思った。

ただ、面白いから……サプライズの為か分からないけど、”盟主”アリスは人形に勇者組の一人を襲わせた……おそらく人形を意識を戻すための何かがあるのだろう。

でも、僕は、こんな風に強くはなりたくはない。それになぜ殺し合う必要があるのだろう。僕が一番大切にしているのは話すことだ……それで解決できるのであればいいじゃないか……最初から力を振りかざすなんて最低の行為だ。

『やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろっ！！！！』

『止まれ、止まれ、止まれ、止まれ、止まれっ！！！！』

『今止まらないでいつ止めるんだよっ！！！！！』

そんな僕の想いや叫びも空しく、戦いは続き……そして相打ちに近い形で最悪の結末を迎えるのだった。

その時の人形は狡猾にも8本のナイフの時間を止め、他のナイフを囮にして相手にナイフを当てることになった。

ナイフを投げて当たる瞬間に相手が殺意の籠った眼で人形を見ると人形の身体もなぜか怪我を受けたんだ。そして、人形はナイフを投げ、相手は目をつむった。しかし、相手の恋人がそのナイフを庇っていったんだ。

「あああああああああああああああああああああ！」

そして、最悪の呪詛を吐いた人形を、この悪夢をようやく相手が解放してくれたんだ。

「はあはあ……はあはあ……はあはあ……」

僕は、ベットの上で起き上り……身体を抱きしめて震えが止まらなかった。

身体も急に寒くなり、暖かい所に無性に行きたくなった。だから、夜のお風呂に向かった。

何も考えないようにして女湯の着替え場で着替えて身体を軽く洗ったあと、露天風呂の方に向かった。

湯けむりに包まれた露天風呂は夜中である為、誰もいなかった。そのことが今の僕にとってありがたかった。

そして、お風呂の中に入るとさっきのことを鮮明に思い出してしま

った。

「僕は……ぼくはっ……なんてことを……っ」

僕はあんな風にいつか大切な人をこの手で殺してしまうかもしれない……そして、それを喜んでもう人形ぼくがいるとしたらどうなる……だから人と一緒にいるのを恐れてしまおう『僕』がいる。

誰ともつながりを持たなければ……大切な人はできないでもいい……人とのつながりさえなければ悲しむことはないのだから……

でも、でも……僕は……ぼくは……ぼくはっ、それでも……一人ではいやなんだっ……一緒にいたいんだよう。

僕は目から涙をぼろぼろと流し、そして温泉の波の中に落ち、僅かな波紋を生み出したがすぐにかき消えた。

その時後ろから優しく僕を抱きしめてくれる人がいた。温泉の湯気で顔は見えないけど……暖かい……そして、何度も『大丈夫だよ』と言ってくれた様な気がする。

気がつくと後ろの人はいつの間にかいなくなっており、僕は一人温泉の中にいた。ちょっとのぼせてしまったようだ。でも、さっきの人のお陰で僕はいつも誰かに見守られているんだということが分かった。ありがとう……だから僕は心も身体も少しづつでもいい強くなっていこう……それがこれからもできるであろう大切な人を守るために必要なことなのだから……

五章 4 話 悪夢と温泉療治（後書き）

最後に出てきた人についてはまたいつか出すかもしれないです。

五章5話 朝食とぐるぐる（前書き）

『ルロツクル訓練場』：空の軌跡のゲームでもSCの最初^{セカンドチャプター}にエステル（主人公）とアネラスと一緒に訓練した訓練場である。対テロ組織などに対しての訓練設備なども整っており、総合的に訓練できる遊撃士訓練場^{フレイサー}である。『バルスタール水道』と『サントクロワの森』と『訓練所宿舎』と『グリムゼル小要塞』の四つのエリアに分かれている。レマン自治州とよばれる大陸中西部に位置する州であり、ベール王国やエレボニア帝国から離れた場所にある。

むう、私の小説の中よりも香崎 真琴さんの『転生夫婦の並行世界旅行』でのツカサの方が生き生きしているなあ。

五章5話 朝食とくるくる

僕はしばらくして露天風呂を出た。そして、僕が渡り廊下を通って部屋の方に戻ろうとすると夜の酒場に月の光の陰に一人佇む男の人がいた。

……カシウスさんだ。

「どうした、こんな夜更けに一人でお風呂とは……」

「ごめんなさい、嫌な夢を見てしまって……お風呂に入って汗を流していたんですよ」

「それにしては……目が紅くなっているようだが……何を見たんだ」

「……」

「我慢しないでいいんだぞ」

「……っ……」

僕は、カシウスさんの胸を借りてすぐに涙が決壊してしまった。本当に近頃なぜか涙がよく出るようになってしまった。そしてしばらく泣きやむまでカシウスさんが僕の頭をなでていた。最近これと似たような体験をしたような気がする……うん、確かその時も頭を撫でられたり、ほっぺにちゅーされたような……（作者注：詳しくは香崎 真琴さんの『転生夫婦の並行世界旅行』にてあまゝい空間

が味わえますよ)

「ツカサ、お前は他人に対しては気がつくことは多いが、自分自身のことについてはまあ、ある意味無頓着だな」

「……………」

「ツカサ、お前自身の魅力いや、影響力カリスマといった方がいだろうか、それは自分では考えている以上に他の人に対して持っていることな。……………まあ、分かりやすく言うとな、『もつと自分に自信を持ってこつたな』」

にやりと笑ってカシウスさんは優しく僕に語りかけてくれた。僕の方はおそらく一瞬きよとした顔になっていた。

「……………僕には影響力カリスマを持っているかどうかは分からないよ。でも、少しずつでもいいから自分に自信をつけて行きたいです」

「ああ、そうだな。明日はともかくここでもう一日休め。そして、明後日に訓練場に向かうことにする」

「……………僕の為にすみません」

「いや、俺達も少し疲れがたまっているからな。たまには骨休みをするのもいいだろう。それにな、温泉の女将マオさんから温泉を修理する手伝いをしてくれたお礼としてもう一泊はタダになっているんだぞ」

「えっ、そうなんですか？」

「ああ、だから心配するな」

「はい」

僕はちょっと気になったことがあって聞いてみた。

「えっと、訓練場ってここじゃないのですか？」

「ああ、違うぞ。そうか言っていなかったな、行先はだな、『ルロック
ツクル訓練場』と呼ばれる所だな、ちょうど改修が終わった遊撃士
訓練場なんだ」

「…………えっと、エステルさんとアネラスさんがくんね…………とっと」

「エステルをどうするって？ ラッセルさんの所に一時的に預かってもらうことにしてもらった」

「はい、それはよかったです（よかった、ばれていないみたいだよ…………）」

「さて、そろそろ湯ざめするといけないな、部屋に戻るかい」

「はい」

そして、僕とカシウスさんは一緒に部屋に戻って、すぐにベットに横になると眠ってしまった…………今度はなぜか知らないけど安心して眠ることができた。

朝になるとすがすがしく感じた、起きて背伸びをするともう二人は部屋にはいなかった。机の上に置き手紙が置いてあり、それには「先に下りて朝食を先に食べておくぞ」とあった。

着替えてから僕も一階に下りて行くとカシウス父娘はテーブルでお茶とオレンジジュースを飲んでいた。

「おはようございます」

「おはよう、ぐっすりねむれたようだな」

「ツカサお姉ちゃん、ねむれたようだな」

「あははっ、うん、ねむれたよ」

「ここは朝食はバイキングだから、隅の方で色々取ってくるといいぞ」

「はい」

そう言って、僕は隅の方に行こうとしたら見覚えのある声が聞こえて来た。

「ゴルンの兄貴、やっぱり、朝食のパンにはオレンジジュースが合うでござんすよ」

「いや、なんといおうと、俺は朝食のパンには牛乳だな」

「んっ」

「バルンは両方か……それはしかたねえが、もしオレンジジュースがなかったらどうする気だ、ザルン」

「うっ、痛い所疲れるでざんすね。そんな場合は水かお茶ざんすよ」

「それじゃあ、必ずオレンジジュースじゃねえじゃねえか」

「ならいいですけど、乳製品ばかり取っているとバランスが悪いでざんすよ。パンに塗るバターもデザートのカリームもヨーグルトもそして牛乳まで飲んでしまえば……ほぼ全部乳製品でざんす」

「んっ」

「えっ、特選隊はジュースも含まれているって……バルンがそう言うんじゃしかたねえな」

なんで、ゴルン三兄弟がギニュー特選隊なんて知っているんだ……あれはこの世界にないはずだが……何か本にでも書いてあったのかなあ。でも、色々と突っ込みたくなるのでこの空間には近づかないようにしよう。

朝食のバイキングメニューを見てみると、わふーだ。久しぶりにご飯とお味噌汁と塩鮭とお漬物とサニーサイドアップ（注：目玉焼き）とお茶で朝ご飯にするよ。

「いただきますっ」

「ほう、えらく東洋っぽい食事にするんだな」

「だって、これが一日の原点だよ」

「ふむ」

朝食が食べ終わりふと外を見ると近くにねこちゃんがいたので、喉を撫でてあげるとゴロゴロと気持ち良さそうにした。猫にもようやうこのリベール王国に平和が訪れたことが分かっているみたいだった。

その日はゆったりとみんなで露天風呂に入ったり、お昼から空がゴロゴロと雷の音がしていたのでベットでゴロゴロしたりと、久しぶりにくつろいだ時間を過ごしたのだった。

五章6話 王都と芋アイス（前書き）

料理と効能解説：

『スペシャルアイス：HP 1000回復、CP 25回復』 『アップルアイス：HP 300回復』 『オレンジアイス：HP 300回復』

『アツアツ芋フライ：HP400回復、「凍結」解除』 『フライドポテト：HP 100回復、MOV+1』 とその材料のこの世界名産のほっくりポテト

今回はちよつとだけクロスしました。そして、更新遅くて短くてごめんなさい。

五章 6話 王都と芋アイス

次の日はいかにも出発日和というちょっと薄い雲が張っている晴れだった。

「いよいよ出発だよ、マオさん本当にお世話になりました」

「ツカサちゃん、カシウスさん、こちらも修理をしてくれて助かったんだよ。それにみんな元気になってなによりだよ。あんたたちもまた機会があつたらおいで」

「マオさんもまた会う時まで元気でいてくれな」

そう言ってみんなで笑って僕達は出発した。えっと、カナンとロベルトの二人には僕達はリベール王国を離れた場所に訓練に行くことを昨日伝えたよ。そうしたら、今日は二人とも先に出発しているみたいだったよ。一緒にお別れ言いたかったな。

さて、気を取り直して、王国のセントハイム門を通って王都グランセルに無事到着した。その間の道のりは本当に魔獣がいるのかつてぐらい安全快適でまるで空の女神様エイトスが僕達の旅立ちを祝福しているようだった。

王都グランセルはもうすでに再建が着々と進んでおり、活気に満ちあふれていた。まさに平和が訪れ、そしてその芽生えが確実に進んでいることが目の前に見えるのだった。

カシウスさんは遊撃士協会フレイサーギルドで夕方まで用事があるらしく、僕達は公園の所で待ち合わせすることになった。

そうだ、この場所はゲームでもすごく重要なイベントが有った場所だよ。なにせ主人公エステルと主人公ヨシユアが分かれるきっかけになった場所なんだからね。そういえば、その時アイスエステルを主人公は買いに行ったんだっけ。

アイスと言えば、文化祭の『じゃがアイス』美味しかったなあ。また食べたいなあ。

「じゃがアイスはいかがですか？」（作者注：Arishiaさんの『神様の力で異世界へ〜チートってありですか？』で出会った、熊海苔さんの『世の中平和なのが一番いいと、今更思う』の主人公達の秋とメグです、是非、どちらも見てね）

「なんで、秋さんもメグさんもここにいるの？」

「ツカサのじゃがアイスを求める声が俺達を呼んだんだ」

「ツカサさんの声がちゃんと届いたんだよね」

「じゃがアイス同盟、ここに集結！」

三人でそう言っつて、パシつとハイタッチをした。やっぱり、いいよね。僕が食べたいなと思っつていたら二人がじゃがアイスを持っつてきてくれたんだよ、堅い絆で結ばれているんだね。

三人で元気よく売り子をするのとどんどんじゃがアイスは売れて行き、すぐに僕達の食べる分以外はほぼ完売してしまった。

「完売おめでとうっ！！」

三人でそう言って、もう一度、さっきよりも強くパンッとハイタッチをした。

せっかく、この世界に来てくれたんだからね。お二人にこの世界の料理を御馳走しなくちゃね。僕は食材と調理道具を取り出して料理を始めた。

しばらくすると食欲をそそるいい香りが辺りを漂ってきた。

「まずは、秋さんにははいこれっ、『フライドポテト』と『アツアツ芋フライ』、そしてこの土地名産の材料の『ほっくりポテト』の種イモだよ」

「ポテト ポテト ポテト ポテト」

「次に、メグさんには『アップルアイス』と『オレンジアイス』と『スペシャルアイス』だよ」

「アイス アイス アイス アイス」

「二人とも喜んでくれてうれしいよっ。しばらく二人ともこの世界にいれるのかな？」

「すまないが、すぐに帰ってくるように言われているんだ」

「はい、そうなんです。ごめんなさい……」

「そうなんだ、でも来てくれて嬉しかったよ。お陰で元気が出たよ」

「……それじゃ、またね」「」

そういつて、秋さんとメグさんの二人とじゃがアイスで最後に乾杯して別れた。

しばらくして、公園のベンチで待っているとカシウスさんがやって来た。

「どうした、なにかいいことでもあったのか」

「うん、ちょっと前に知りあった友達に再会できたんだよ」

「そうか、それはよかったな」

そういつて、僕の頭をカシウスさんはくしゃっと撫でてくれた、思わず目を細めてしまったよ。

「明日朝一の便で行くことになったからな……今日はホテルに泊まるうか」

「うん、分かったよ……それとね、はいカシウスさん、じゃがアイスどうぞっ」

「ほう、なかなかおいしそうだ」

僕は秋さんやメグさんからもらった簡易型クーラーボックスの様なものの最後に残っていたじゃがアイスを取り出してカシウスさんに渡した。

それを美味しそうにカシウスさんが食べるのを見ながら僕達はホテルへ向かうのだった。

五章6話 王都と芋アイス（後書き）

A r i s h i aさんのレイ君からツカサに称号をもらったよ。

称号：ロリコンマスター

真のロリっ子として覚醒した者に贈られる称号

獲得時のボーナス

ロリコンに対して大ダメージを与えられる。

上目づかいや涙目などの効果が1.5倍になる。

ロリコンに無茶なお願いもできるよつにする。

獲得条件

- 1、ロリキャラになる。
- 2、ロリコンにとってのアイドル的存在になる。

五章7話 助手と臨時教官（前書き）

『エプスタイン財団』：戦術オーブメントと呼ばれる魔法^{アーツ}をできる器具を作り出している機関のこと。遊撃士協会と協力関係にある。^{ブレイサーギルド}
『魔法^{アーツ}』：この世界では戦術オーブメントさえあれば誰でも魔法^{アーツ}を使うことができる。

料理紹介：『匠風ライセンスカレー』：HP1000回復

五章 7話 助手と臨時教官

次の日は朝日が昇る前に空港に行き、『ルロックル訓練場』へと向かった。

空の旅ではずっと飛行船の後ろに流れる雲を僕はぼんやりと見つめていた。

空港に着くと出迎えてくれたのが若い女の人だった。

「カシウス＝ブライトさんとツカサ＝K＝ストレガーちゃんですね。私は訓練場の管理人をしているフィリスです、よろしくね？」

「ああ、よろしく頼む」

「こちらこそよろしくお願ひします」

「カシウス＝ブライトさん、実は、『戦術オーブメント』のことでまだ届いておらず申し訳ないですわ」

「そうか……ならばすぐ飛行船で俺だけ『エプスタイン財団』に行ってくることにしよう、ツカサを少しの間管理人さん、頼みます」

「はい、承りました？」

カシウスさんは急いで飛行船に乗りこんでいって、飛行船が飛び立つて行った。

次に管理人さんは僕の方に振り返って言った。

「そうそう、ツカサちゃんにはお客様が来ているわよ、何と二人もよ？」

誰だろう……僕を訪ねてくれる人は、この前は文化祭で一緒にいた人だったから、今度は人畜さんか優太さんかな？

そう考えながら、訓練場に向かうと、何と管理人さんが言うにはその人は特別臨時教官として訓練をしてくれるらしい……うん、ますます分からなくなってきた。

そして、訓練場に着き、特別臨時教官として来てくれたのが、なんと要君とその助手の久遠ちゃんだった。（作者注：雨季様の作品『チートじゃ済まない』では、作者の陰謀により、リトバスのクド化したツカサは一緒にじゃがアイスを食べたりあそんだりするほどのを書いて頂きました。是非ご覧になってくださいね）

「えっ、要君に久遠ちゃん……なんで、ここに!？」

「ツカサ、おまえを鍛える為に来たんだよ。久遠も遊びたがっていたし」

「クー、ツカサ会いたかったよ」

そう言って、久遠ちゃんが僕に飛びついて来たので、慌てて受け止めたよ。

「時間が一日しかないからな。今日中に俺から一本を取ればツカサの勝ちで、一日が過ぎれば俺の勝ちだ。」

ただ、実践訓練をすれば当然、俺が勝ってしまうから、ハンデを三つつけよう。

まず、一つ目には魔法は使わない。

次に、身体能力を1/4にする（すべてのランクを2下げる）
最後に、俺の武器は銃これ一つとするよ」

「えっと、勝てるかどうか自信がないけど、よろしくお願いするよ」

「ああ、ただ、始める前からそんなでは、あまりよくない。ツカサはもうちよっと自信を持った方がいいよ」

「うん、じゃあ、一本取らせてもらおうよ」

「クー、二人ともがんばれ」

（身体能力75%封印）：（作者注：『チートじゃ済まない』では、解放しかしていないが、あまりにも要とツカサとの実力差がある為、身体能力を抑える為に75%封印：ランクで言うと要の2ランク全能力を下げた）

まず、僕は軽く牽制のナイフを二本投げたが、魔力弾の二連発でナイフを一瞬の内に落とされてしまった。

本当に、強いし、弾を撃つた後にも隙がない……僕は、木や岩の後ろに隠れつつ、何度かナイフを手首のスナップを利かせて投げたが、

予想通り魔力弾で撃ち落とされた。

うーん、本当に一本取れるか自信がなくなりそうだよ……勝つ方法はこの条件なら、いくつかある。

一つ目は、単純で一本を正面から取ること。

二つ目は、魔力弾の撃ち過ぎで魔力切れを起こさせること。

三つ目には、銃を撃たせないようにすれば、攻撃手段が銃しかないから、抑え込めば降伏してくれるだろう。

四つ目には、意表を突くこと。

この中のどれかをやった方がいいのかな……そうだった。

そう考えていると、木の上から要君が僕を魔力弾で撃ってきた。

「策を考えるのはいいが、相手から目を離すのと足を止めてはダメだよ」

「はっ、もうそんな所に……あぶなっ」

僕は、逃げつつ、さっき拾った石を何個か銃を撃たれた場所に投げたが、今度は別の岩の所から撃たれた。

「敵が一か所にずっと留まっているとは考えないことだよ」

「うわっ」

今度は服をかすめちゃったよ……ナイフを何本か投げつつなんとか茂みの中に逃げ込めた。

ふう、どこから撃っているのかもあんまり掴めないよ。

つて、最初の場所から動いていない……魔力弾って自分の意思で曲げて撃てるんだ。

ならば、僕は、茂みを出て移動しつつ、後ろに回り込み、ナイフを要君に投げられるだけ投げた。

しかし、要君は銃から先程より魔力弾の大きい弾を撃つと、弾が分裂して、全部ナイフが撃ち落とされてしまった。

「なっ、そんなことまでできるなんて……要君すごいよ」

「相手のやることに驚いているだけでは、ダメなんだがな」

むう、僕も何か要君を驚かせないといけないな……そう思っていると、アイテムの中に或る物を思いついた。

僕は、持っている黒いゴスペルを要君の後ろに回りつつ発動させた。すると、導力を停止させる光が要君の銃に届いた。

「なっ、銃から魔力弾が撃てない……魔力銃が使えない……ならば

……」

僕は勝ったと思い、要君に突進した。

……しかし……なんと、要君は魔力銃を投げつけてきて僕の頭にぶつけられ、気を失ってしまった。

「魔力銃は武器だから……撃てなくなった以上、投げて武器にすることも十分に考えられたはず……そのことを失念していた以上、ツカサ、お前の負けだな」

目を覚ますと、夜になっておりベットに寝かされていた、そして、横には要君と久遠ちゃんがいてくれた。

そして、僕がベットから急に起き上がったせいか、よろけてしまい、要君の方に倒れそうになってしまった。

そうしたら、要君が慌てて支えてくれた。

僕はそのとき、たまたま持っていた最後のナイフ『フェンリル』を要君に突き付けた。

「まだ、一日経っていないよね……。……でも、やっぱり、反則かな」

「いや、油断していたのは俺の方だったかもな……。確かに一本取られたな、今回のゲームは俺の負けだな」

「ありがとう、要君のお陰で色々勉強になったよ。お礼に……。僕の料理でよければ一緒に食べてもらえないかな」

「ああ、確かにおなかが減ったしな、頼むよ」

「クー、ツカサの料理楽しみ」

つかさは、管理人さんから調理場を借りて、野菜たっぷりの『匠風ライスカレー』を二人の為に丹精をこめて作った。

「クー、大好物です、ツカサありがとう」

「なかなか旨いな」

「二人とも本当に来てくれて嬉しかったよ。食後には、この前食べた、じゃがアイスのバリエーション、味わってみてよ。アイスの上にオレンジソースを掛けてみたよ」

「「美味しい」」

「今日はここに止まるんだよね、なら色々とお話したいな」

「ああ、分かったよ」

「クー、楽しみだよ」

その夜はずっと二人とも僕に付き合ってくれて、要君や久遠ちゃんや僕について色んなお話をした。

二人ともいつも元気でいてくれるといいな……僕は明け方ごろには

いつの間にかうとうととしてしまった。

そして、二人へのサヨナラの挨拶が今回はできずに二人と別れたのだった。

五章7話 助手と臨時教官（後書き）

『フェンリル』：短刀で効果は筋力一割アップ（七つ夜& amp ;
夜つ七さんの『俺の異世界物語』魔理亜作）

厄除けのネックレス：厄をよほどでない限り、避けることができる
ネックレス（雨季さんの『チートじゃ済まない』一条 要作）

ちなみに訓練ではナイフにはカバーがすべて付いています。
魔力弾についてもすべて非殺傷になっております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6881k/>

フラグをたてたいっ！

2010年10月9日07時18分発行